K·A·P くまもと国際建築展
くまもとアートポリス'92

デザイン・コンペティション
DESIGN COMPETITION

KUMAMOTO ARTPOLIS '92

デザイン・コンペティション
DESIGN COMPETITION

ごあいさつ

私共は、1988年以来、「くまもとアートポリス」を推進してまいりました。

その第１期のしめくくりに当たります、くまもと国際建築展「くまもとアートポリス'92」の“まちなみ展”の事業として、デザイン・コンペティションを実施いたしました。これは、「くまもとアートポリス」の基本理念である『都市にデザインを　田園にアイデアを』をテーマにしたもので、２つの部門からなっております。

第１部門の課題は「都市に浮かぶベンチ」、第２部門の課題は「田園に佇むキオスク」です。両部門とも、審査員により実現可能と判断された案については、それぞれ予算の範囲内で実際に製作し、11月のイベントで展示することを条件に募集いたしましたところ、国の内外から第１部門では241点、第２部門では109点の応募がありました。

第１部門の審査は、アートポリスのコミッショナーである磯崎新氏にお願いし、第２部門の審査は建築デザイン会議実行委員会の皆様にお願いいたしました。

審査の結果、第１部門では３点が入選に選ばれ、３点とも製作し、県立美術館分館に展示いたしました。また、第２部門では５点が優秀賞に選ばれ、上位３点を製作し、小国町に展示いたしました。

これらの製作に当たっては、４つの会社に大変なご苦労をおかけいたしましたし、応募者自ら製作を手伝われたり、応募者が所属されている会社や熊本大学の桂研究室など、多くの皆様のご協力があって初めて完成いたしました。また、審査の際にも多くの皆様の献心的なご協力をいただきました。ここに、深く感謝の意を表します。

なお、本作品集には、掲載を望まれなかった方の作品は掲載しておりません。

くまもとアートポリス'92実行委員会

目　次

結果 ……6
第１部門講評 ……8
第２部門講評 ……9
入賞作品……11
１次審査に残った作品……23
応募作品……33
授賞式 ……187
作品展示状況 ……188
応募要項 ……191
応募者名簿 ……195
後記 ……207

■結　果

◆第１部門　課題「都市に浮かぶベンチ」

◇**応募数**：241点

◇**審　査**：日　程／９月10日

会　場／磯崎アトリエ

審査員／磯崎　新

◇**賞**　　：入選（３点）　　賞金

中尾　寛（NAKAO SERIZAWA ARCHITECTS）	50万円
岡本明子（㈱ＤＣ）	50万円
松島弘幸（フリー）	50万円

◇**実　作**：３点とも製作

◆第2部門　課題「田園に佇むキオスク」

◇**応募数**：109点

◇**審　査**：日　程／９月11日（審査方法決定）、９月12日（本審査）

会　場／ＹＫＫ　ＡＰ本社会議室

審査員／建築デザイン会議実行委員会メンバー（淺石　優、大島哲蔵、大野秀敏、奥平与人、北村修一、George国広、妹島和世、新納至門、浜田邦裕、古谷誠章、渡辺　誠）

◇**賞**　：優秀賞（５点）　賞金

＊塚本由晴、貝島桃代（東京工業大学坂本研究室）　〔大野、北村、浜田、古谷、渡辺〕65万円

＊Gin Johannes（Architectural Association of London）　〔淺石、奥平、新納〕40万円

＊佐々木龍郎（㈱デザイン　スタジオ）　〔妹島〕15万円

吉永健一（東京工業大学坂本研究室）　〔国広〕15万円

Taeg Yoshinobu Nishimoto（Taeg Nishimoto＋ALLIED ARCHITECTS）　〔大島〕15万円

※〔　〕内は、「リコメンド」方式による推薦者を示す

◇**実　作**：上位３点（＊印）を製作

◇**１次審査に残った作品**：17点

4　小倉康正（武蔵野美術大学）
11　古河原康正（㈱時間工房）
13　青柳健次（スタジオデコ）
14　秋山雅美、岡崎泰之（㈱アイ・シー・アイ）
31　荒木信雄（㈱豊川建築研究所）
41　川津悠嗣（かわつひろし建築工房）
48　竹内昌義（竹内昌義アトリエ）
49　鈴木正史、石原伸一（㈱大林組）
52　三宅隆史、萬本哲也、高松直美（㈱梓設計）
58　川久保智康（日本大学大学院）、永島元秀（日本大学）
60　白川直行（㈱白川直行アトリエ）
65　河島　康（福山大学）
66　鬼田　勲、中谷篤彦、海土健一（鬼田デザイン研究所）
77　竹下　祥（㈱宮本忠長建築設計事務所）
89　黒川浩之（横浜国立大学大学院）
95　久保田恵子（バオ建築事務所）
109　澤崎　宏、小西由通、梅田健之、富永哲史（㈱計画・環境建築 YAS都市研究所）

■講　評

◆第１部門

私は第一部門「都市に浮かぶベンチ」というテーマのストリートファニチャーの審査をしました。

まず、このような小さなオブジェのような、ベンチあるいはストリートガニチャーというものに、予想以上の沢山の方が応募された、しかも、ユニークな案がこれだけ集まったというのは、やはり、アートポリスの活動に対する関心が非常に高まっているせいではないでしょうか。

審査員として、何を目標に選んだかは、第一にともかく発想がユニークであること、それから後は座れないといけないということでした。

当選された３つの案は、発想がそれぞれ全く違うという点で選んだように思います。応募案の中には類似案もありましたが、そういうものの中では３つの当選案が私の見るところ優れていた感じがいたします。

当選案は、アートポリスプロジェクトで最近完成した熊本県立美術館分館に展示してありましたが、今回は展示目的で当選者のイメージを優先させて制作したとのことでした。若干改造すれば、実際に使えるアイデアになるように思っています。

コンペから展示までの成果は、応募された沢山の方々をふくめた、多くの人達の努力が積み上がったものだと思います。

〔磯崎　新〕

◆第2部門

このコンペの大きな特徴は、審査員の数がずいぶん多いことである。15名（参加11名）もの審査員が、単純な投票や採点方式で望んだ場合、選ばれた案は、無難だが、実はだれも本命とは思っていなかった、などという事も予想された。

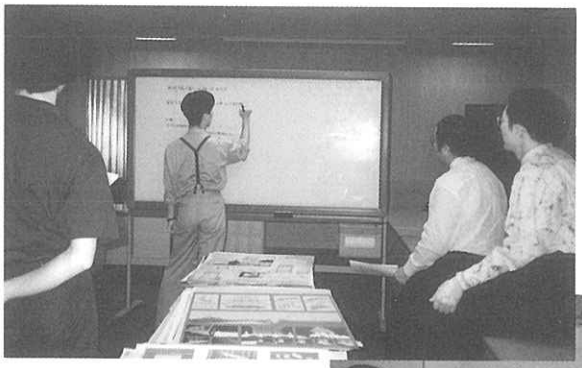
そこで、各種の選定方式を比較検討した結果、各審査員が一案を推薦し、そのリコメンドを公表するという仕組みを考えた。この方式の特性は、誰がどの案を推薦したかを、公にする、という点にある。

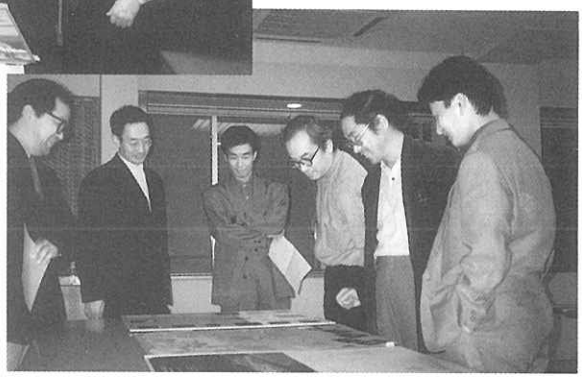
自分の推薦した案がわかってしまうのであるから、審査員も楽ではない。自身の見識を懸けて、優れた案を公正に選ぶことになる。私たちは、これを、「リコメンド方式」と呼ぶことにした。

その結果は、各自のリコメンドがきれいなパターンをみせいている。応募案は幾つかの類型に別けられるが、それぞれの類型の代表者がリコメンドされたようだ。

実際に制作する作品は3点としたため、推薦者数の同じ3点目は、同点投票で決定した。これは小さなコンペではあるが、競技をするに値する案を、できるだけ公正で開かれた審査で選びだそうとする、そのためのひとつの試みであった。

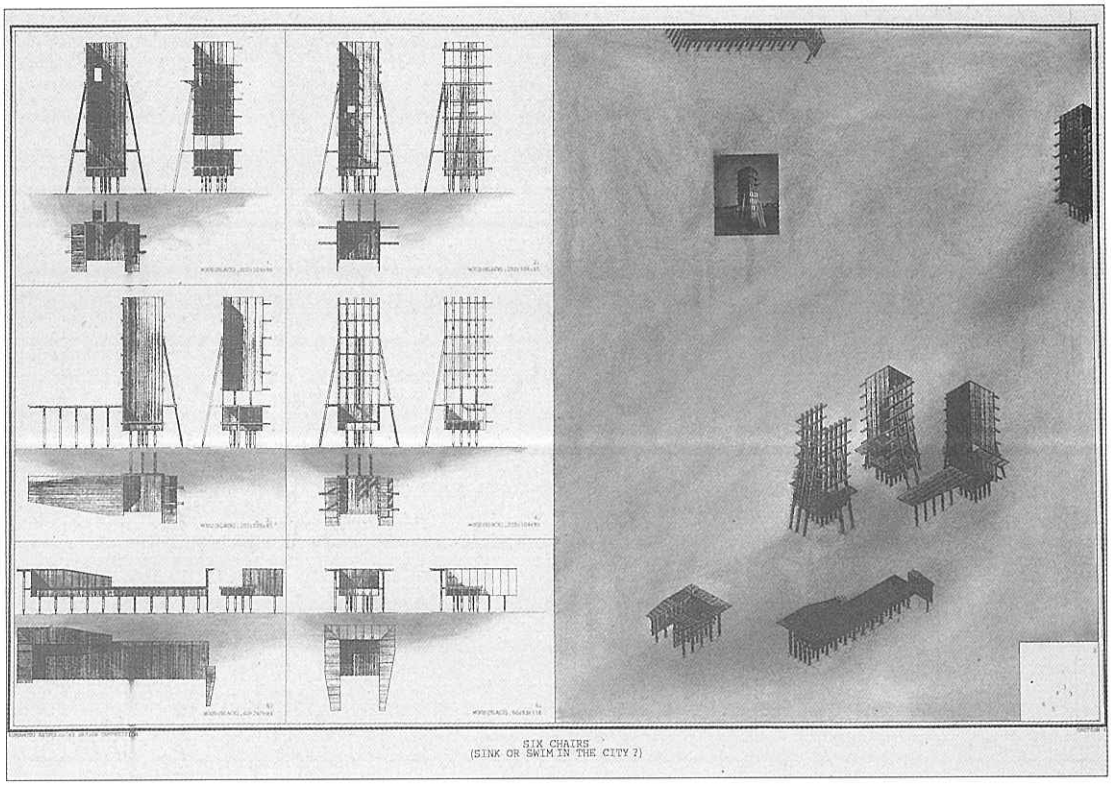
〔コンペワーキンググループ座長：渡辺　誠〕





第１部門　「都市に浮かぶベンチ」
入　　選

026 中尾　寛

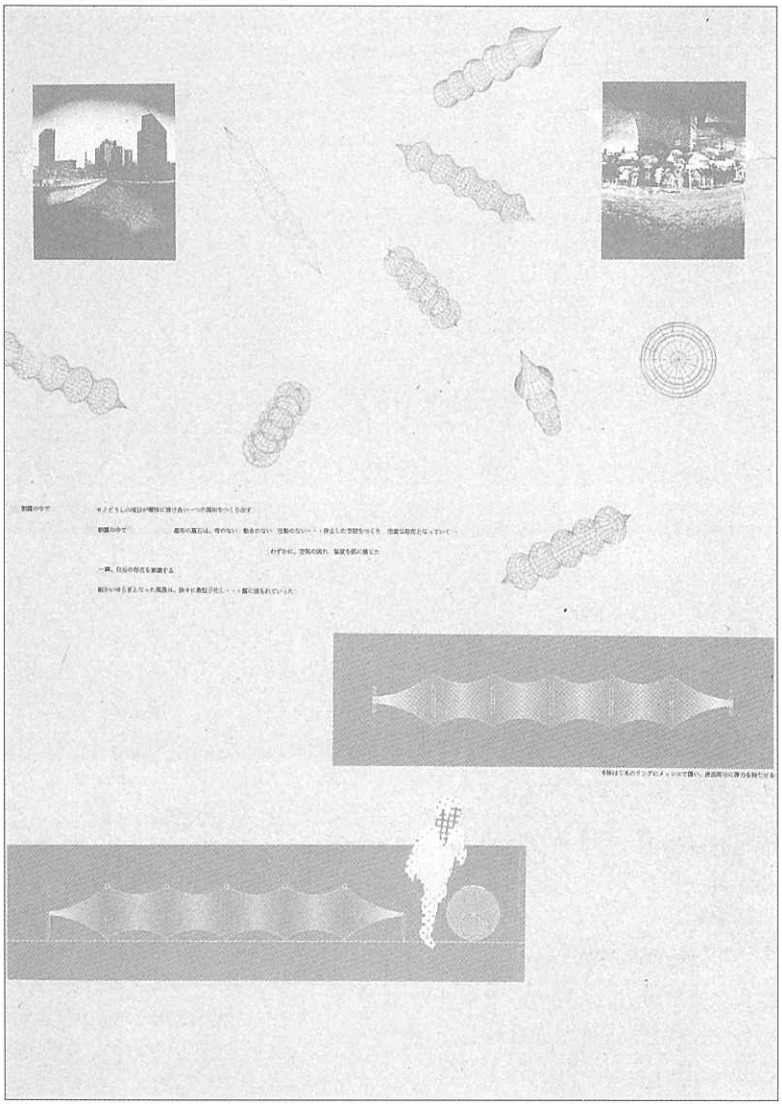


この作品は、「都市に浮かぶベンチ」というテーマにもかかわらず、たとえば現代の都市を象徴するイメージとして流通しているのかもしれない「浮遊感」なるものに同調するということをしていない。と言うのも、そうすることは単なる同語反復に過ぎないばかりか、そうして累積されるイメージは都市空間をより平坦なものに均してしまうだろうからである。むしろ、都市を覆っているそのようなイメージの皮膜に、この作品の重みが僅かながら窪みを空けてみることが出来ないかということを期待した。

ファクシミリによる図面のやり取りだけで、作品のこのように美しい仕上がりを得ることが出来たのは、ひとえに製作に携わって下さった方々のお陰であり、心より感謝致します。

中尾　寛

120 岡本　明子



朝露の中で
　モノどうしの境目が曖昧に溶け合い
　一つの調和をつくり出す
　朝露の中で　都市の墓石は、
　音のない　動きのない　活動のない・・・
　停止した空間をつくり　空虚な存在となっていく
　わずかに、空気の流れ　温度を肌に感じた
　一瞬、自分の存在を意識する
　細かいゆらぎとなった風景は、徐々に微粒子化し・・・
　露に埋もれていった

　本体は５本のリングにメッシュで覆い、座面部分に弾力を持たせる

「都市に浮かぶベンチ」というテーマに対して――――、

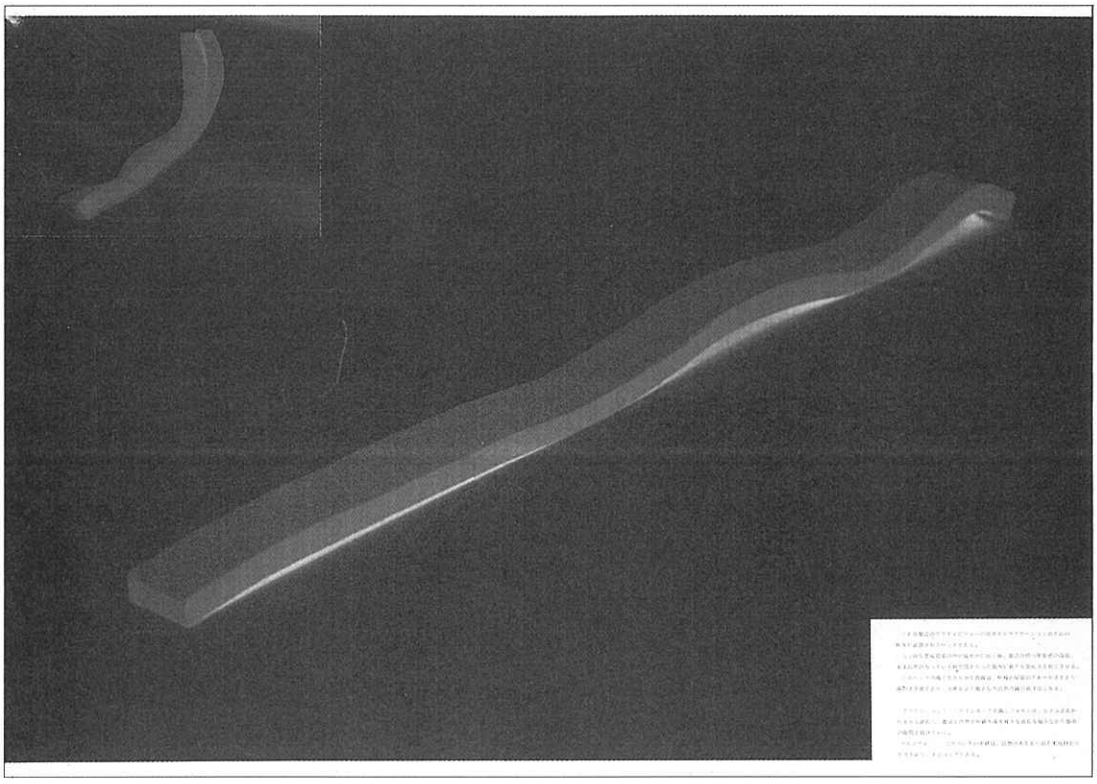
・都市というある空間と人（自分自身）との関係性をつくり出すこと。
・都市と人（自分自身）との〝間にあるもの〟。
・〝間〟に存在する空気を感じること。
・〝空気〟そのものになることで空間と溶け合う感じ。

これらの〝感じ〟をシンボライズしたようなモノ・・・・。
結果、製作したモノは、
薄い膜を押し拡げることで内面に〝空間そのもの〟を発生させることになりました。

最後に、アドバイスを含め多くの支援をして下さった方々と製作に関係して下さった皆様に深く感謝いたします。

岡本　明子

176 松島　弘幸



これは都市のアクティビティーに対するリラクゼーションのための野外に設置されるベンチである。

人工的な都市環境の中に緩やかに吹く風、都市の持つ緊張感の開放、本来自然のもっている時空間を失った都市に新たな息吹きをおこさせる。

このベンチの描くなだらかな曲線は、阿蘇の尾根のたわやかさであり、海のさざ波であり、大地を這う風となり自然の織り成す音となる。

グラデーション・・・サインカーブを描くフォルムは、小さな波長から大きな波長へ、都市と自然とが織り成す様々な波長を描きながら都市の隙間を抜けていく。

マテリアル・・・このベンチの素材は、自然の木をあつめた集成材からできており、モノコックである。

このベンチは、熊本アートポリス計画の一環である「都市に浮かぶベンチ」をテーマに行われたデザインコンペで、この計画をプロジュースされた磯崎氏の審査によって選考された3つの入選作のひとつである。

当初の案どおりの完成度とクオリティーを実現するために、短い期間で実際にモックアップではなく、実用的に機能するように仕上げるために、少なからず厳しい条件で製作は進められた。

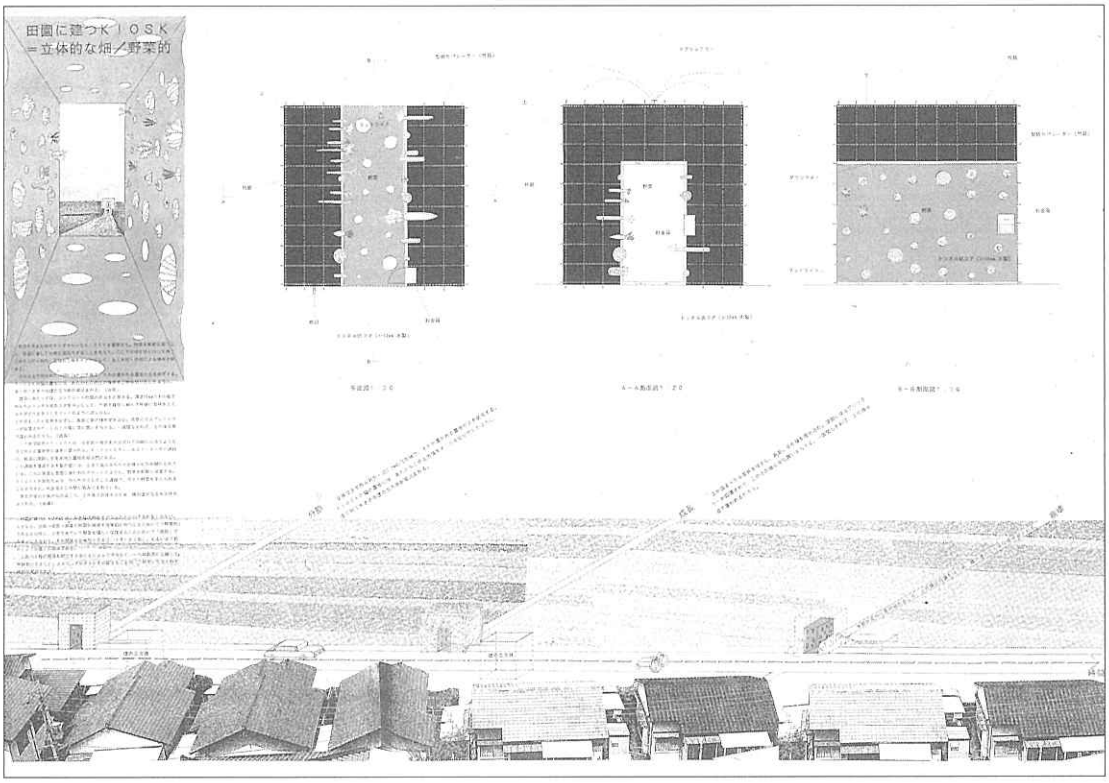
このような状況を乗り越えて実現できたのは、おなじく、熊本アートポリスに参加し、清和村文楽館を設計された石井和紘建築研究所の支援と、直接ベンチの製作に力を注いで頂いたＡＢＣ開発との協力なしでは、とうてい不可能であったであろう。

このベンチは熊本アートポリス92展覧会で熊本県立美術館分館に展示されたのち、アートポリス実行委員会と県立美術館分館の関係者の深い理解により、その美術館に常設展示されることになった。

松島　弘幸

第2部門　「田園に佇むキオスク」
優　　秀　　賞

062 塚本　由晴
貝島　桃代



野菜を売るためのテンポラリーなKIOSKを提案する。野菜を新鮮に保つこと、容易に壊して大地に還元できることを考えた。ここでは畑を切り出して地上に持ち上げられた、立体的な畑をイメージして、土と木材・竹材による構成を試みる。

全体は土で作られた一辺2.7mの立方体で、それが置かれる農地の土を使用する。KIOSKの脇の農地には、あたかもこの土の塊をそこから切りだしたように、全く同じ大きさの虚の立方体が堀込まれる。(分節)

建設にあたっては、コンクリート打設の方法を応用する。厚さ50mmの木の板で作られたトンネル状のコアを中心にして、竹筋を籠状に組んで外側に型枠をたて、水を混ぜた土をコンクリートのように流し込む。

土が固まったら型枠をはずし、表面に草の種を埋め込む。頂部にはスプリンクラーが設置されて、この土の塊に常に潤いを与える。一週間もすれば、土の塊は草で覆われるだろう。(成長)

この野菜販売のKIOSKは、住宅街や商店街が途切れて田畑に出会うような、市街地と田園地帯の境界に置かれる。KIOSKの中心にあるトンネル状の通路は、畦道に接続して市街地と農地を結ぶ門となる。

この通路を構成する木製の壁には、土まで掘り込まれた大小様々な穴が開けられている。これは適度な湿度に保たれたポケットのように、野菜を新鮮に保管する。KIOSKを訪れた人は、ひんやりとしたこの通路で、冷えた野菜を手に入れることができる。料金箱もこの壁に組み込まれている。

季節が変わり草が枯れるころ、土の塊は自壊をはじめ、隣の虚の立方体は埋め戻される。(崩壊)

田園に建つKIOSKは、非弁証法的なオブジェクトといえるかもしれない。なぜなら、分節→成長→崩壊の時間的推移を自覚的に持つことにおいて「野菜的」であると同時に、土でできていて野菜を優しく保護することにおいて「畑的」であるといえるから。その関係は比喩的に言えば、「子」と「母」、あるいは「都市」と「田園」の関係である。

これら2極的関係を対立させることによってではなく、一つの存在に圧縮して単細胞化することによって、プログラムを分節することが、このKIOSKの究極的な意図である。

コンペ結果の通知から、実施設計終了までが一週間。着工は予定より約半月繰り上げ。このスケジュールに翻弄されて満足な技術チェックもままならぬまま、小国町での施工に参加した。土を型枠に流し込んで踏み固め、2.7m角のキューブに成形する作業は試行錯誤を要した。草を表面に茂らせ、根の力でキューブを固めるという当初のイメージは矛盾に突き当たる。実際には垂直を得るために、土とセメントをミルフィーユ状に積層するのだが、セメントのアルカリ性は草の生育を阻害してしまう。初回の調合では型枠をはずしたとたんに崩落してしまった。再度の挑戦で設計した我々さえ驚くような痛快なキオスクが完成した。

施工にあたった小国町森林組合並びに熊大桂研究室の皆さん、すべてをお膳立てして下さった桂先生、そしてこの無謀（?）なイベントを暖かく見守って下さった小国町の皆さんに、ここに心から感謝申し上げます。

塚本由晴＋貝島桃代

講評

日本の野菜から泥が洗い落とされ、形と大きさが揃えられ、真っ白なスチロールのトレーに上品に並べられ、サランラップでくるまれるようになってどれくらいたつのだろうか。塚本・貝島案は野菜が実は大地の恵みであることを思い起こさせてくれる力強い批評性を含んだプロジェクトであり、しかもランドスケープデザインとして成立している。横に掘られた穴（これは不要であろう）から関根伸夫の「位相—大地」(1968) との類似性も指摘できるが、それによってこの作品を支える想像力の独自性が損なわれるわけではない。　（大野秀敏）

塚本＋貝島案は、キューブの形と土の素材に象徴されるように、ウィットに富んだきわめて知的な作品であると同時に、エコロジカルで野生のナイーブな作品となっている点が魅力的である。また、この両者のスタンスを一つの作品に統合しながら、コンペの主題とロケーションとにみごとに回答を与えた技量を高く評価したい。

〔北村修一〕

小さな売店がかくも豊かな物語性をもちうることに驚いた。物語性はなにも「分節・成長・崩壊」という順序構造が用意されているからではない。この小さな建築を構成する要素が、ウィッティーで多元的な読みを許す建築詩をなしているからである。最高に愉快だったのが、横向きに生えた野菜の内側のキューブから向こう側の田園風景が見える、シュールでリアルな一枚のマンガである。この小気味のいい計画がアイディアで終わることなく実際に成立するよう、技術的な創意と格闘を望みたい。

〔浜田邦裕〕

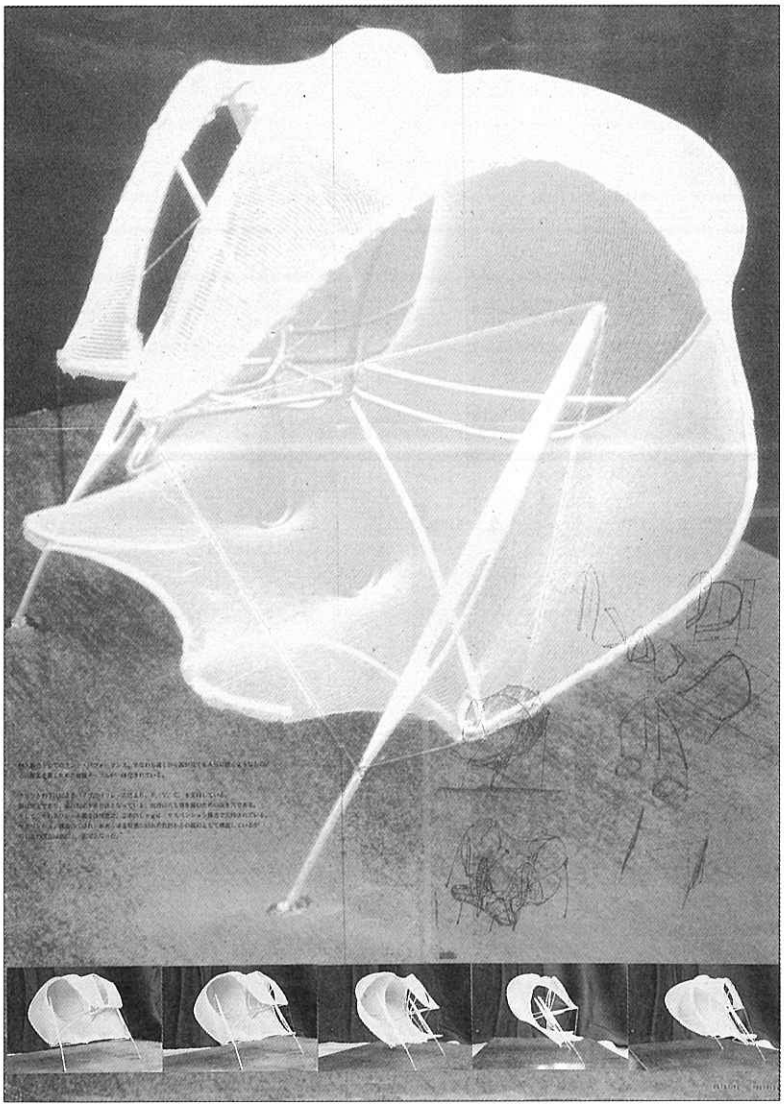
この案の最も優れている点は、生産者と消費者の接点に立つキオスクの姿を借りて、ものの誕生出現から崩壊消滅にいたる、一連の生命的な「過程」を表現していることと、収穫の喜びを追体験させるかのような、売買の「動作」を考案したことだろう。もっとも農家の側から見れば、楽しい収穫の場面だけを享受されるのは、実は不本意かもしれない。この土塊の日常的なメンテナンスをも、追体験プログラムに含めることはできないだろうか。

〔古谷誠章〕

塚本・貝島案の、畑に土、というのは同義反復のような気もしたが、その視点の、居直ったようなダイレクトな力は強い。畑に土はあっても、立体的な土はない。同じ物でも、扱いを少し変えれば意味と効果は大きく変わる。実物になった姿を見てみたいと、いちばん思わせた案でもあった。佐々木案のバブル効果も建築的でおもしろいし、吉永案のミニマルアートも綺麗、Johannes案の風を孕んだ様子もスマートで、いずれも興味を惹かれたが。

〔渡辺　誠〕

087 GIN JOHANNES



無人販売としてのテント・パフォーマンス、すなわち遠くから誰がみても人目に着くようなもの、と、野菜を置くための被膜テーブルが一体化されている。

クラフト的手法によるパイプ曲げフレームにより、P. V. Cを支持している。

膜は固定であり、風に対応する形状となっている。前面の穴も巻き風のための抜き穴である。

そして、それらフレーム膜全体構造は、2本のLegにサスペンション構造で支持されている。サスペンション構造の「ゆれ」があらゆる荷重の局所的負担からの緩和として機能しているが、GLとの接点は意匠上固定となった。

AAのWorkshopでTranspaent skin chairを作った（PROJECT REVIEW 91−92）。これは曲線のフレームにプラスチック・シートをjointで固定させ、人が座れる耐久性をだしたものだったが、今回のプロジェクトもその延長である。

LONDONから熊本県天草の鉄鋼場に直行し、製作と構造検討に立ち合うことにして正解だった。テンション材の1本が圧縮を受けてねじ曲がったりもしたからだ。迅速に対応し2週間で出来たフレームはパーツごとに分解して小国町に運搬したが、組み立ては膜を含めて8時間で済んでしまった。問題の膜のカッティング・パターンは事前に原寸で3パーツに分けて測定したが、小さい切り込みの"ひらき"の部分に3角形を縫いこんだユニークなものになった。 そして膜の面をテーブルに使うために水平を出す"pushing down"のパーツは、Ron Herronに手で簡単に回せるようなグリップ用にネジきりをうめこむようアドバイスを受けたが、実際そこまで施工の精度が上がらなかったのが悔やまれる。しかしこれでまた、建築としてのSKINが、身体としてのSKINに接近したか。

「SKINの触感が心理空間とかかわるとき、意識がSKINを透過していく。」

SKINはフリーメーソン的幾何学精神あるいは数秘主義による、身体表現と工業化の接近とも言えよう。何故なら被膜は高度に進んだ曖昧素材の工業デザインであり、初期イメージから完成まで膨大な数秘法に変換されるからだ。ここでの身体表現とはイッテン体操と菜食主義と浣腸の、バウハウスのヨハネス・イッテンを指している。当時彼の手法は工業化とは相反するとみなされ、グロピウスと対立後バウハウスを辞職しマスダス・ナーン教の修行僧となっている。この歴史的事実をSKINが再検証しうるのだ。「表現を放棄することの意味は、"死"であり"社会"であり"一般"である。」「身体表現におけるスピード・ドローイングの後に、身体表現を捨てて設計しても良い。何故なら既に記憶は身体を介して内在しているからである。

——ヨハネス・イッテン」

Gin Johannes

講評

塚本・貝島案とJohannes案のどちらも良い。前者はエコロジカルなストーリーで、変化しやがて消えてゆくものとして表現されていて、コンセプトが大変好ましい。後者は、白い雲がふうわりと浮かんでいるのどかな田園の風景を想起させるような案で、構造、素材、ディテールを上手にコントロールするとモノになりそうである。アイディアコンペでは前者。実施コンペでは後者ということで、Johannes案を推薦することに相成った。

〔淺石　優〕

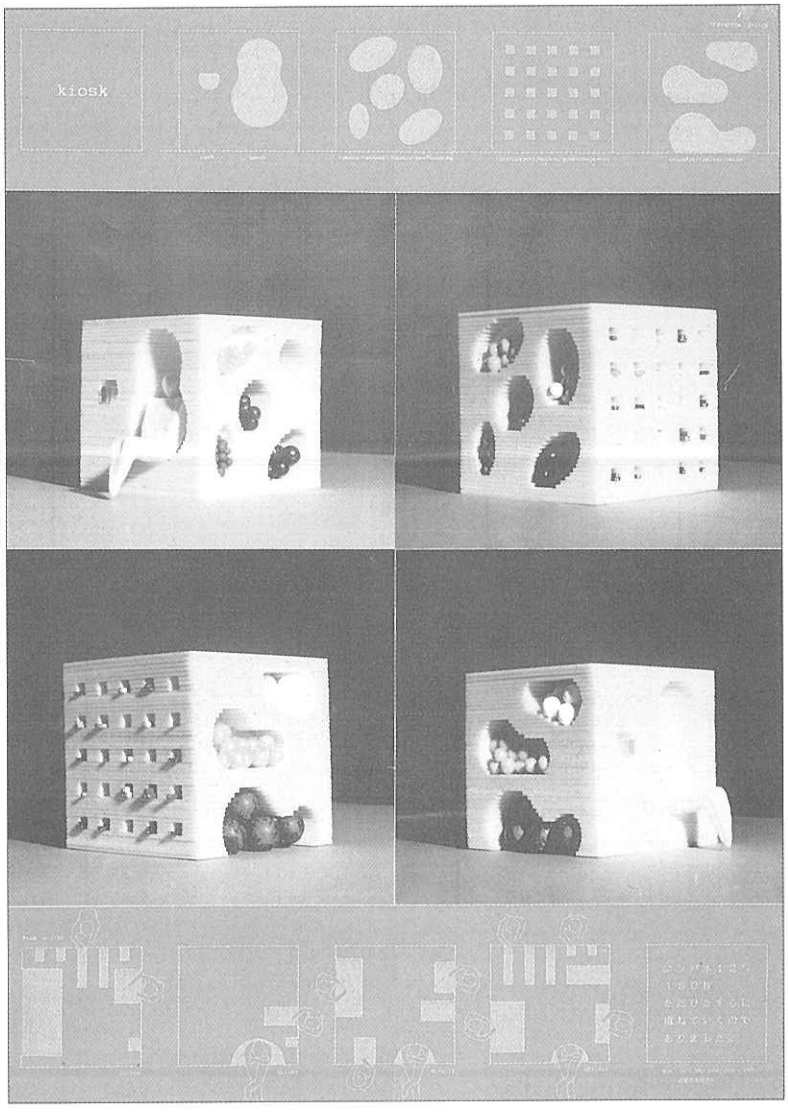
原料としての食品をいかに商品として見せるか？田園に佇むキオスクには買いたいと思わせるディスプレイデザインとしての工夫が欲しい。この案は土、緑の大自然とは異質な人工的素材でつくられている。しかし大地とは最小限の接地であり、風とたわむれるシェルター等自然と融合したデザインといえる。清潔感のあるパッケージされた自然食品と共に利便性のある農村風景をつくりだせる案といえよう。

〔奥平与人〕

道端に落ちた一片の白い布が、ふとした拍子に吹いてきた風によって一瞬、宙に舞い上がる。そんな誰も気にとめない日常のささいな出来事をさらりと形にしたその軽やかな印象が、まず一見しただけで残った。無人販売所というのどかなシステムには、そんな自然の気まぐれがもたらすような造形が似つかわしい。但し、商品の陳列方法や、実際に吹く強い風にさらされた時に再び道端の一片の布になってしまいそうな構造には不安もあるのだが。

〔新納至門〕

078 佐々木龍郎



コンパネ１２ミリ
１５０枚
ただひたすらに
重ねていくので
ありました。

材料：コンパネ12㎜×300枚（150枚×　２列）
　　：設置用金具少々

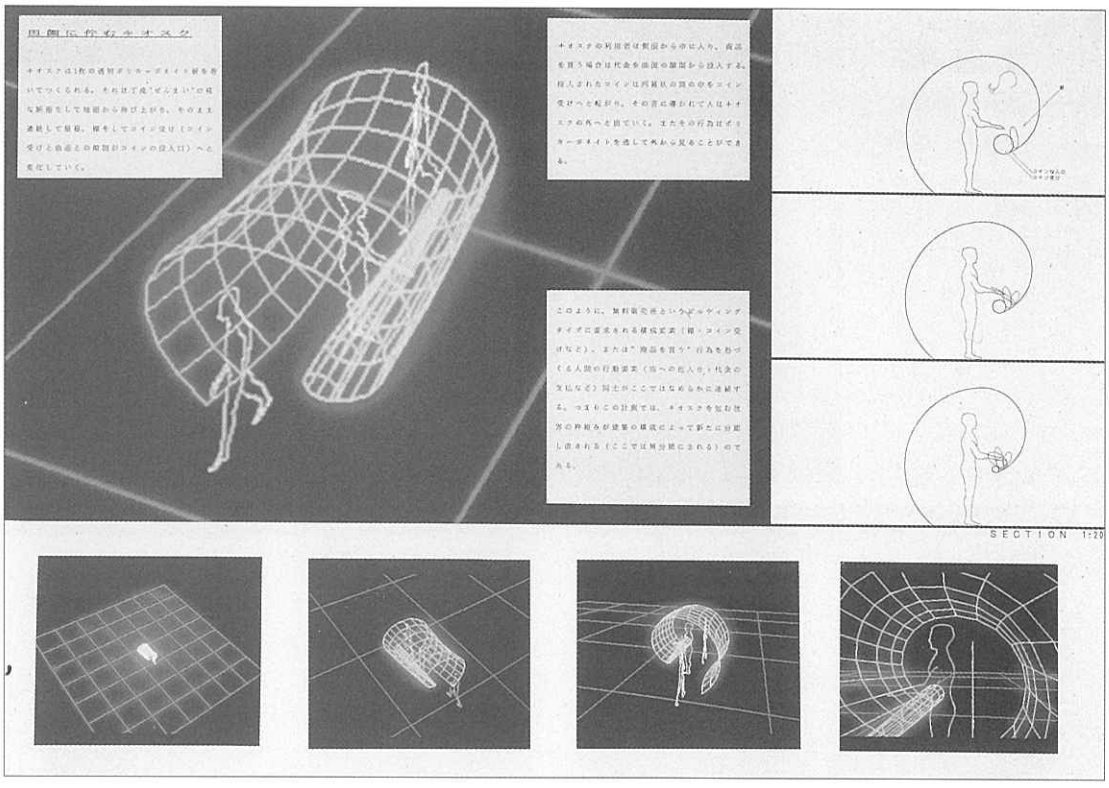
専門学校の夏の課題としてキオスクを出題していた。学生達の案は、屋根によりある領域を規定し、その中に野菜の売買という行為を発生させる装置を設置する、といった形式に集約していた。「要項で規定されている寸法では、その屋根の下に人間の活動を内包するのは困難ではないのか」、「無人というプログラムは、売る人の不在はもちろん、買う人をも一過性の状態＝定常的には不在、と考えられないか。つまり、ここでの領域は野菜のためのみに規定されれば十分であり、ただ人の「手」がその領域境界を行き来すればよいのではないか」といった内容の講評をした。講評がそのまま建築化された。完成直後に、ＫＡＰ展が正式に始まる前に現地を訪れた。ビニール袋に入れられ一番小さな穴のしかし一番奥につめこまれたピーマンが、穴の口の部分についた小さな足跡が、この小さな建築を成立させていた。

佐々木龍郎

講評

佐々木氏の案は、非常に単純なアイデアを単純に実現できる点において優れていると思った。この案は決して新しいものではないが、これからこれを作るにあたって、さらに具体的な野菜の並べ方等がスタディされれば、畑の中に楽しいキオスクが出現することにになるであろうと期待している。　　（妹島和世）

017 吉永　健一



キオスクは１枚の透明ポリカーボネイト板を巻いてつくられる。それは丁度〝ぜんまい〟の様な断面をして地面から伸び上がり、そのまま連続して屋根、棚そしてコイン受け（コイン受けと曲面との隙間がコインの投入口）へと変化していく。

キオスクの利用者は側面から中に入り、商品を買う場合は代金を曲面の隙間から投入する。投入されたコインは円錐状の筒の中をコイン受けへと転がり、その音に導かれて人はキオスクの外へと出ていく。またその行為はポリカーボネイトを透して外から見ることができる。

このように、無料販売所というビルディングタイプに要求される構成要素（棚・コイン受けなど）、または〝商品を買う〟行為を形づくる人間の行動要素（店への出入り・代金の支払など）同士がここではなめらかに連続する。つまりこの計画では、キオスクを包む世界の枠組みが建築の構成によって新たに分節し直される（ここでは無分節にされる）のである。

「ミニマリズムの最たるもの」。表彰式で私の作品をこう評されました。私はその言葉に〝エッ〟と思うと同時に〝エー〟とも思いました。

〝エッ〟の理由…この評が私のプロジェクトに対してということが意外だったということ。このプロジェクトを考えているときに〝ミニマリズム〟なんてことはこれ微塵も頭になかったのです（解り易いものにしようとは思ってましたけど）。

〝エー〟の理由…「ミニマリズム」という言葉のみで片づけれらてしまったこと。つまり批評がカテゴライズで終わってしまったということ（授賞者としてはその後の話が聞きたいものなのです）。

ともあれこのコンペティションは私の懐と交友を豊かにしてくれました。大変感謝しております。

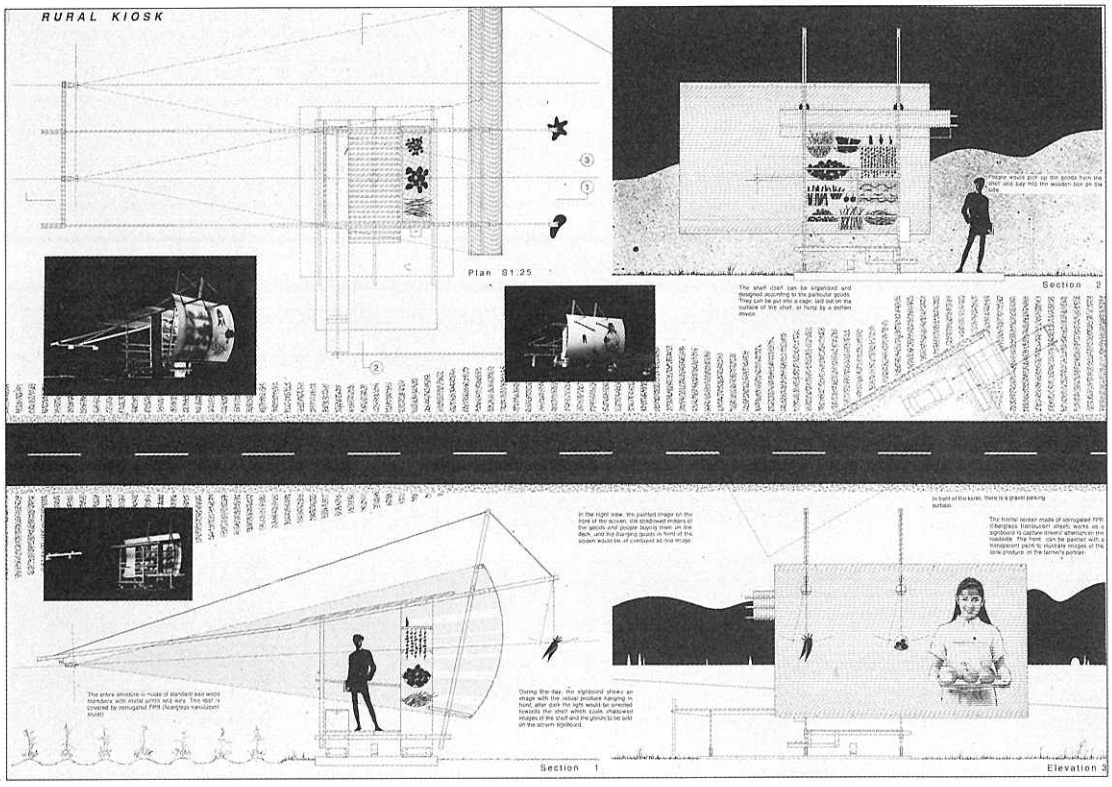
吉永　健一

講評

ポリカーボネート製のぜんまいは機械として「テクノロジー」を表現している。それは又、植物の〝ぜんまい〟をも連想させ、我々を自然にアプローチさせる。このコントラストを引用したコンセプトは調和をキーワードとしており面白い。と同時に、シンプルでミニマルな形態が田園に設置された時に生じる緊張感にも好奇心を抱かせる。そして、人工の装置が、無人のキオスクとして運営されるのも、又、「矛盾」として興味深いところである。

〔ジョージ国広〕

102 Taeg Yoshioobu Nishimoto (西本　圭敦)



The frontal screen made of corrugated FPR (fiberglass translucent sheet) works as a signboard to capture drivers' attention on the roadside. The front can be painted with a transparent paint to illustrate images of the local produce, or the farmer's portrait.

The entire structure is made of standard size wood members with metal joints and wire.The roof is covered by corrugated FPR (fiberglass translucent sheet).

The shelf itself can be organized and designed according to the particular goods. They can be put into a cage, laid out on the surface of the shelf, or hung by a certain device.

During the day, the signboard shows an image with the actual produce hanging in front, after dark the light would be oriented towards the shelf which casts shadowed images of the shelf and the goods to be sold on the screen-signboard.

In the night view, the painted image on the front of the screen, the shadowed images of the goods and people buying them on the deck, and the hanging goods in front of the screen would be all overlayed as one image.

People would pick up the goods from the shelf and pay into the wooden box on the side.

In front of the kiosk,there is a gravel parking surface.

田園のキオスクの前は、いつも車でよく通る。白い帆布のような広告板には、僕も顔見知りのお百姓さんたちや娘さんたちの顔が描かれていて、そこで売られている野菜の、いわば作者に会うようで、親しみ深い。広告板の前には野菜のサンプルが吊られていて、風でブランブランしている。今日は帰りに、大根を買おう。

わたしはいつもこの道を夜、仕事の帰りにドライブするのですが、真暗な夜道に浮かぶ大きな白い広告板は、後の棚に置いてある野菜のディスプレイのいろいろな影を映しだしていて、その変化を見るのが楽しみになりましたの。時にはキオスクの中にいる人の影が動いているのも見られて、まるで影絵芸術のようで、わたしが中にいる時も他の人たちが車から見ていると思うと、ちょっとドキドキします。ほら、この干し柿のディスプレイ、影で見るときれいでしょう。

西本　圭敦

講評

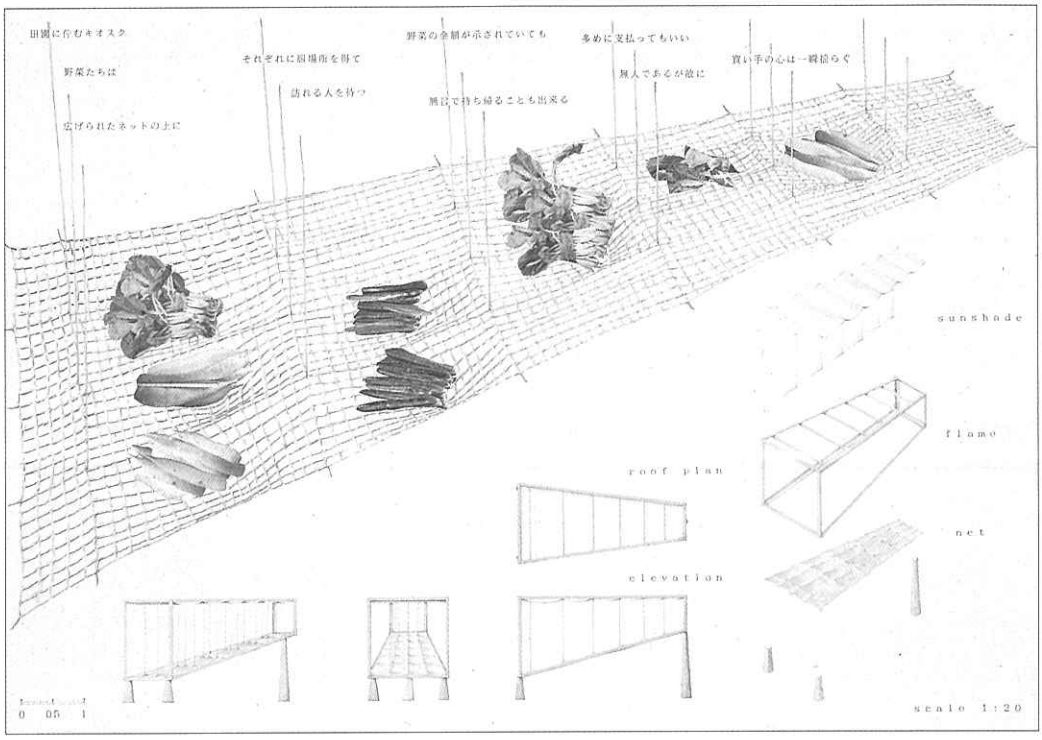
「田園に佇む」から田園調のデザインにするのではなく、洗練された都会的なキオスクをイメージした点が優れている。影絵をスクリーンに写し出すフロントも魅力がある。

オブジェまたは販売マシンとして見ると、1.張力を感じさせる全体像が、しかも微妙なバランスを保っている。2.自動車の動きにともなう眼線の移動に対して、いくつかの表情が用意されている。以上の項目に見るべきポイントが感じられた。

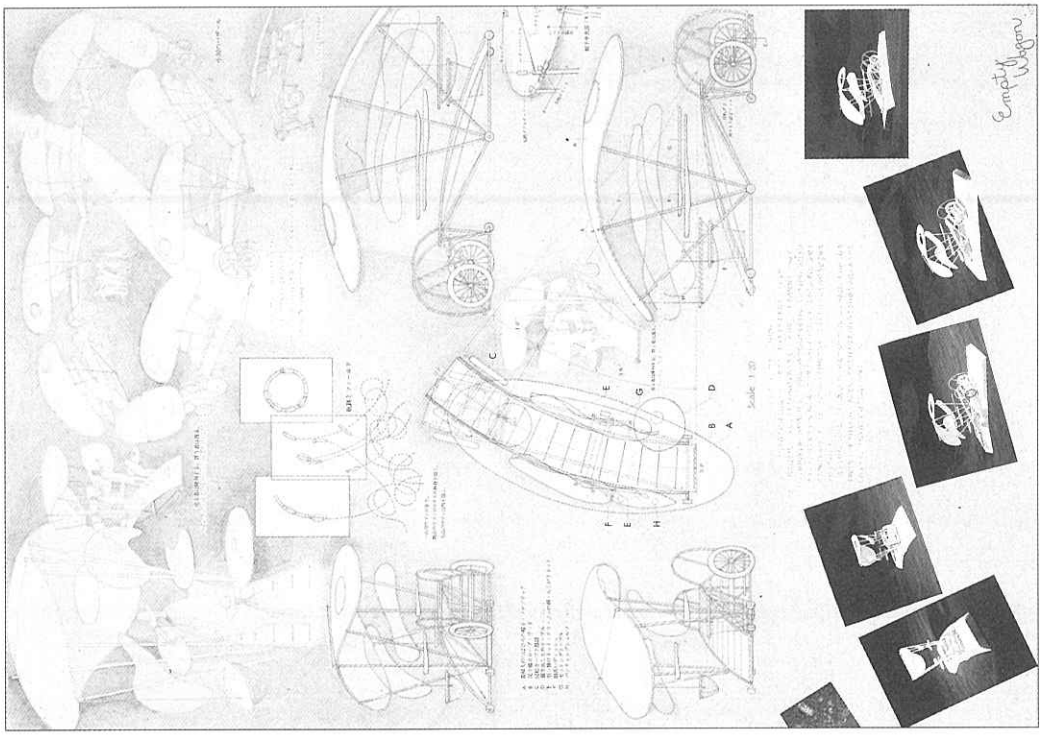
（大島哲蔵）

第2部門　「田園に佇むキオスク」

004 小倉　康正

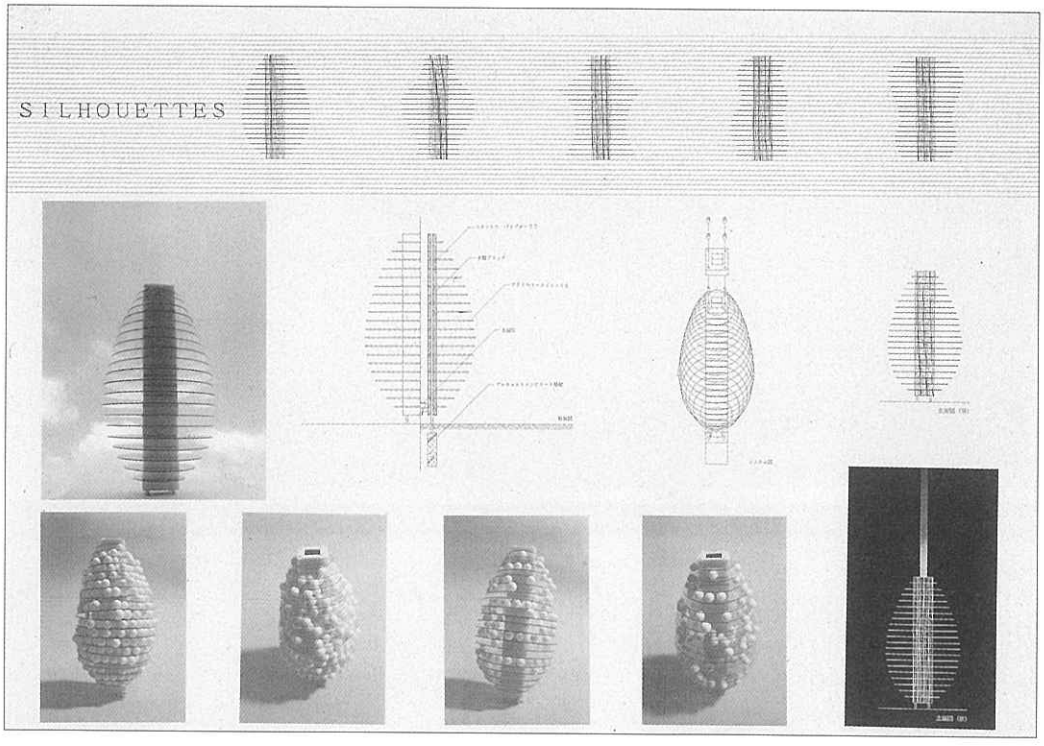


011 古河原康正

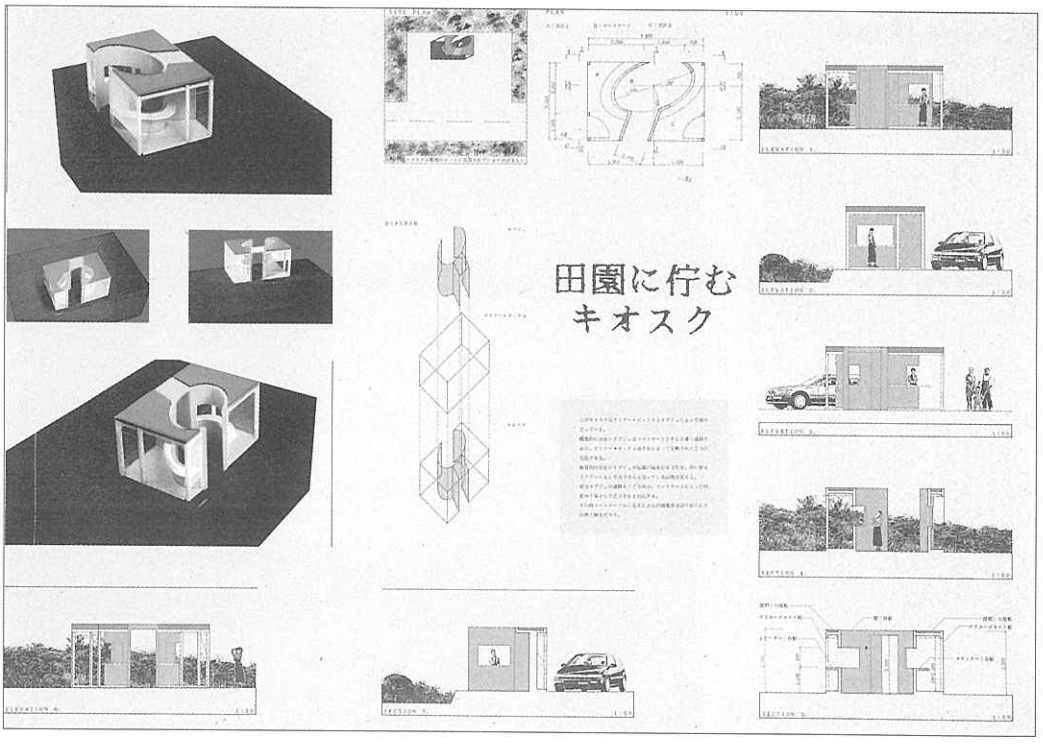


縦

013 青柳　健次

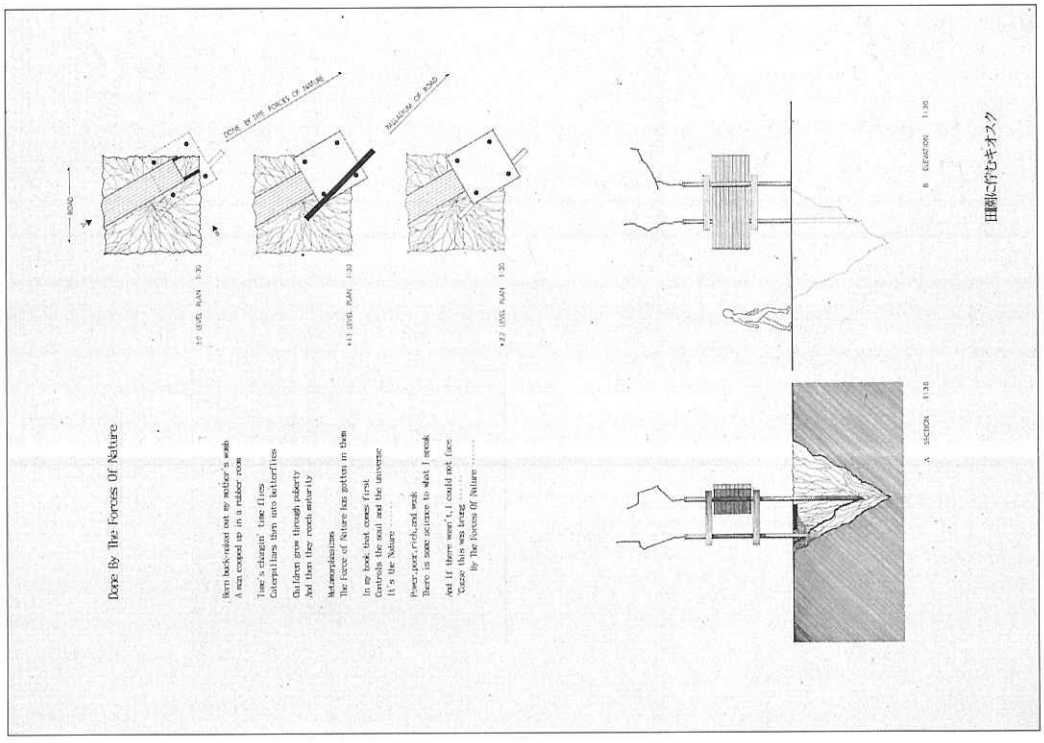


014 秋山　雅美
岡崎　泰之

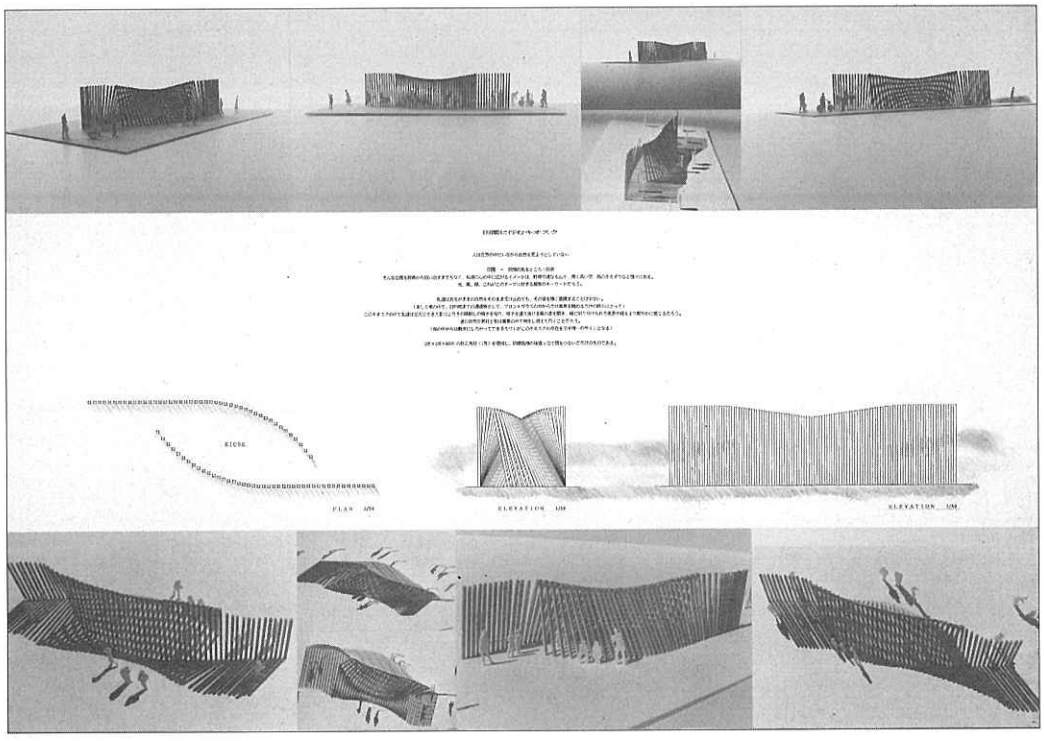


031 荒木　信雄

縦

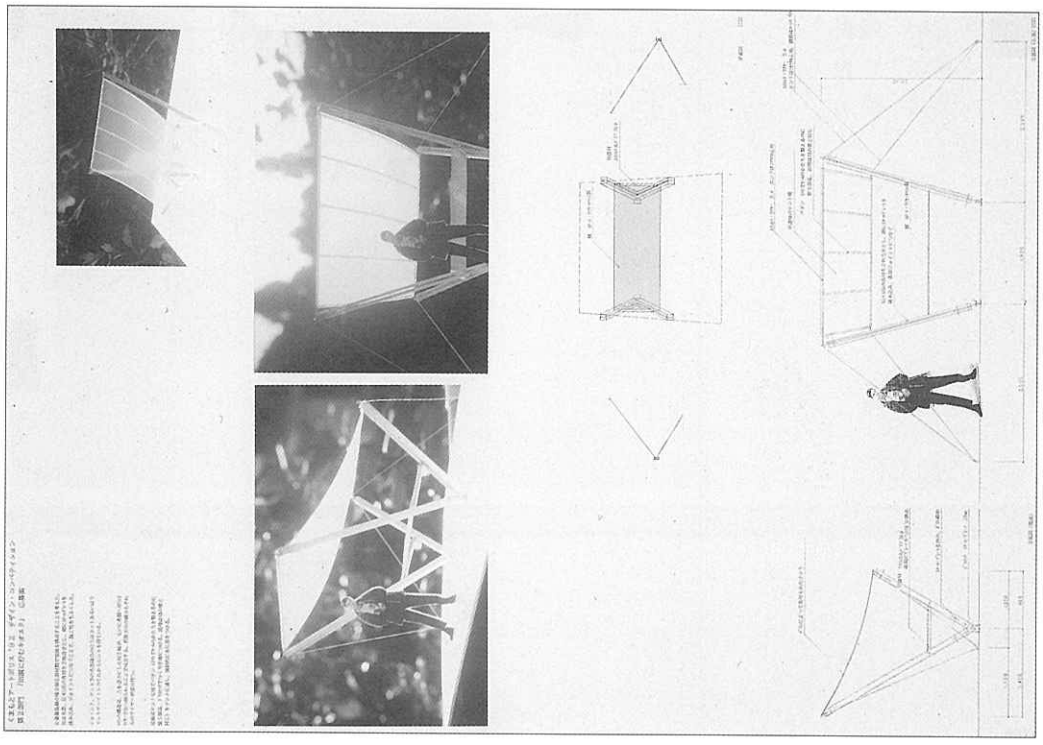


041 川津　悠嗣

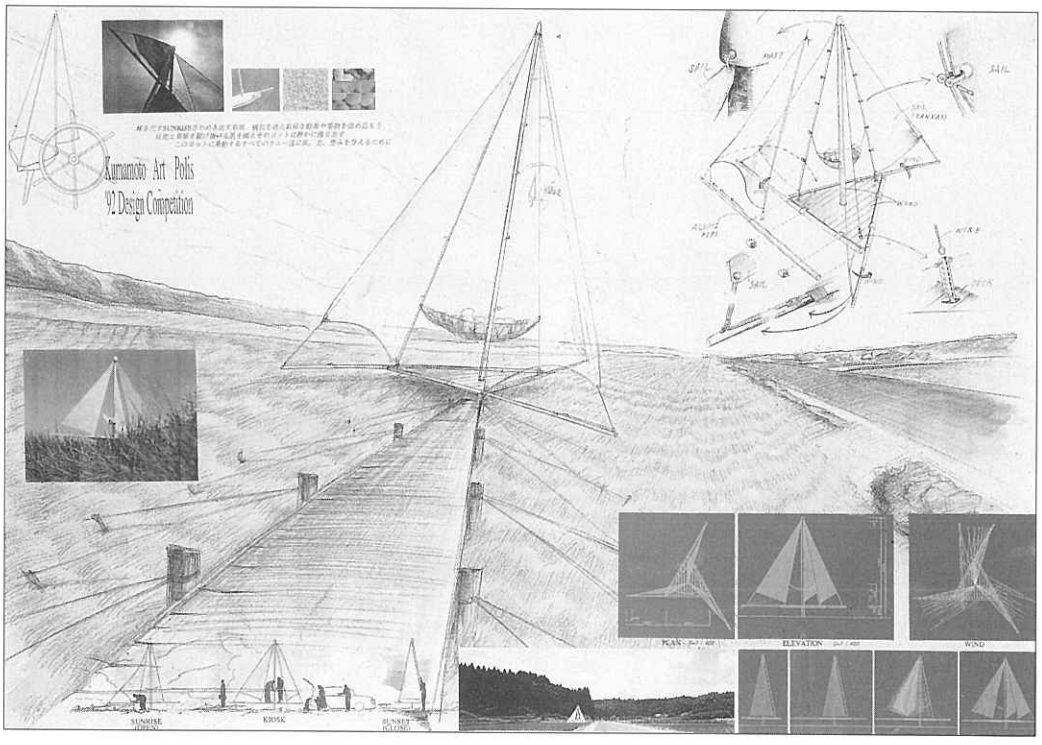


048 竹内　昌義

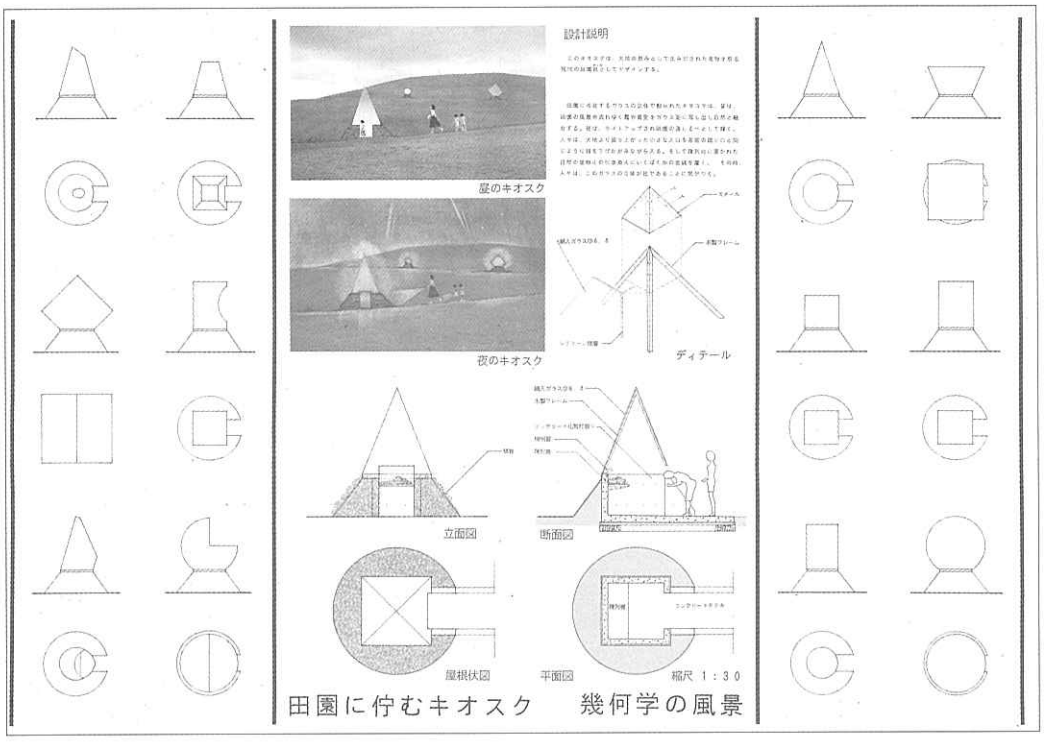
縦



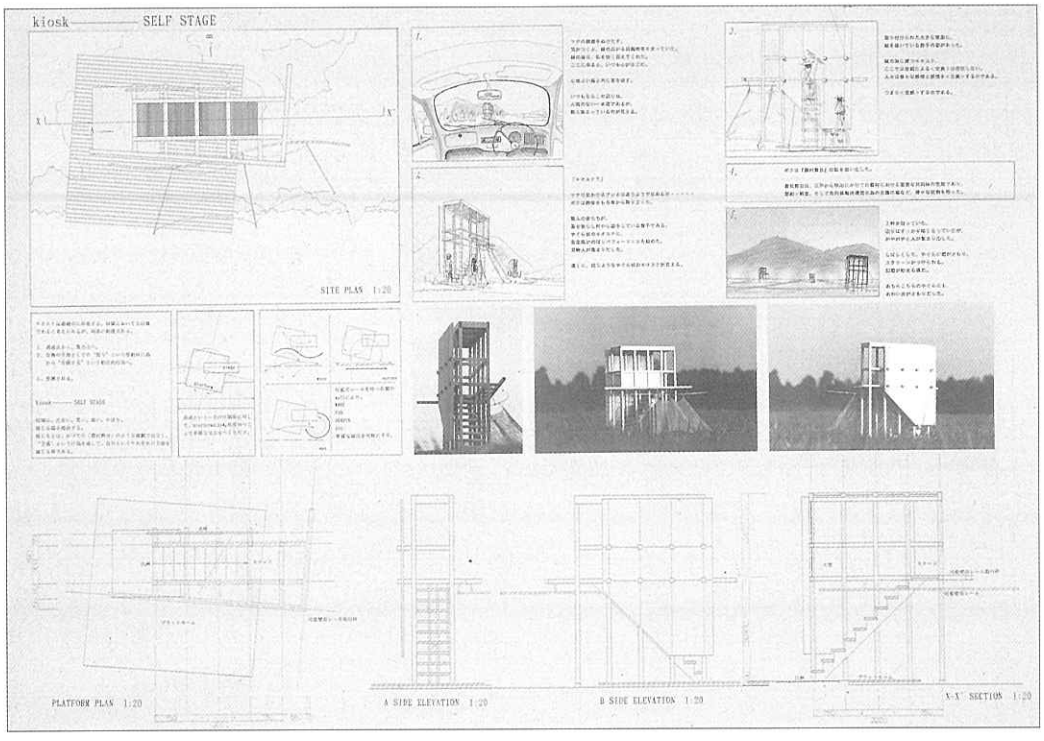
049 鈴木　正史
石原　伸一



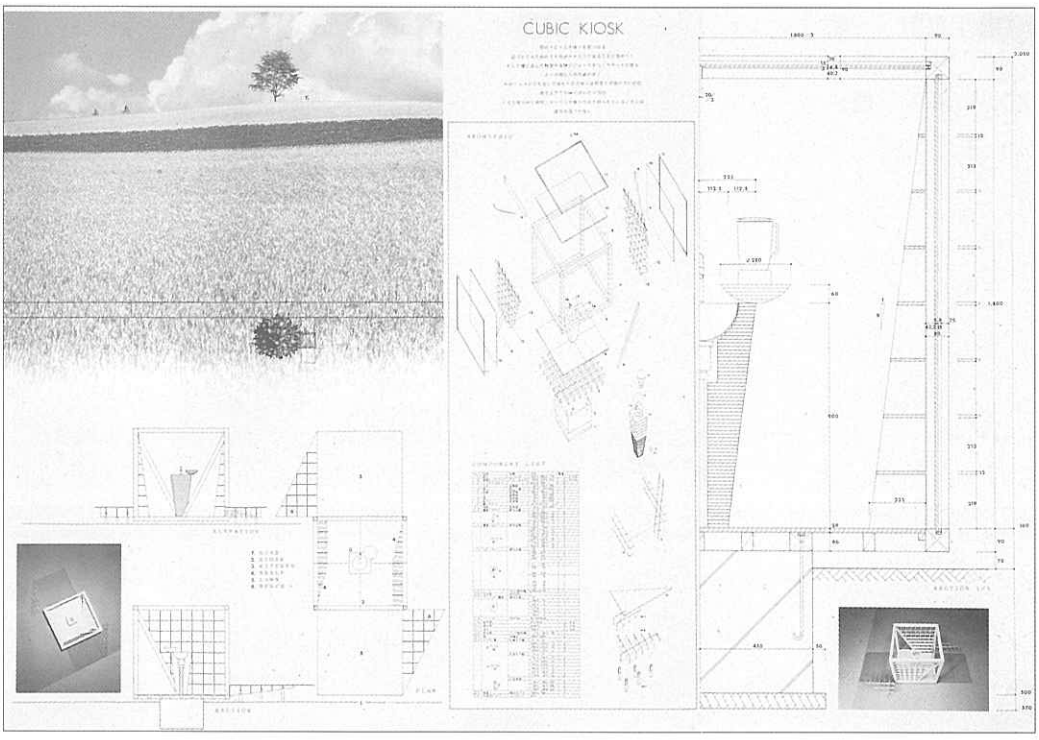
052 三宅　隆史
萬本　哲也
高松　直美



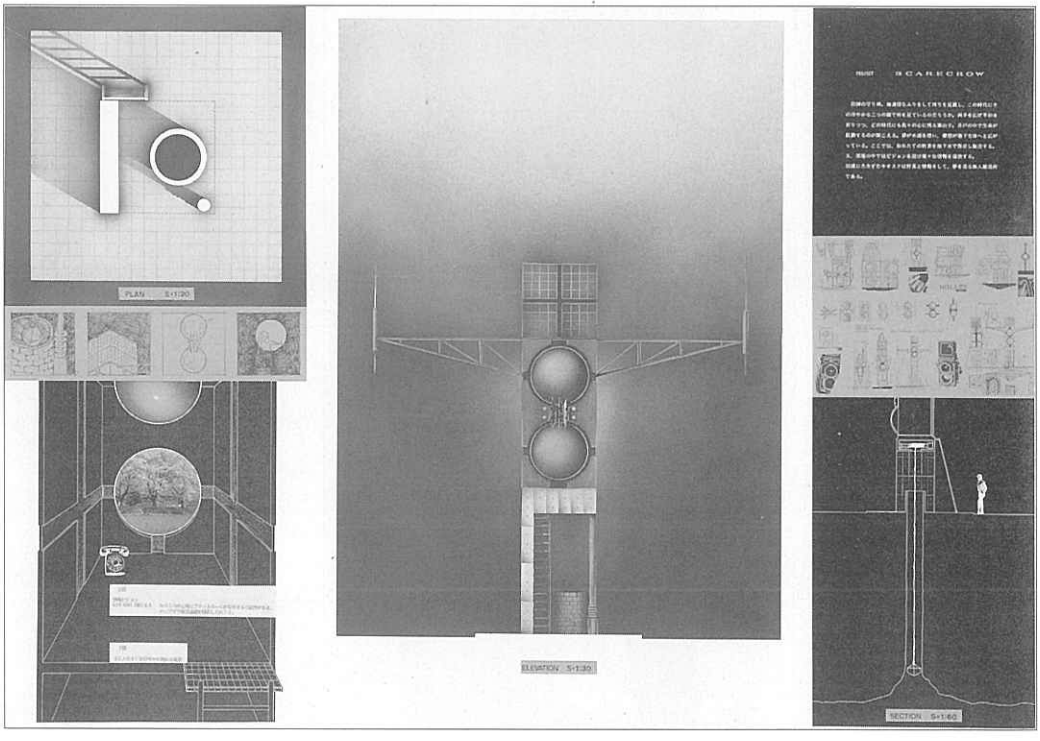
058 川久保智康
永島　元秀



060 白川　直行

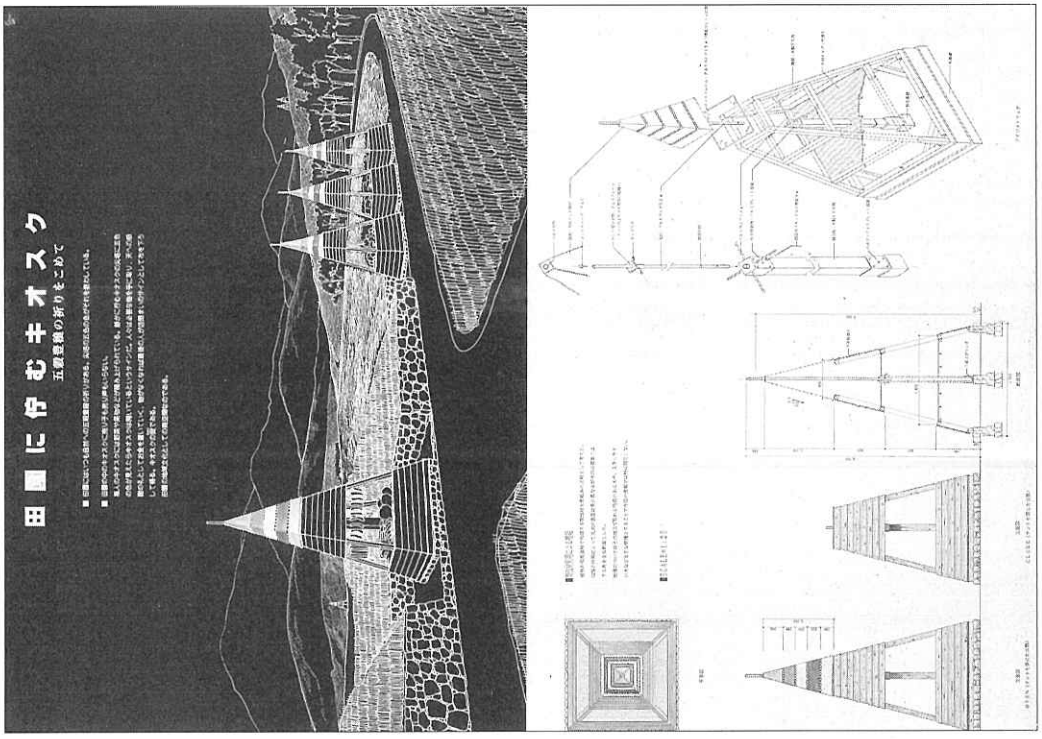


065 河島　　康



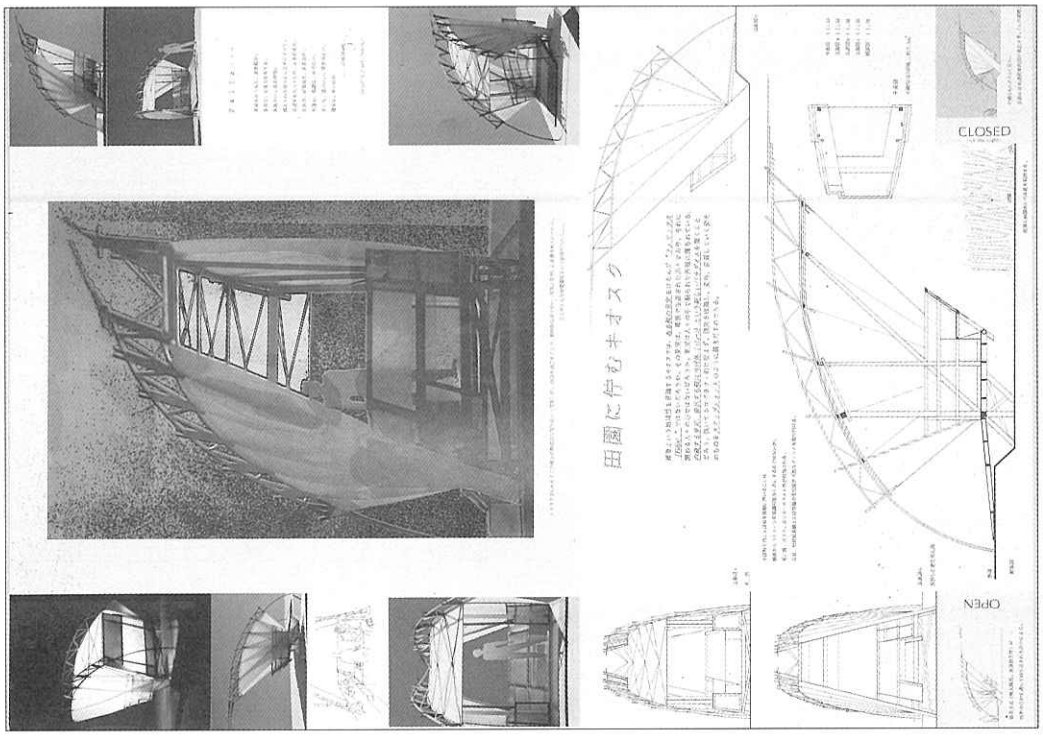
066 鬼田　勲
中谷　篤彦
海土　健一

縦

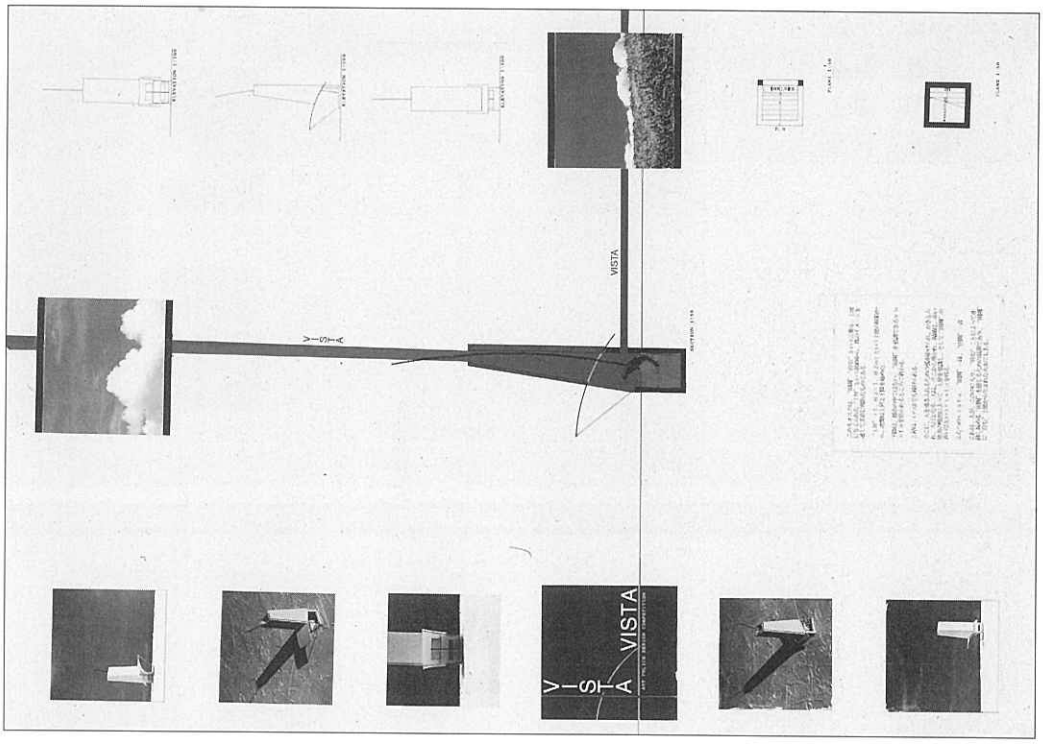


077 竹下　祥

縦

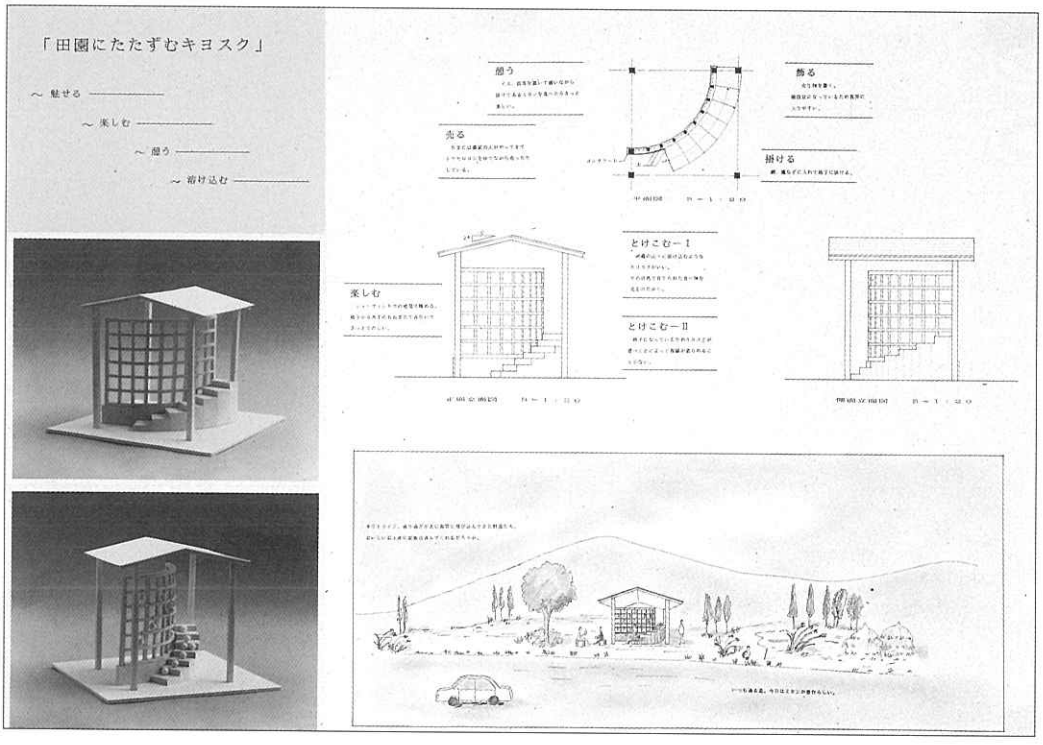


089 黒川　浩之

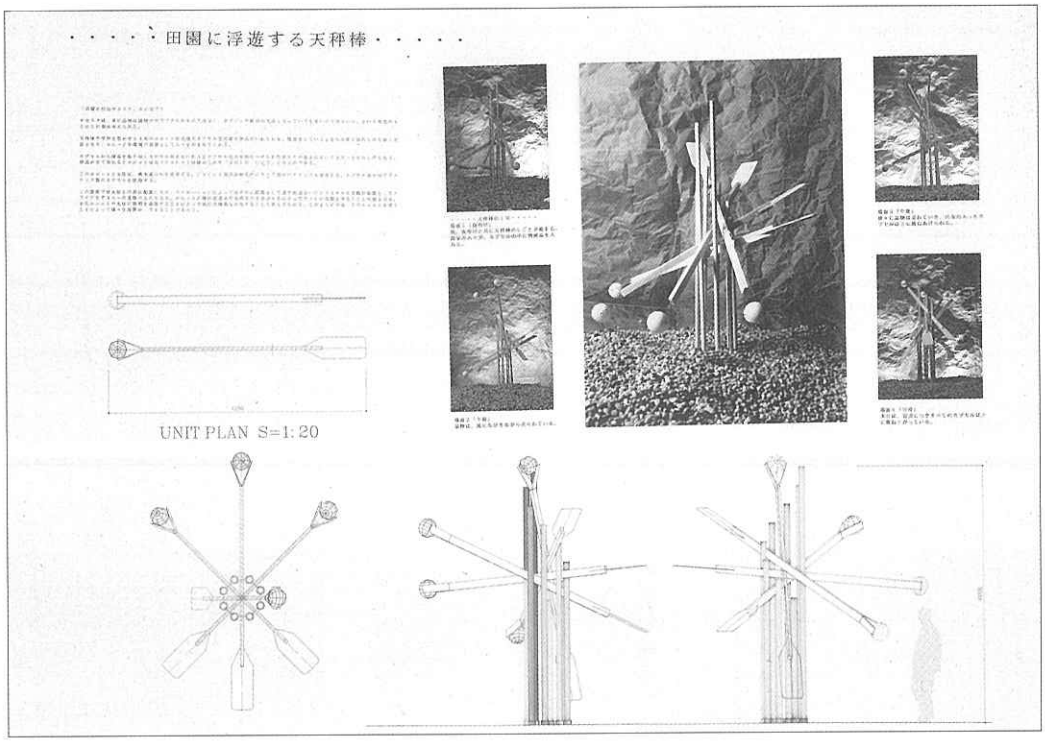


縦

095 久保田恵子



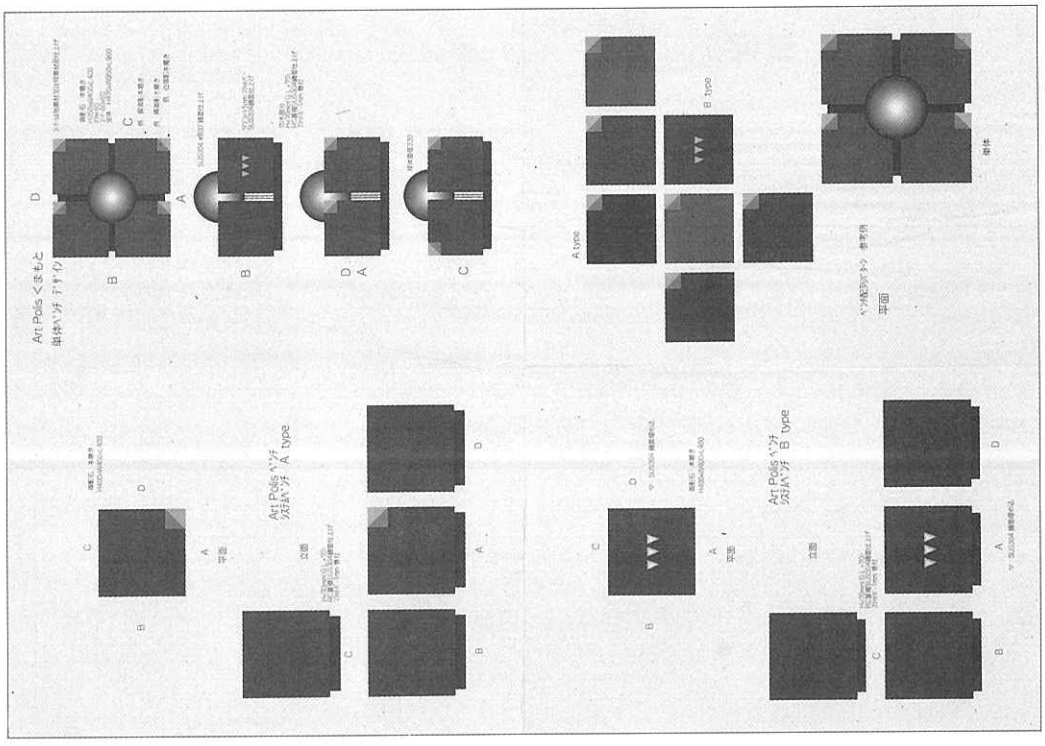
109 澤崎　宏
小西　由通
梅田　健之
富永　哲也



■応募作品

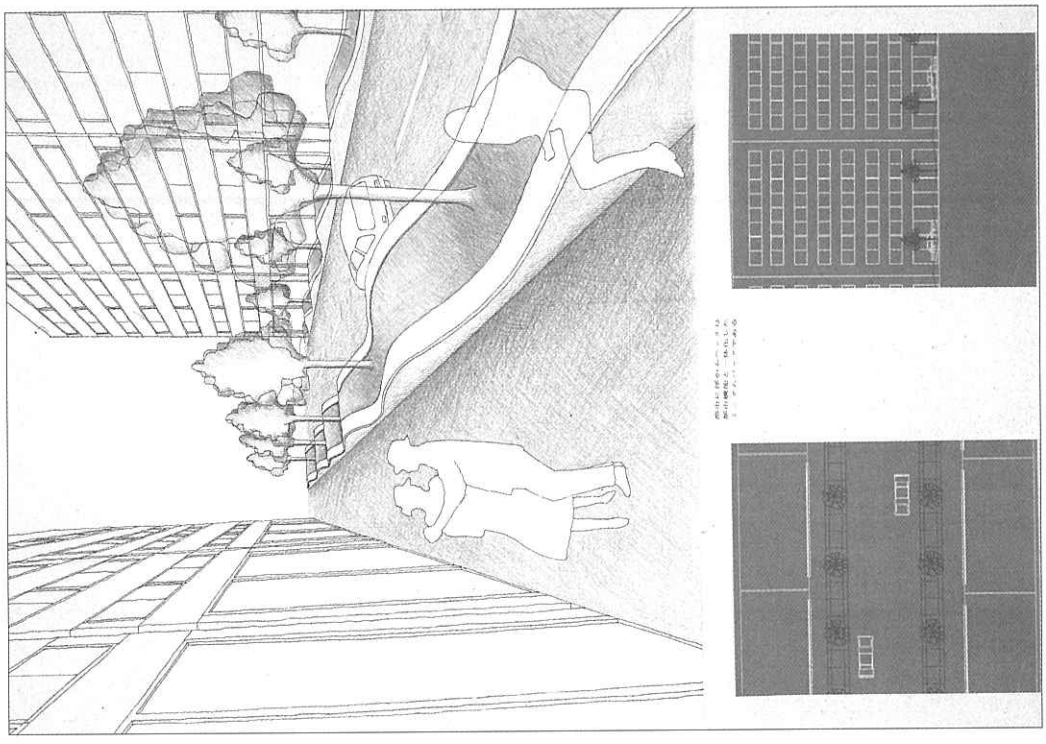
第１部門　「都市に浮かぶベンチ」

001 伊東　誠



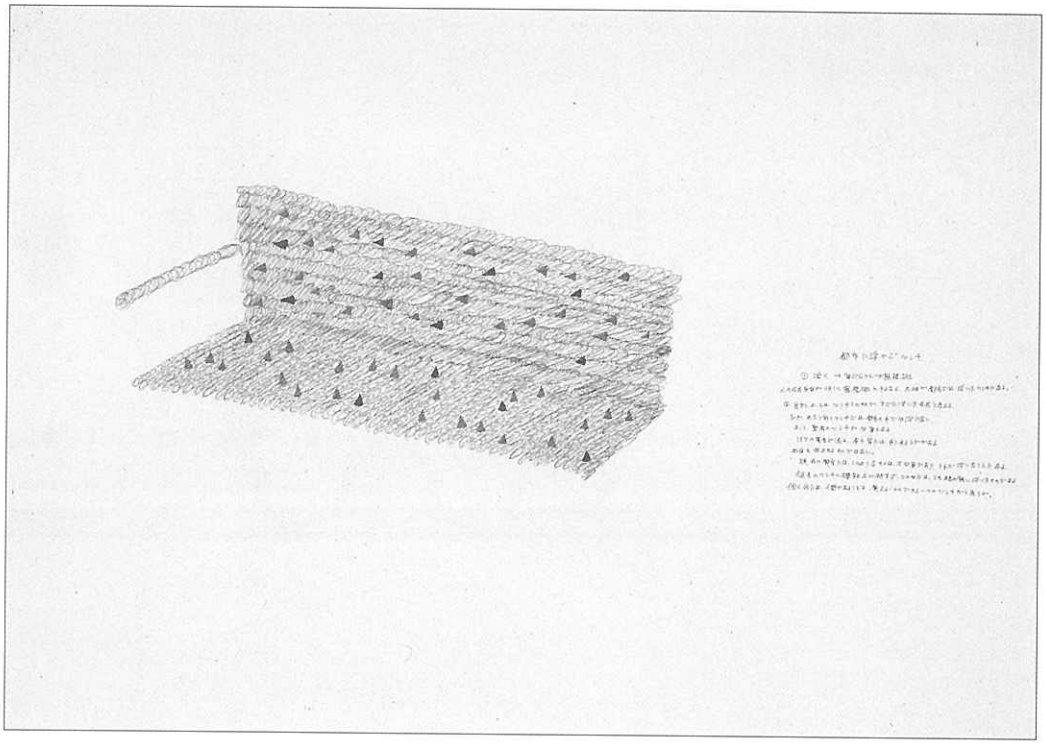
縦

002 武田　泰幸

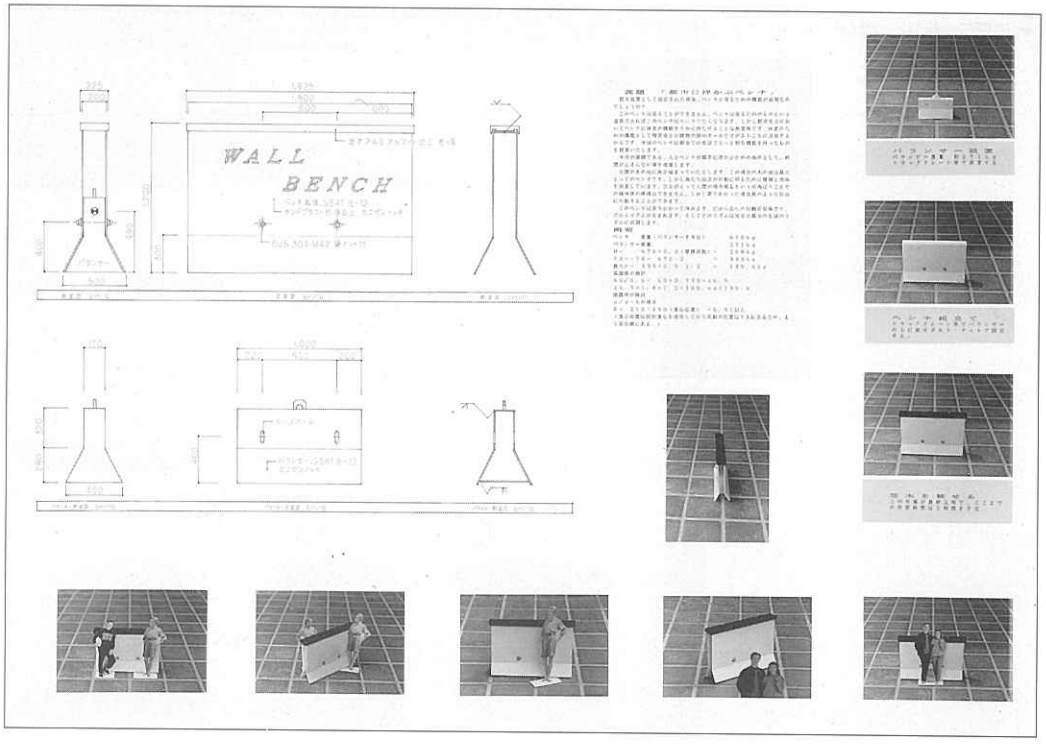


縦

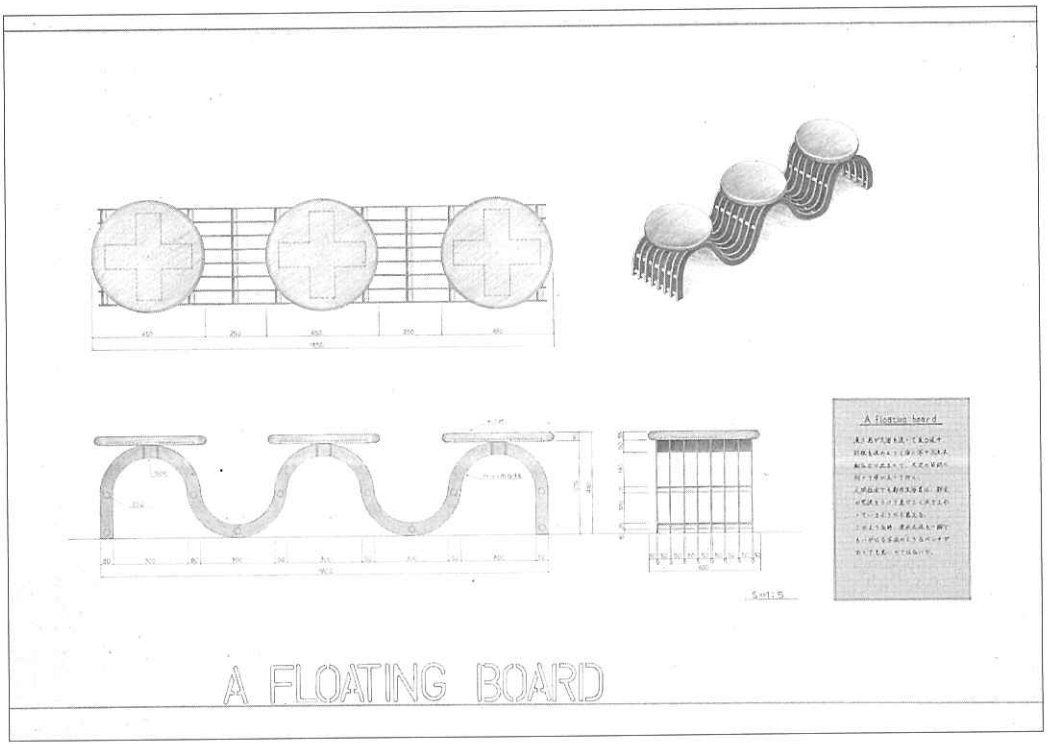
003 松永　英明



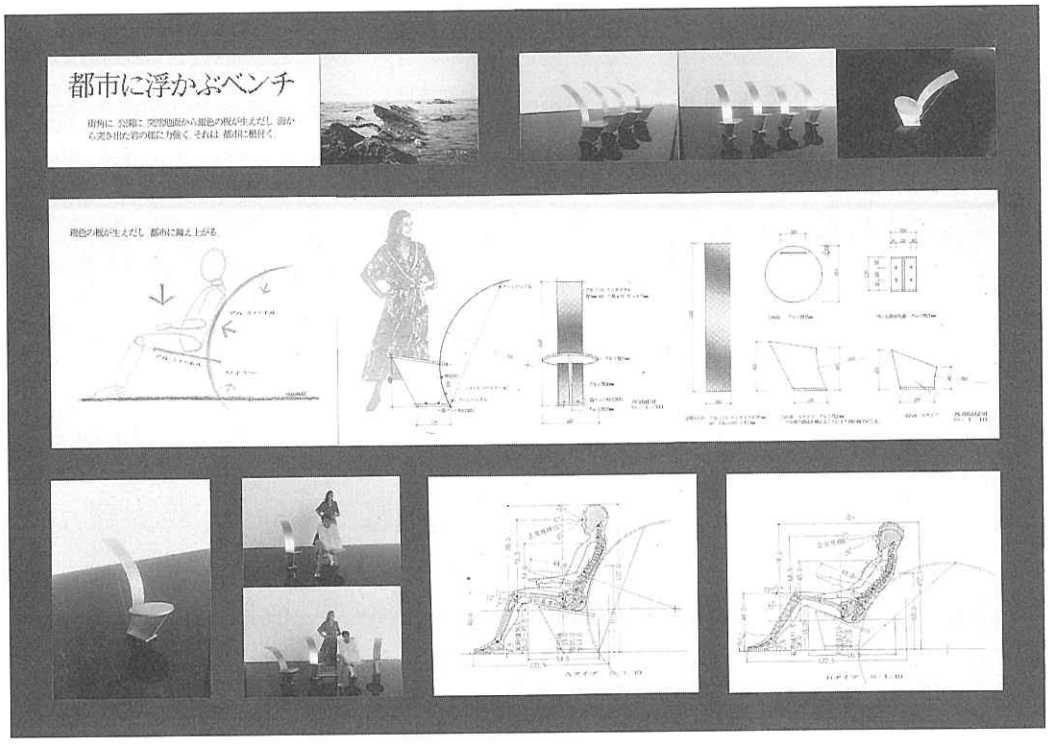
004 大田黒元雄



005 聖　匠志
(高田　保)

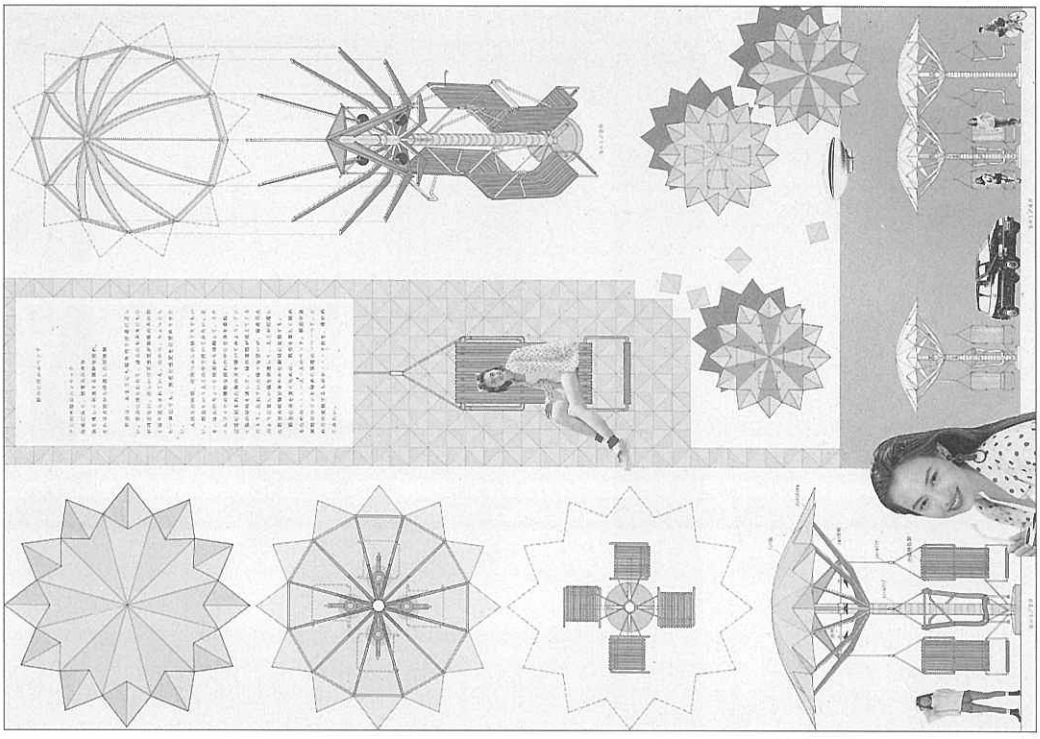


006 白井　博康

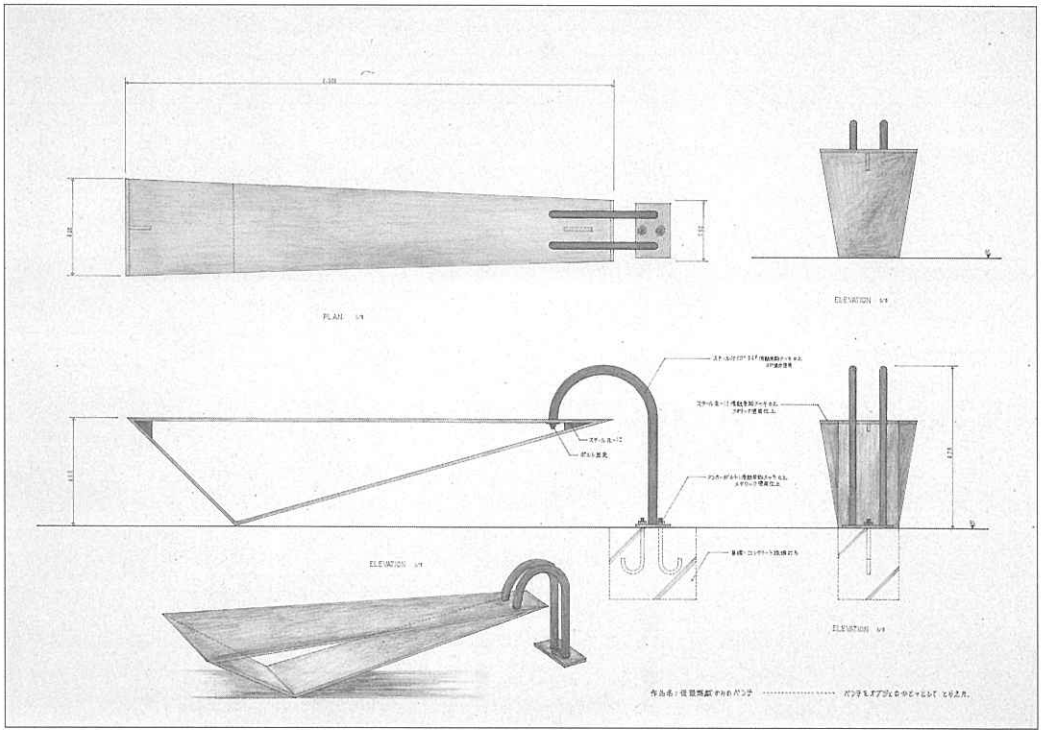


007 富田　泰二

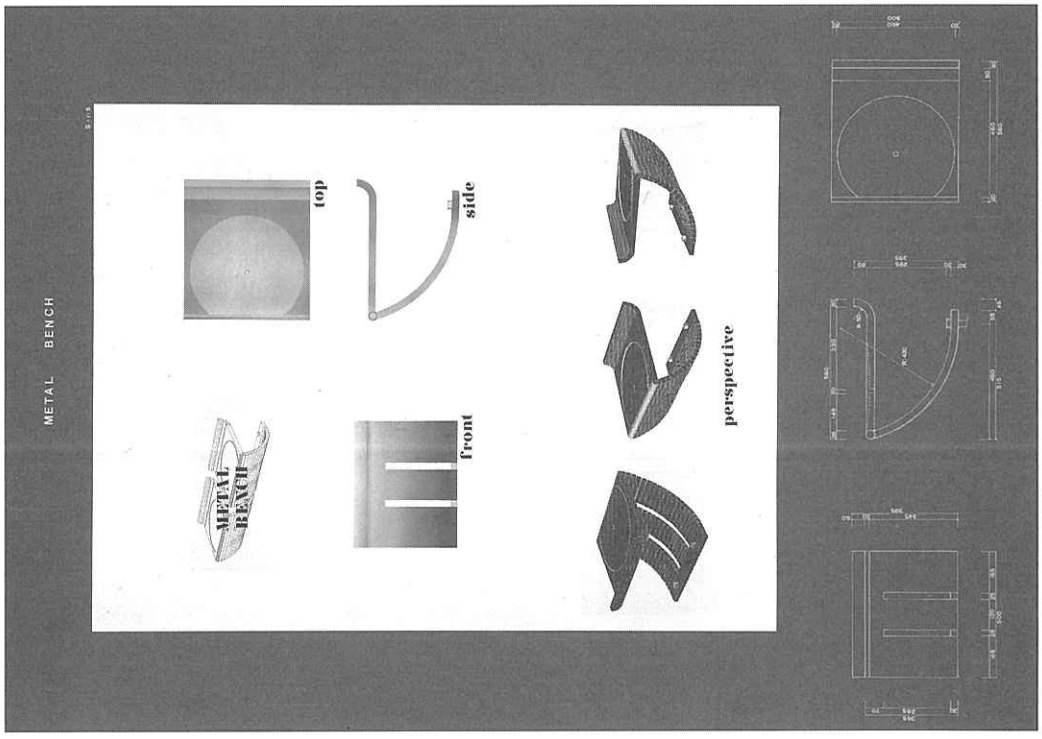
縦



008 坂元　健二

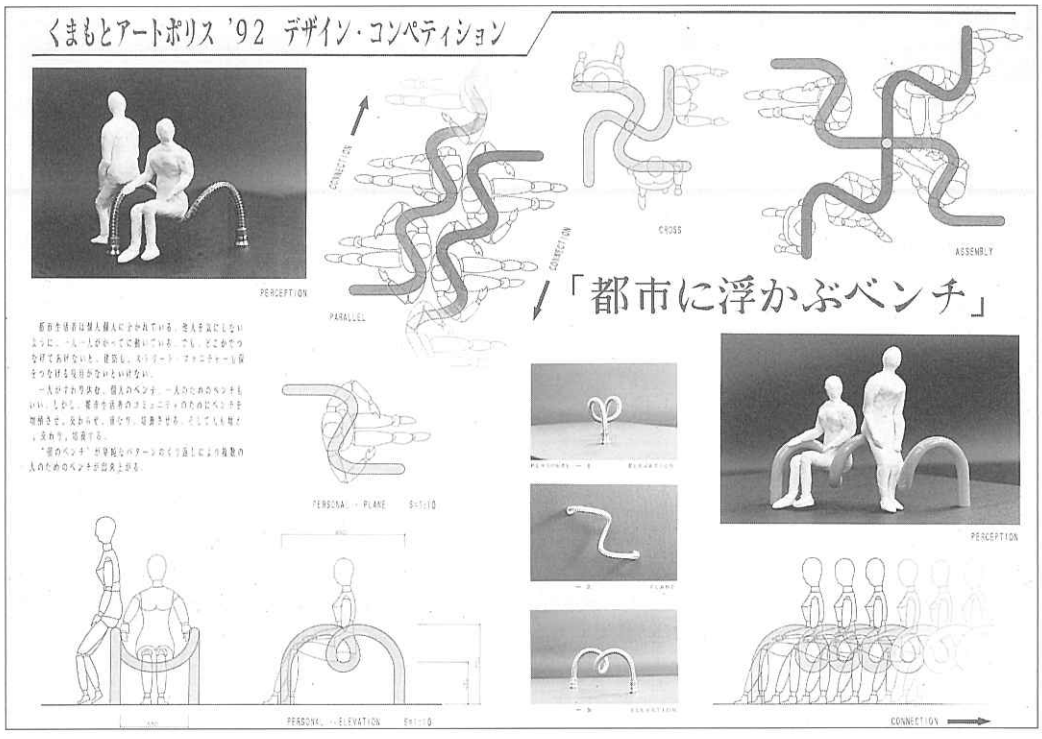


011 布目　和也

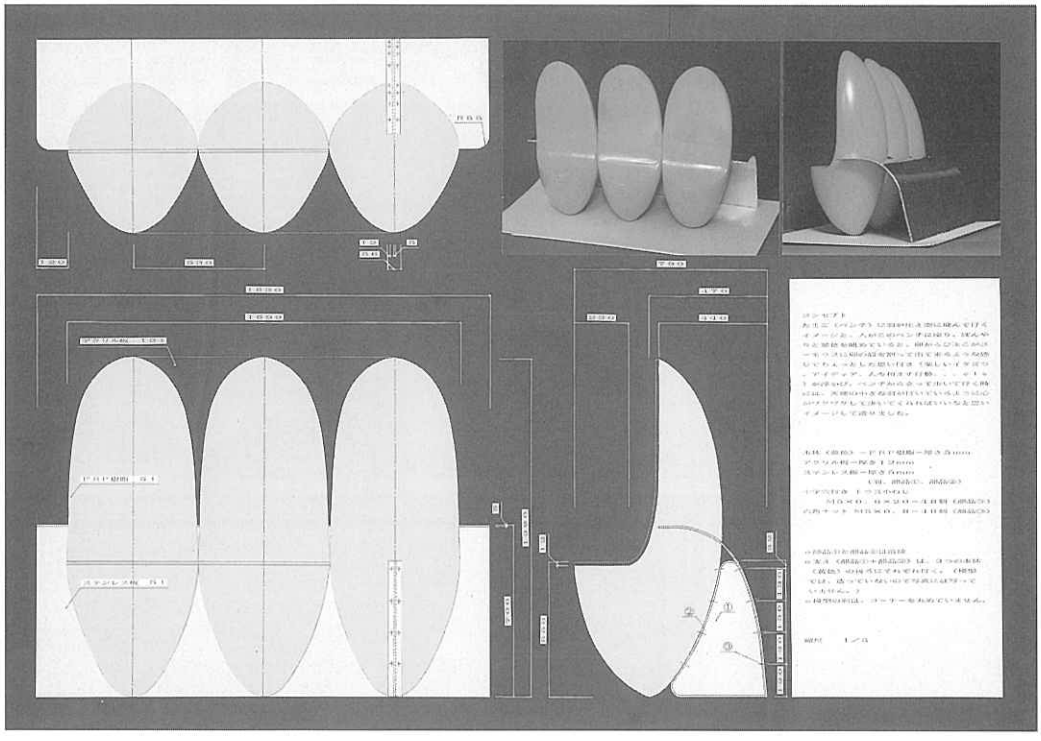


縦

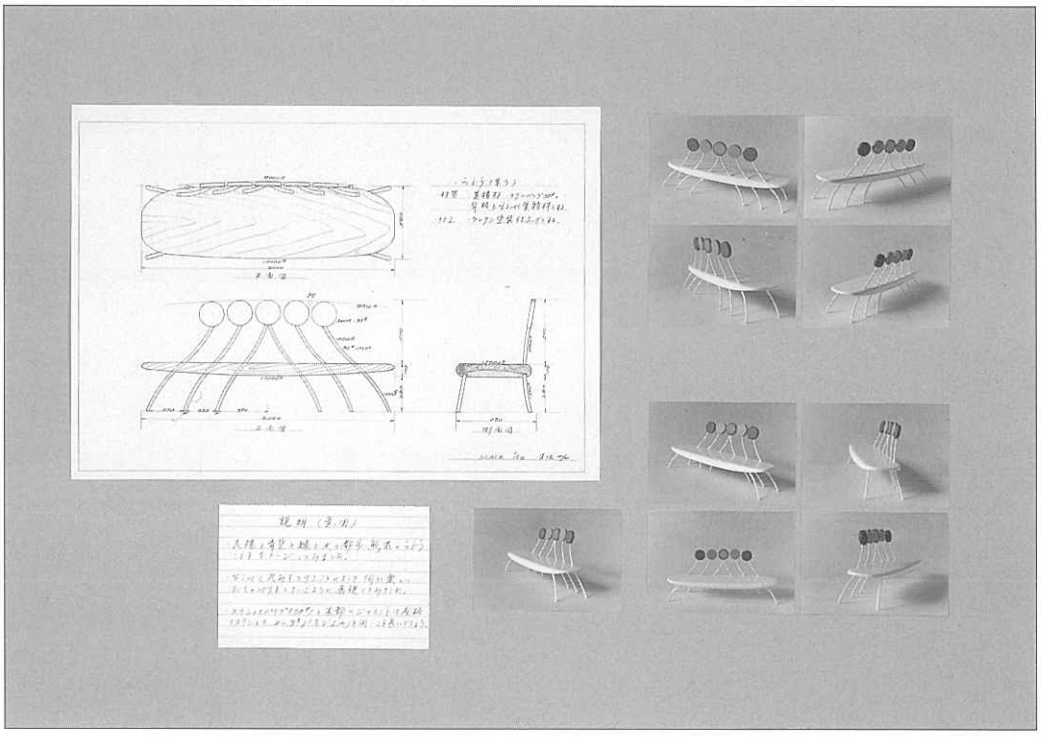
013 金子　　功



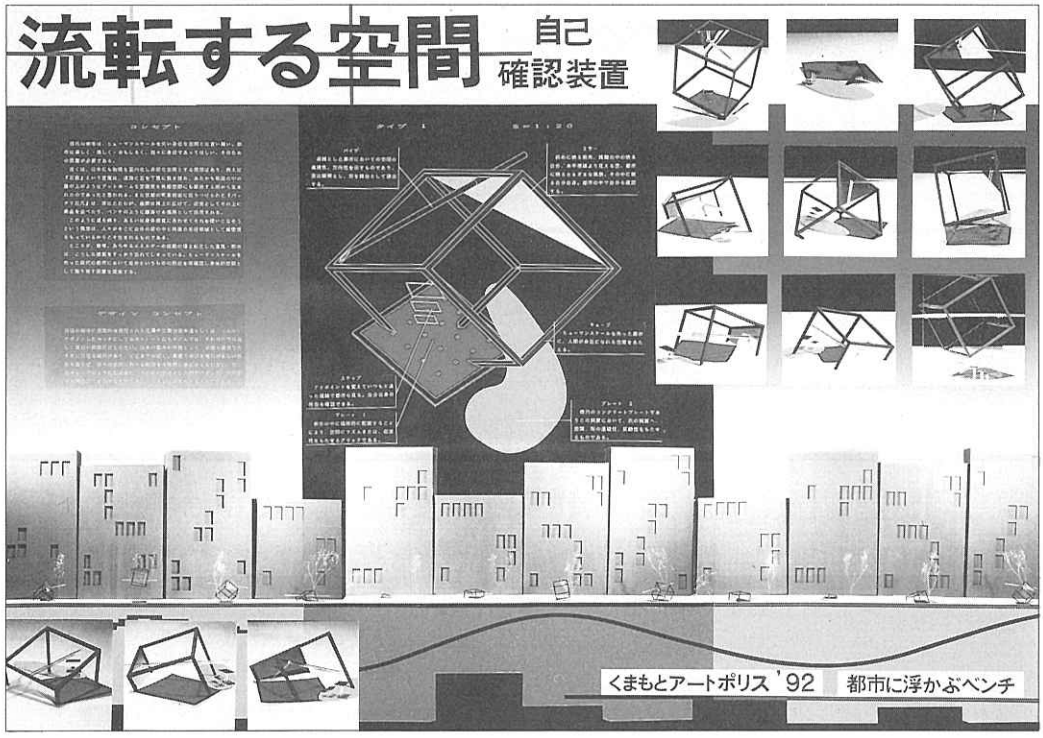
014 安藤　利幸
(五十嵐利幸)



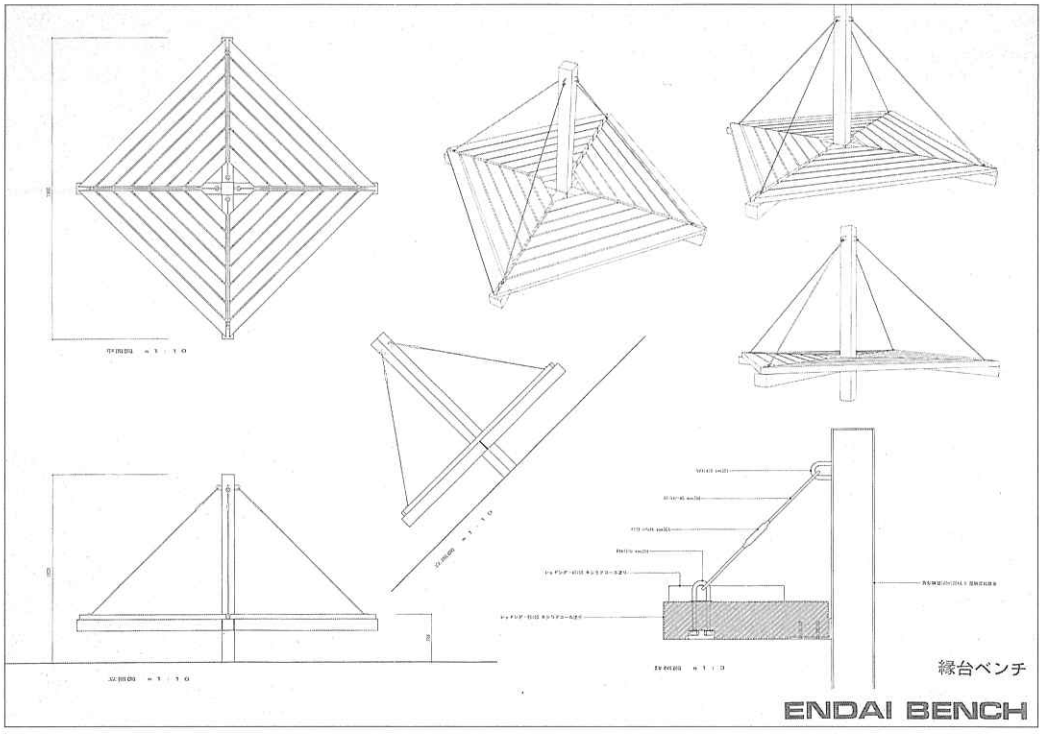
015 瓜生　勝美



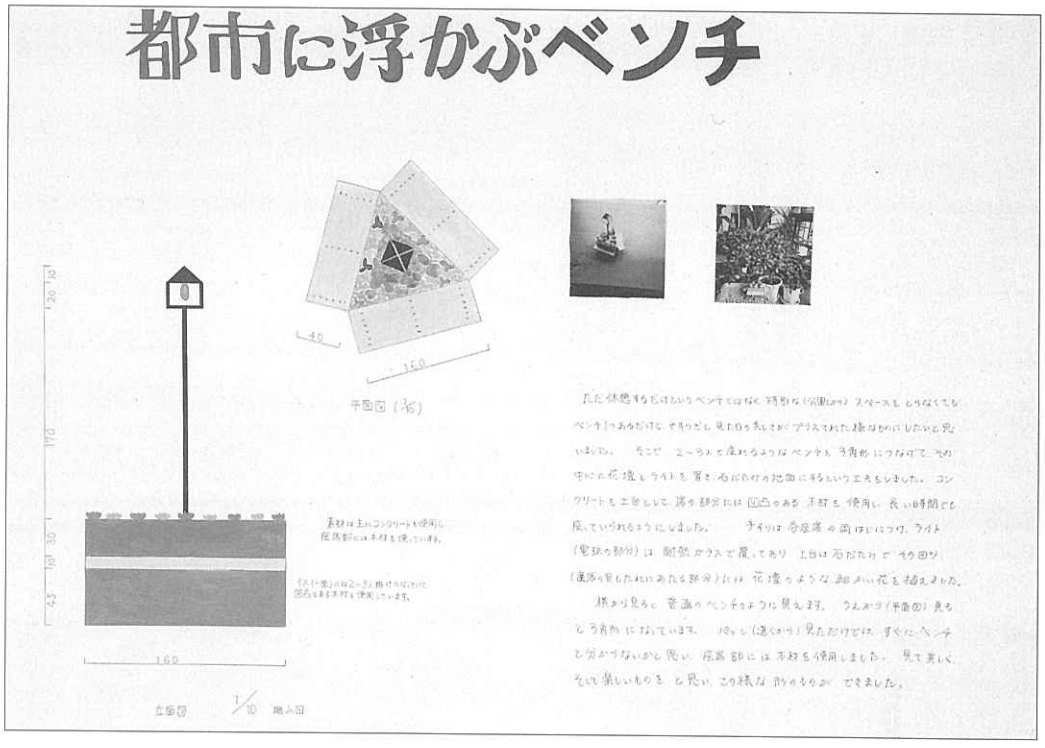
016 小石川正男
伊藤　圭吾
長坂　守康
我那覇　裕
高橋　昌宏



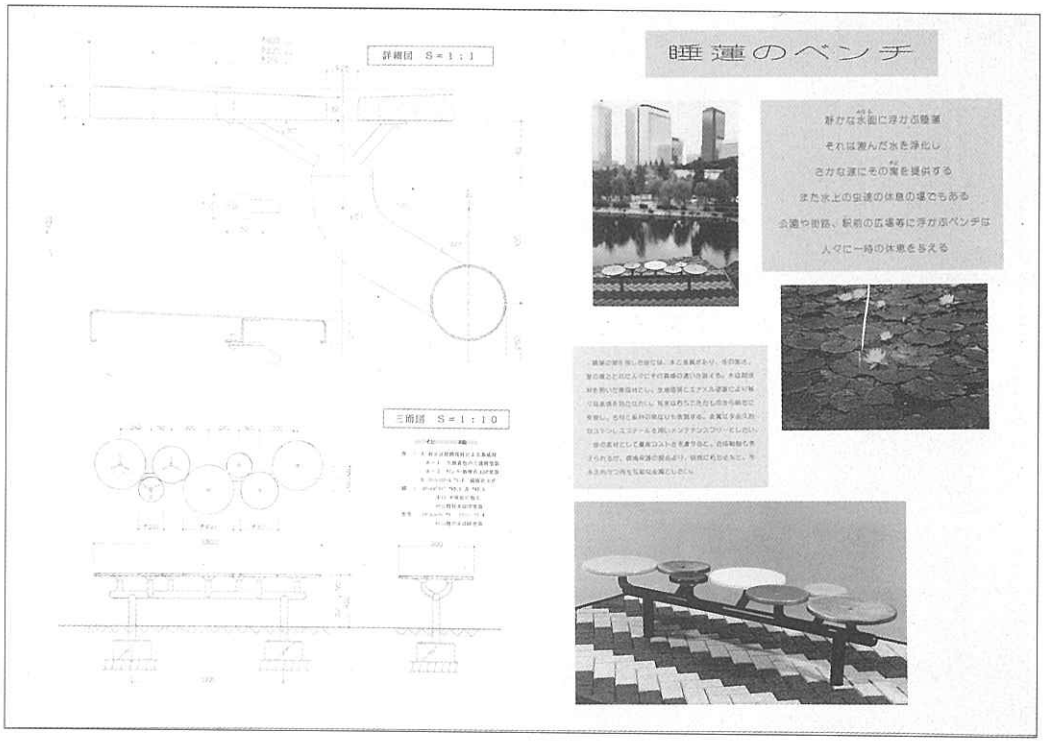
017 江口　征男



018 荻　京子

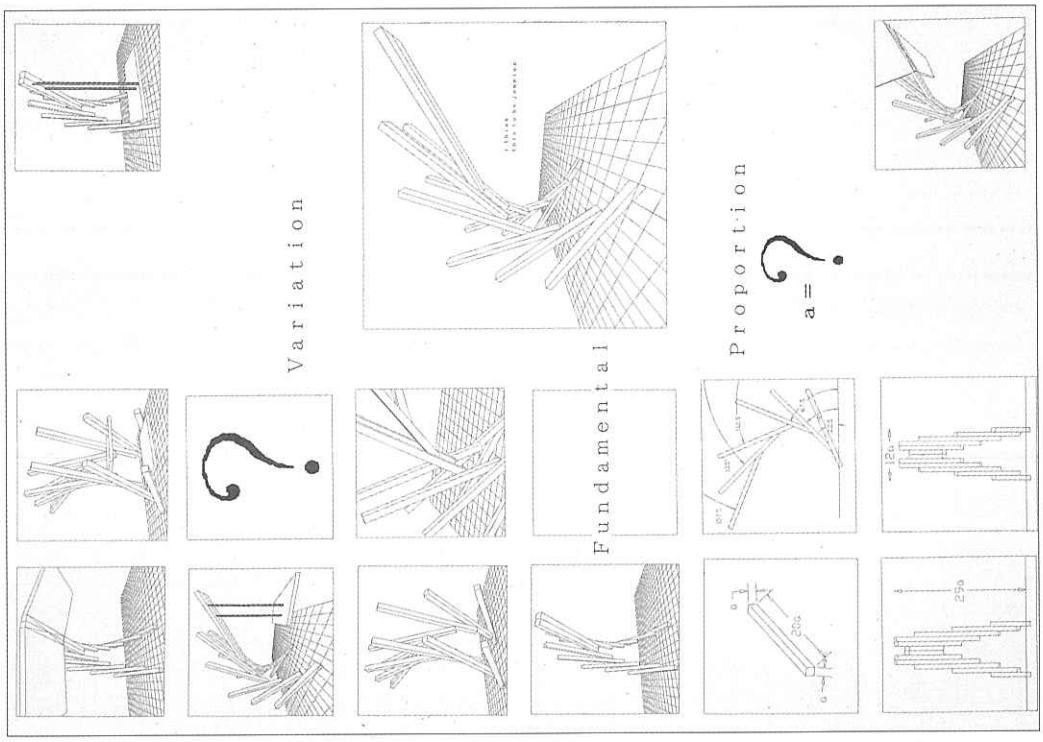


019 野原　建広

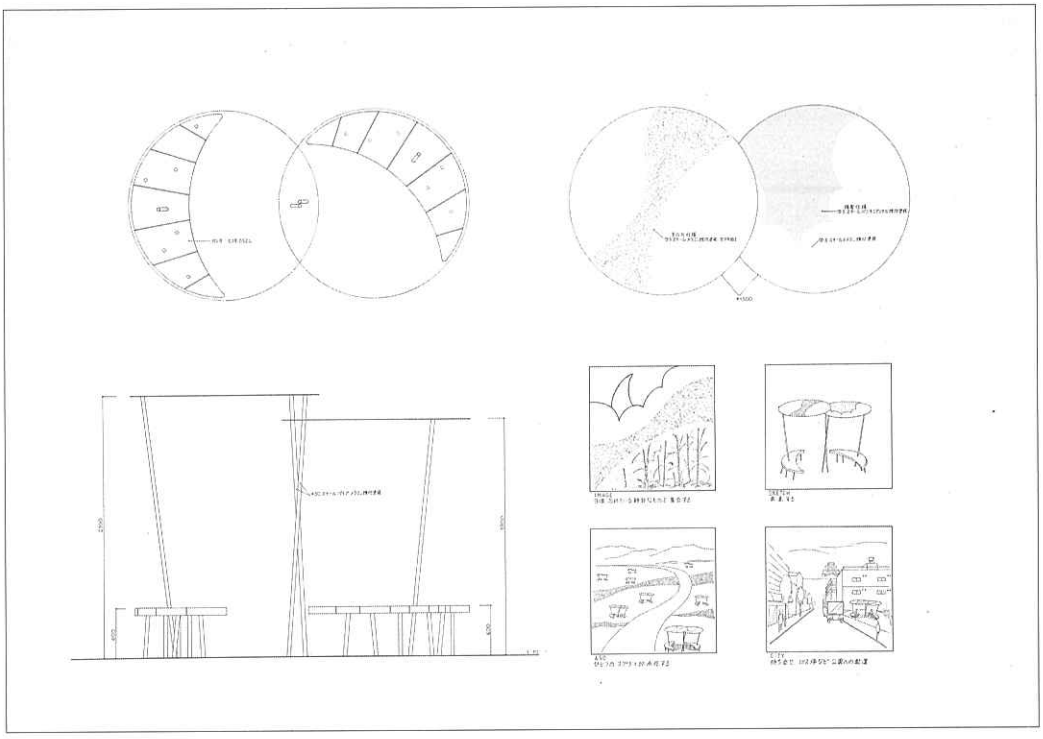


020 西郷　正浩

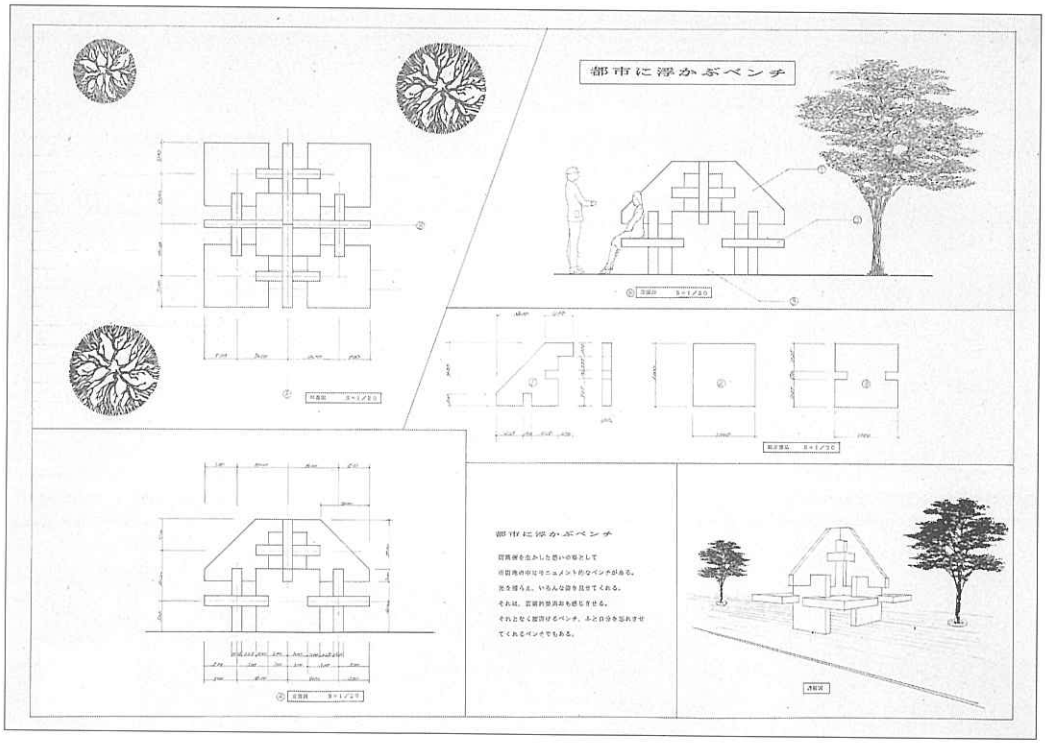
縦



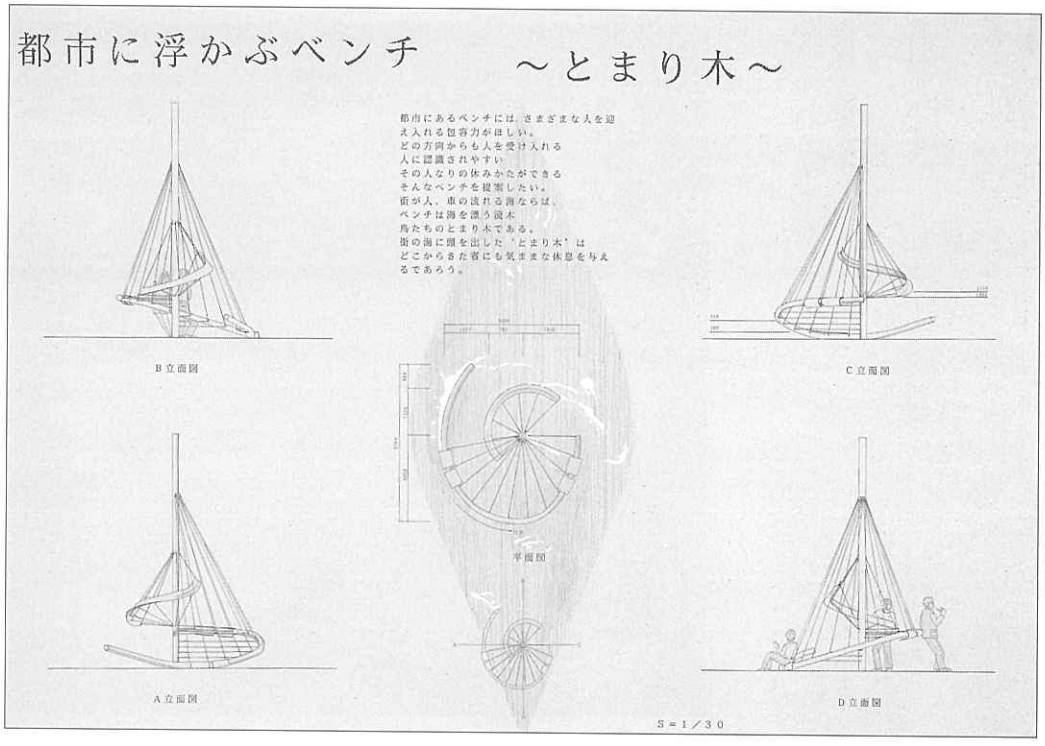
021 宮内　貞裕



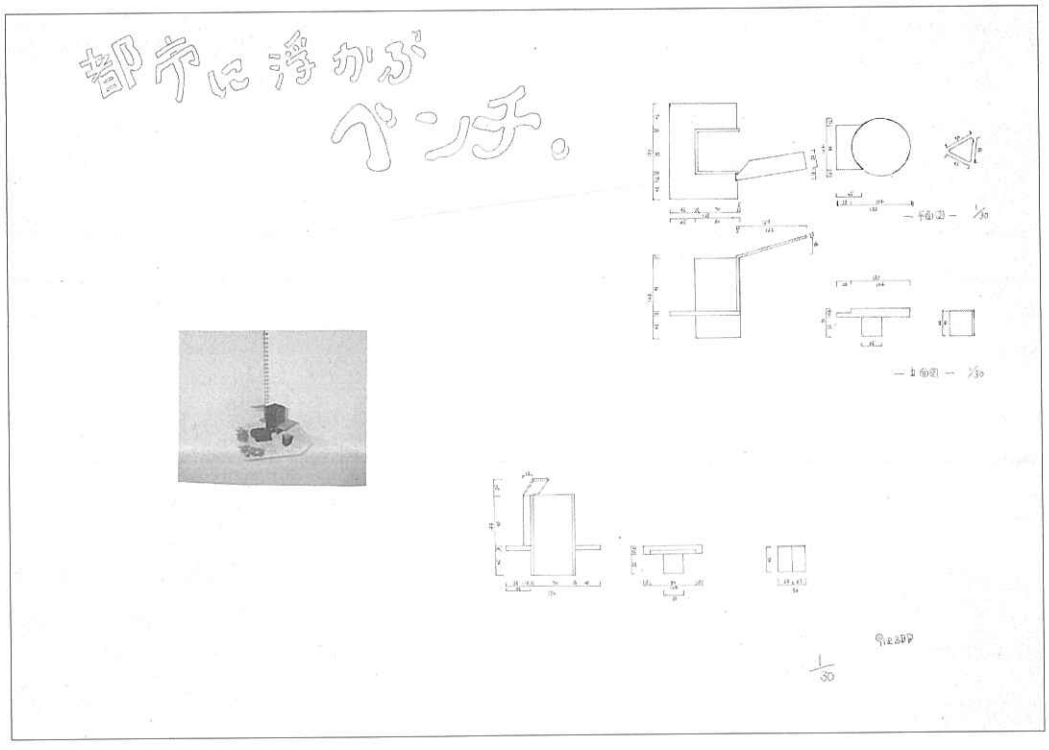
022 榮永　敏徳



023 弓場　泰子

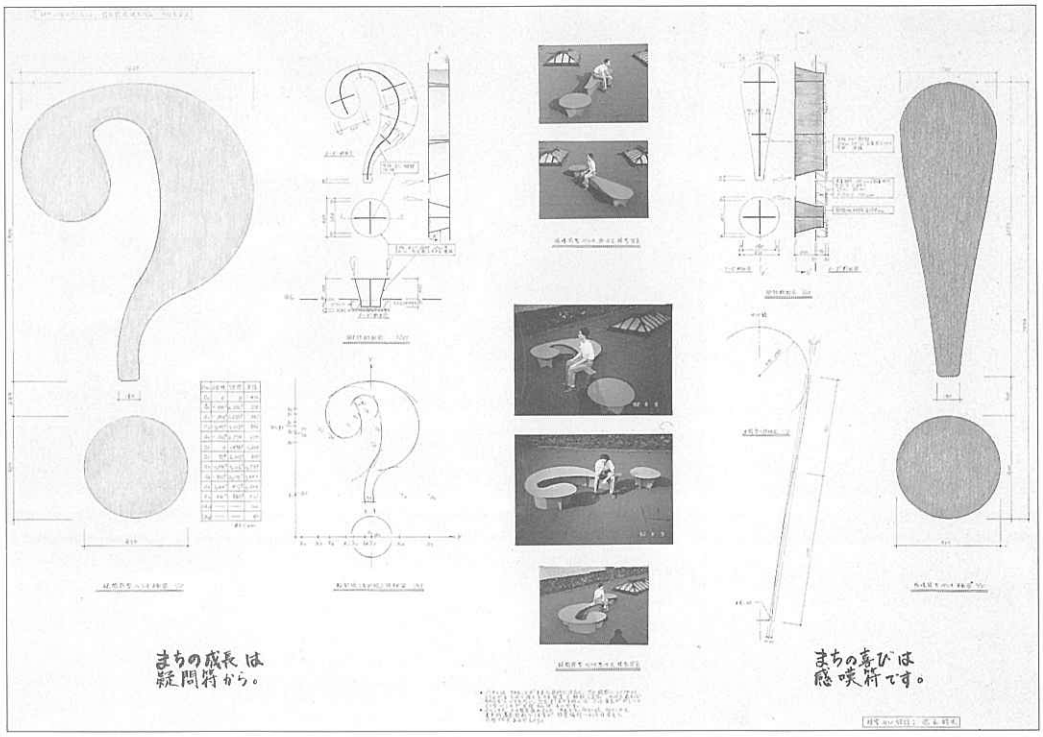


025 大塚　智子

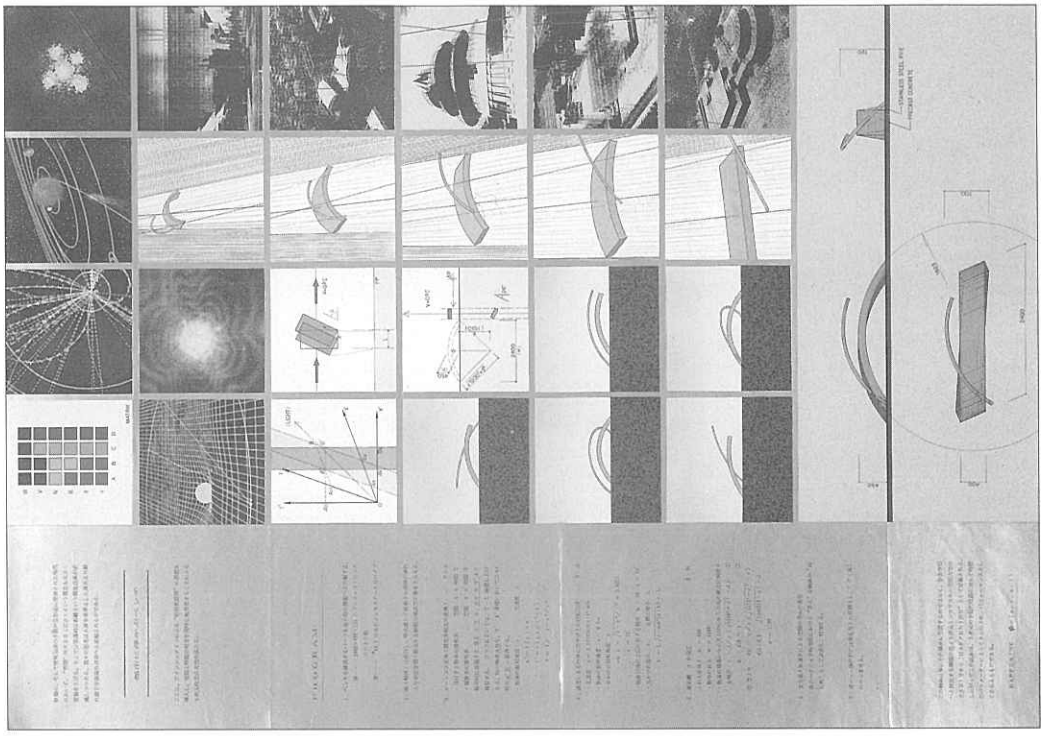


027 大友　洋佑
松隈　重利
沢田　　博
加藤　孝光

028 徳永　昭夫

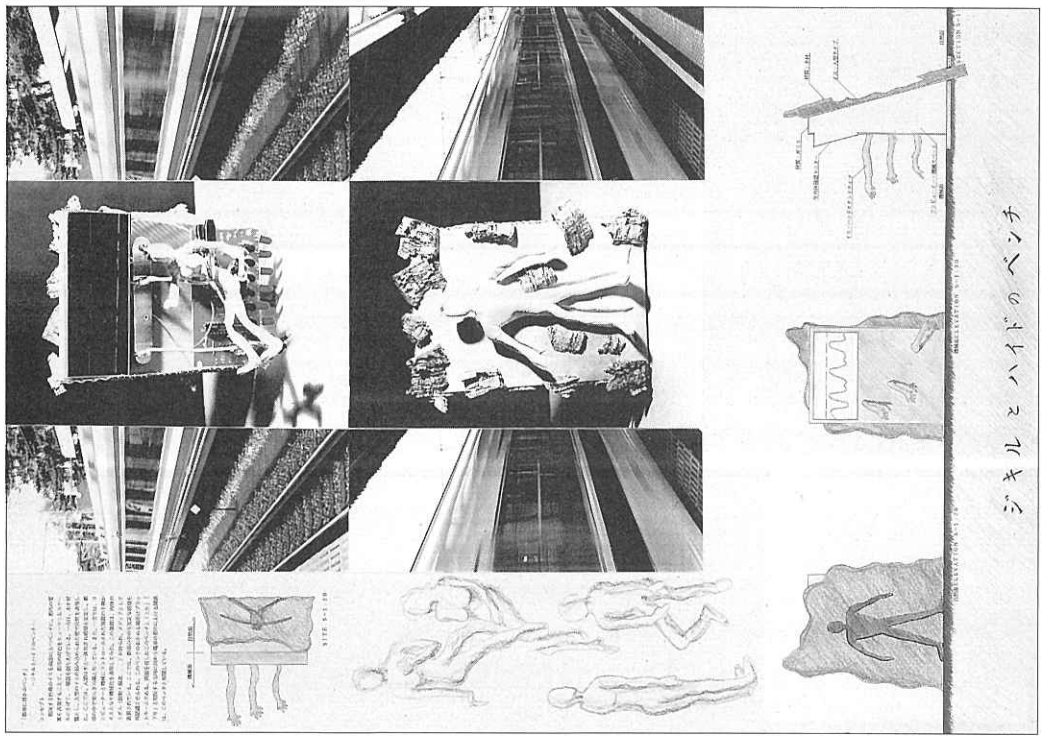


029 松本　正富
斉藤　芳徳



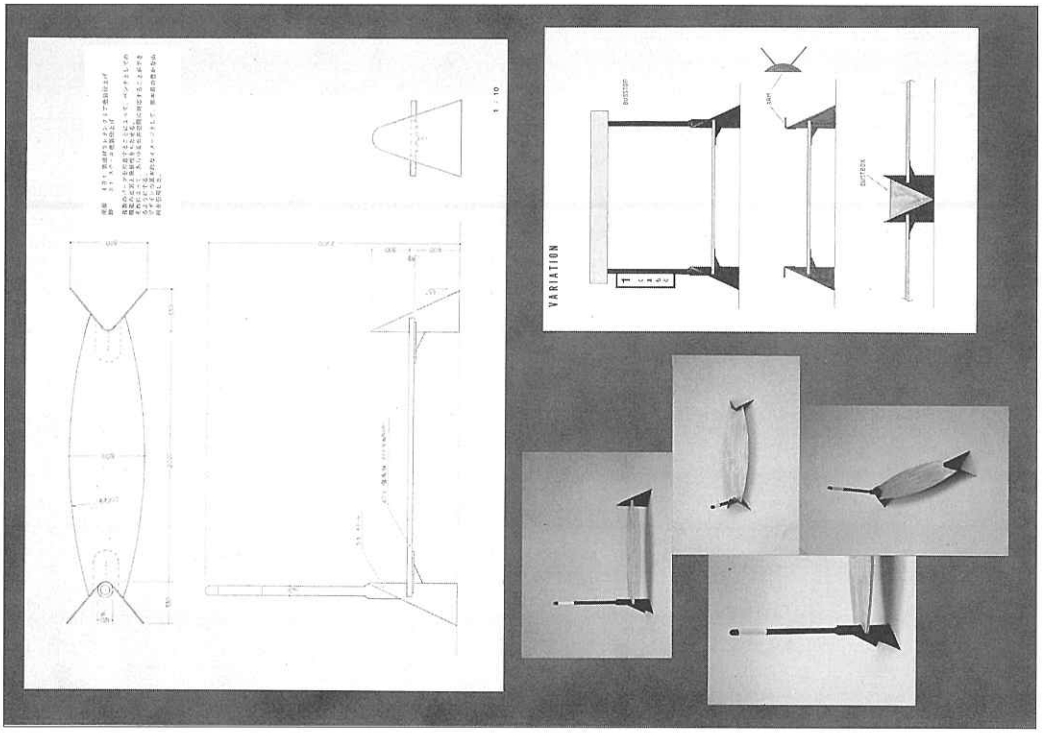
縦

030 佐藤　哲之



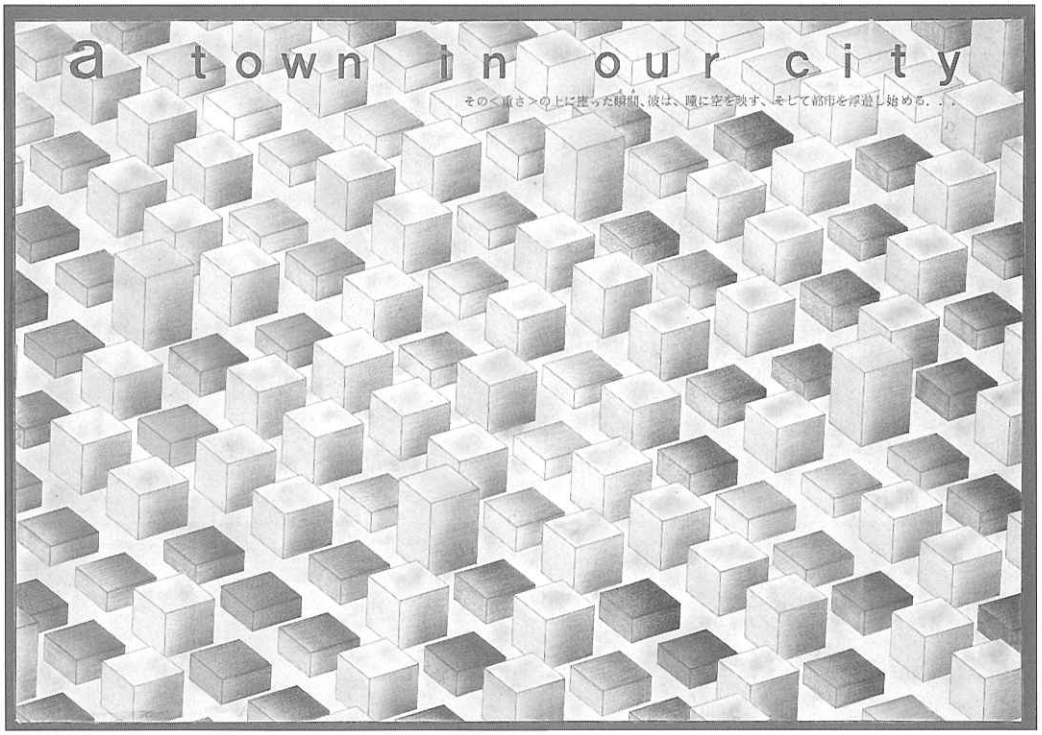
縦

031 田中　　忍

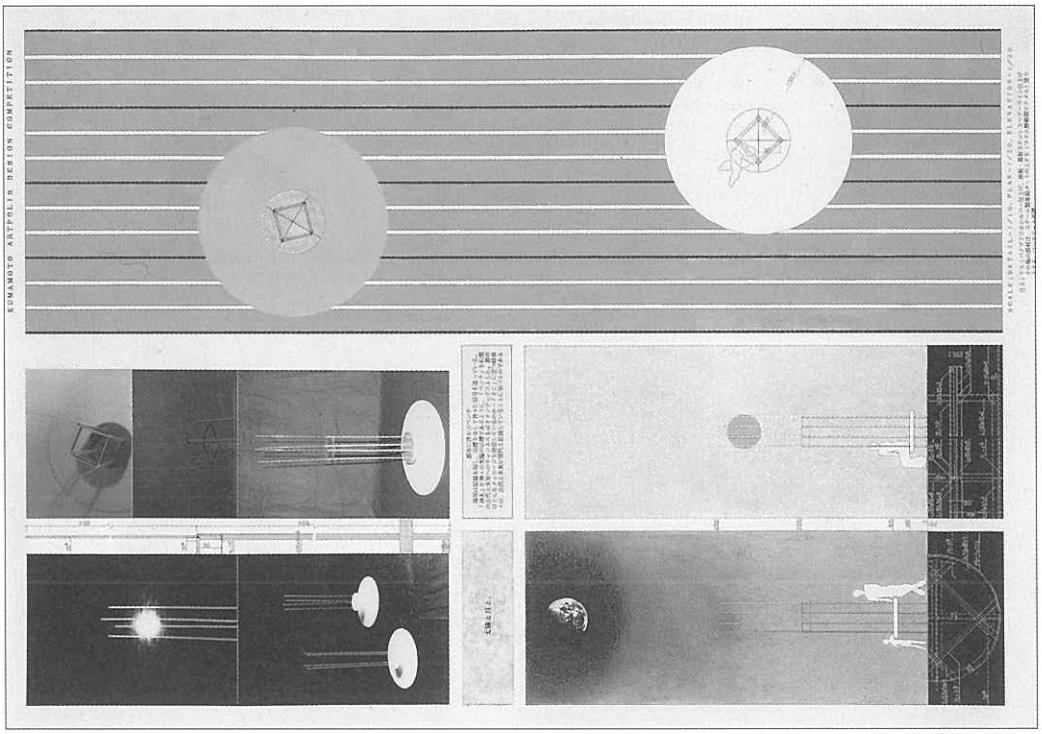


縦

032 市原　忍



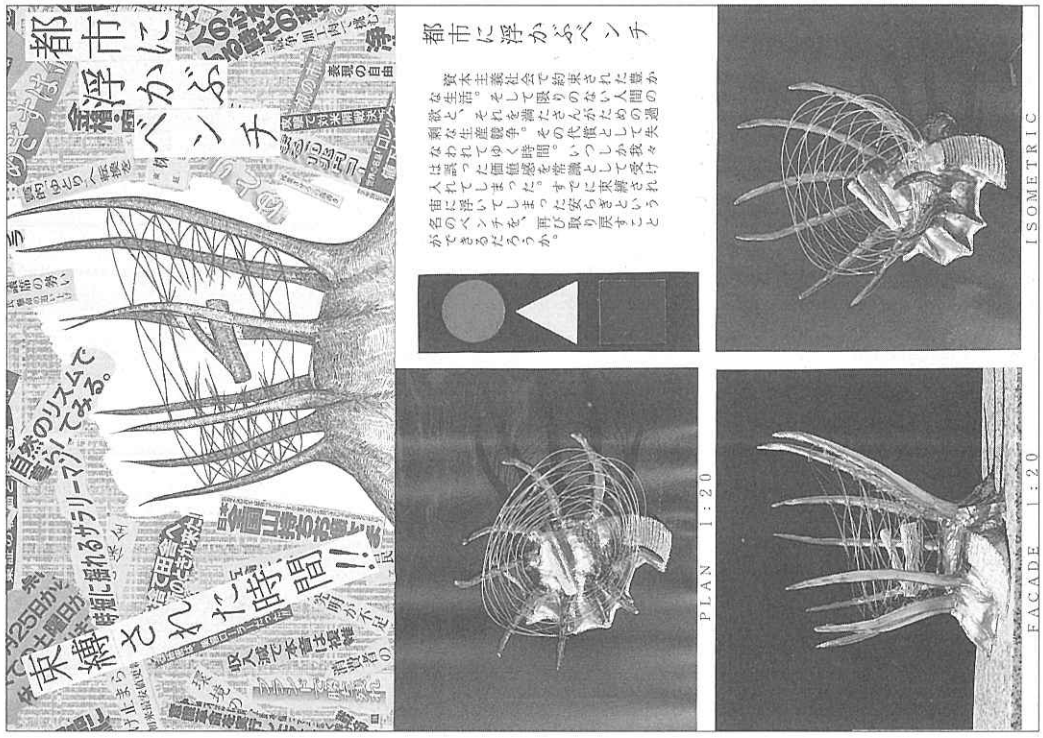
033 河原　啓三



縦

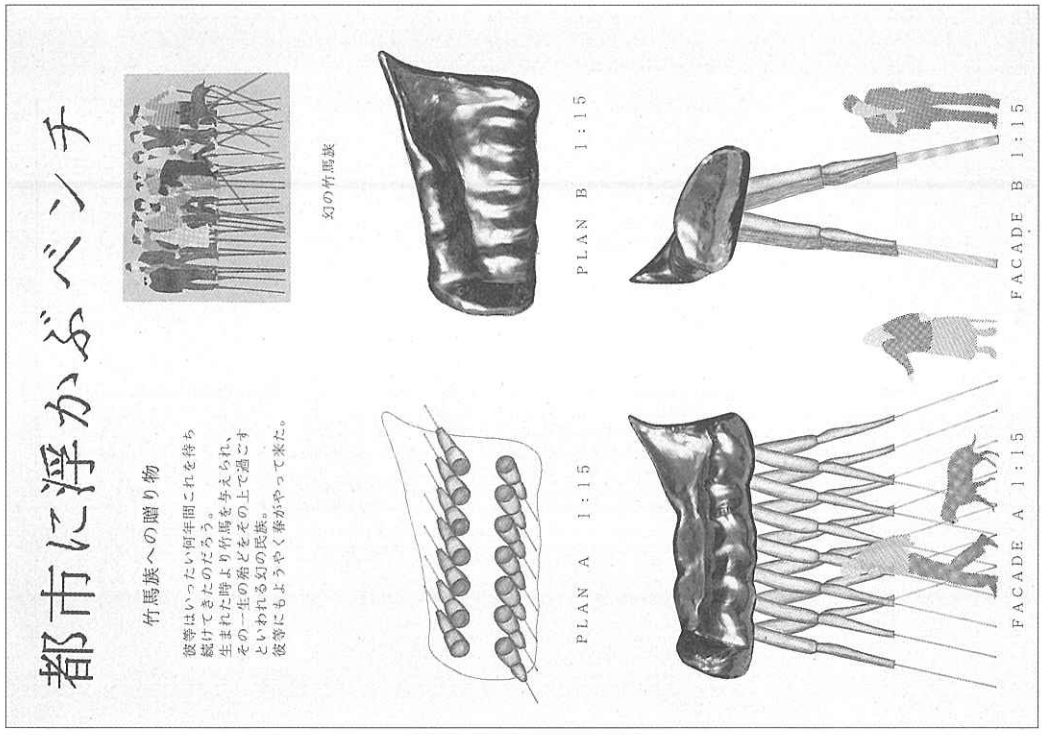
034 田原　勇二

縦



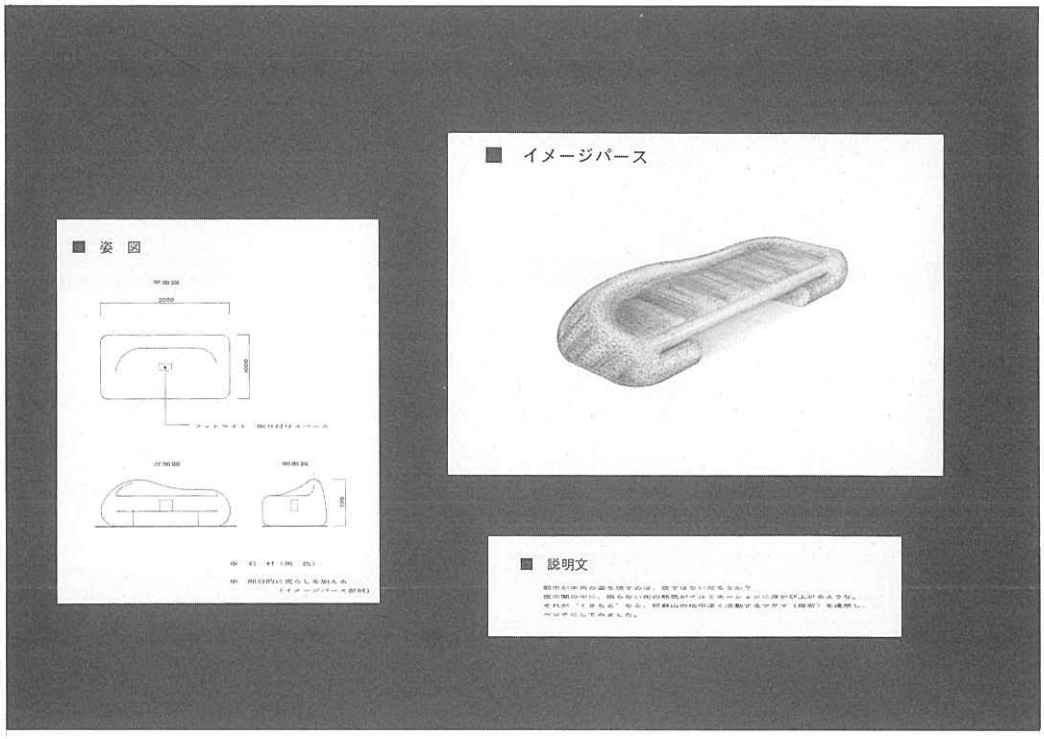
035 田原　勇二

縦



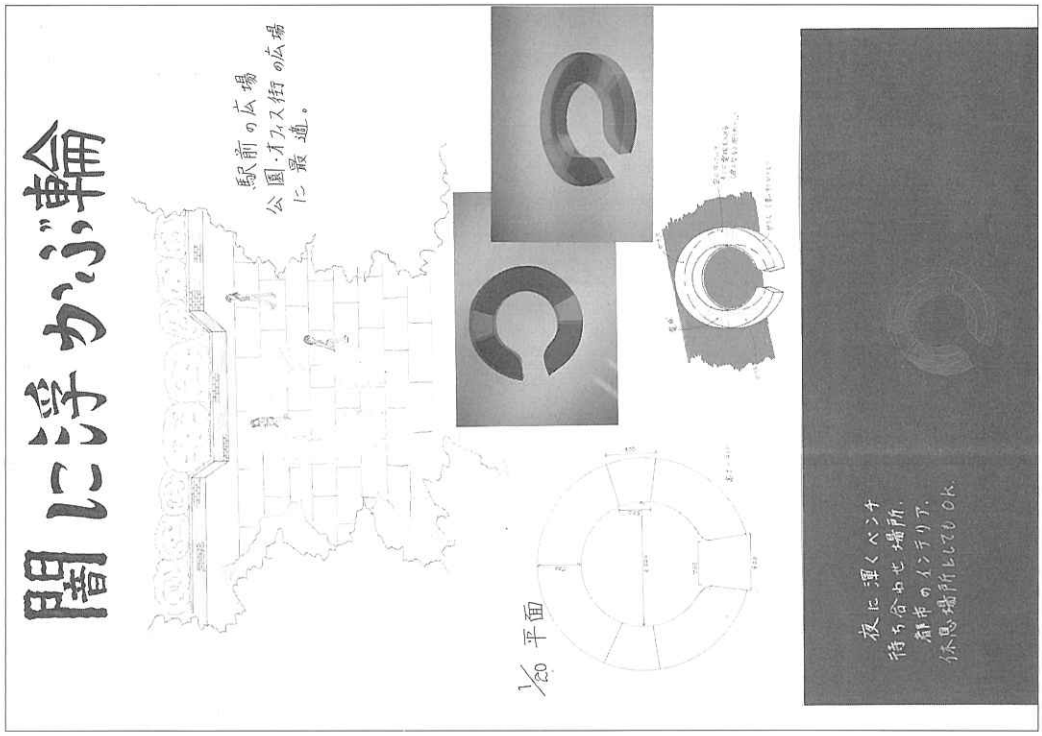
036 山口紀美子

037 加藤　千尋



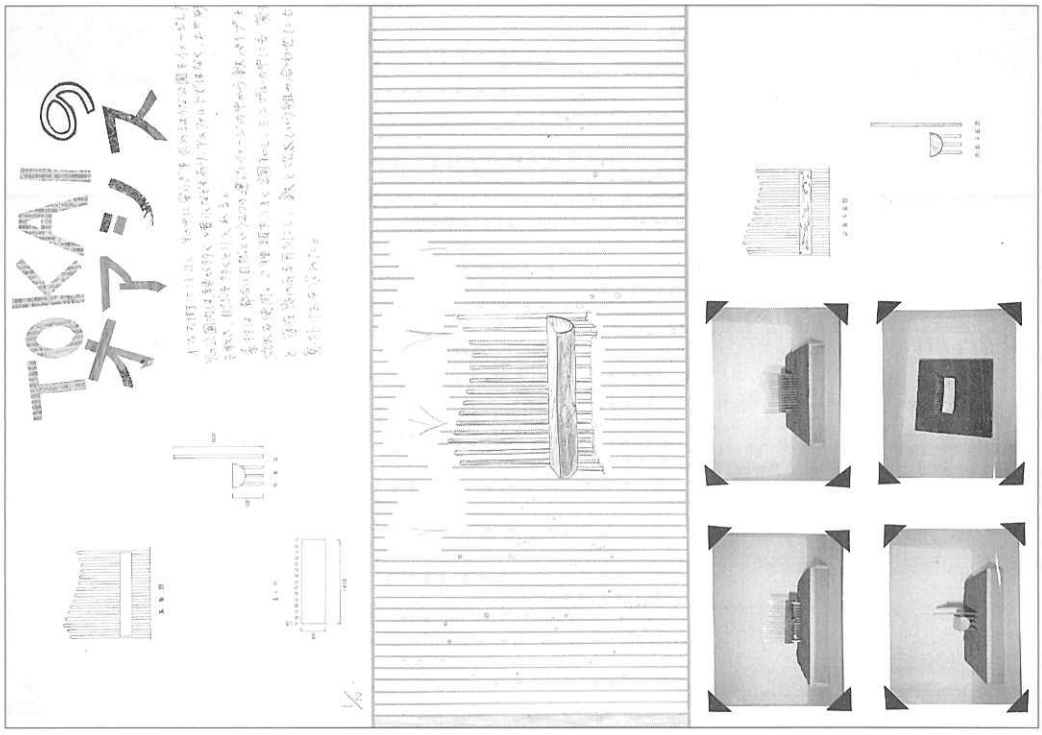
038 佐々木知子

縦



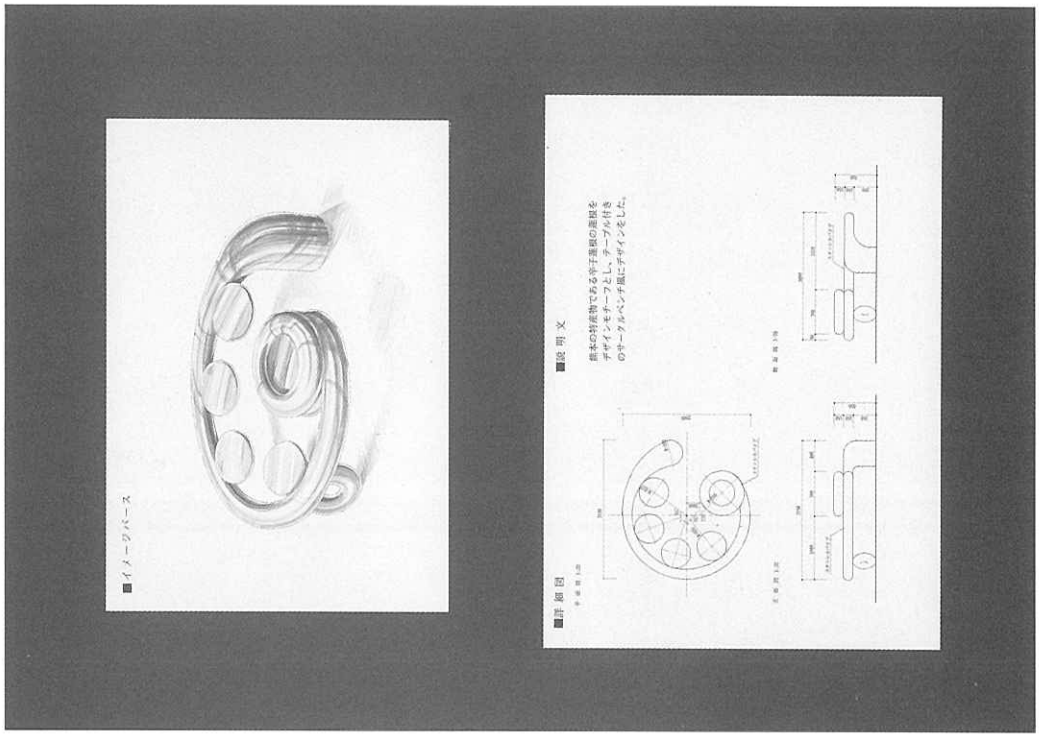
039 西舘　美幸

縦

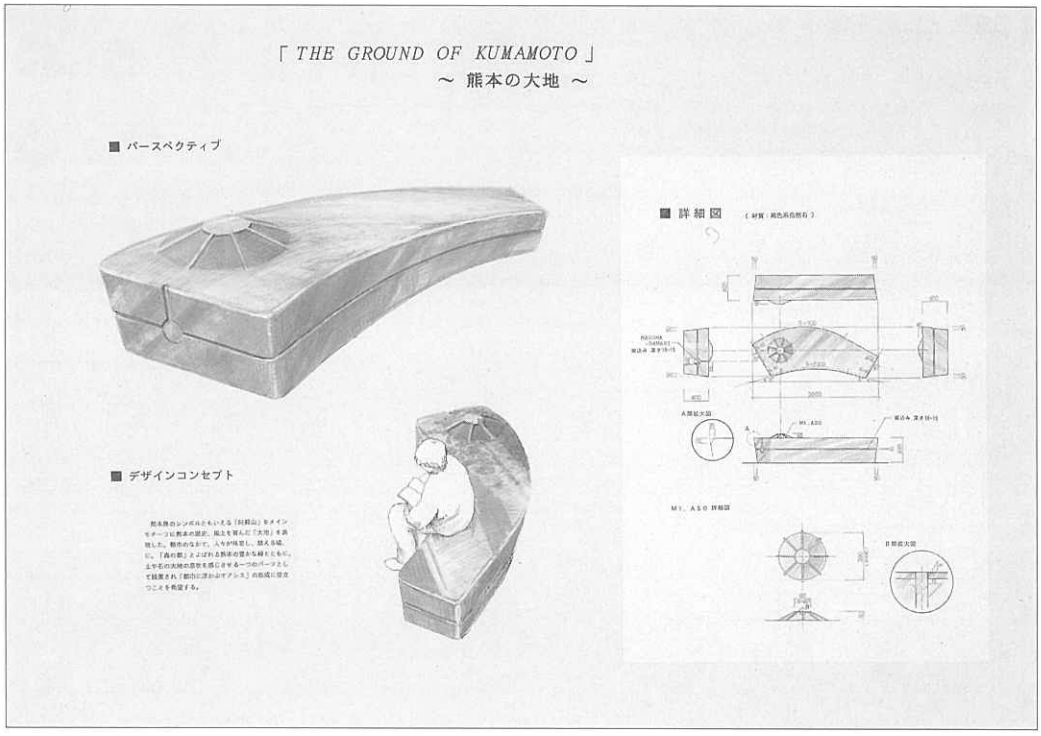


040 片山真由美

縦

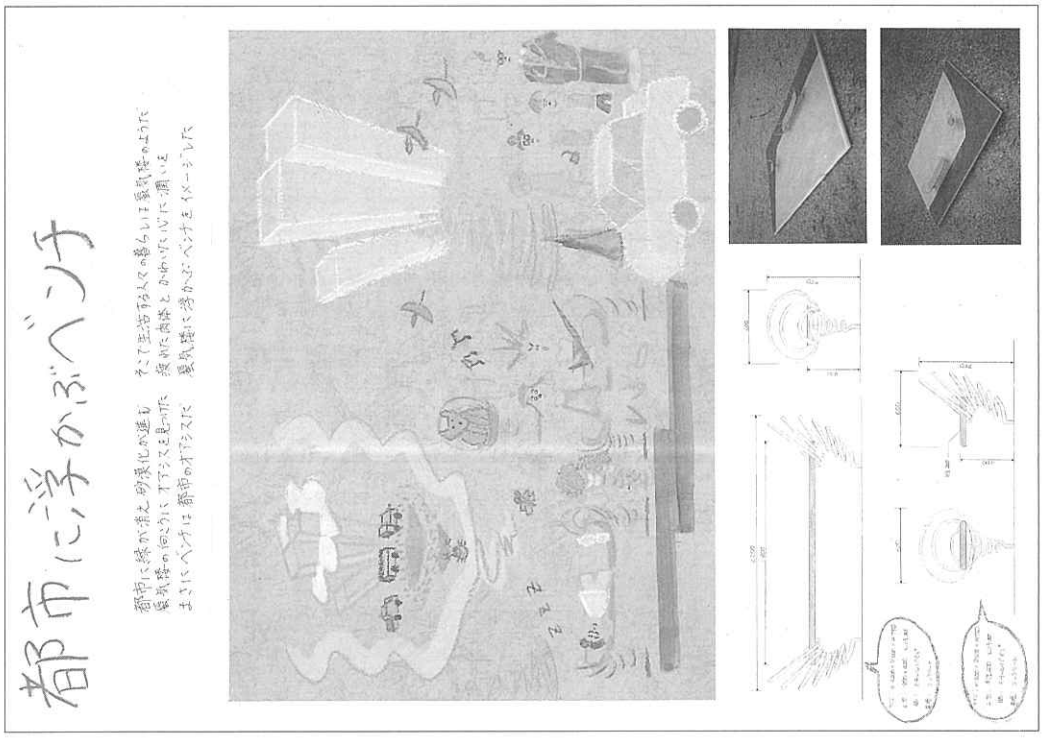


042 田仲　美和

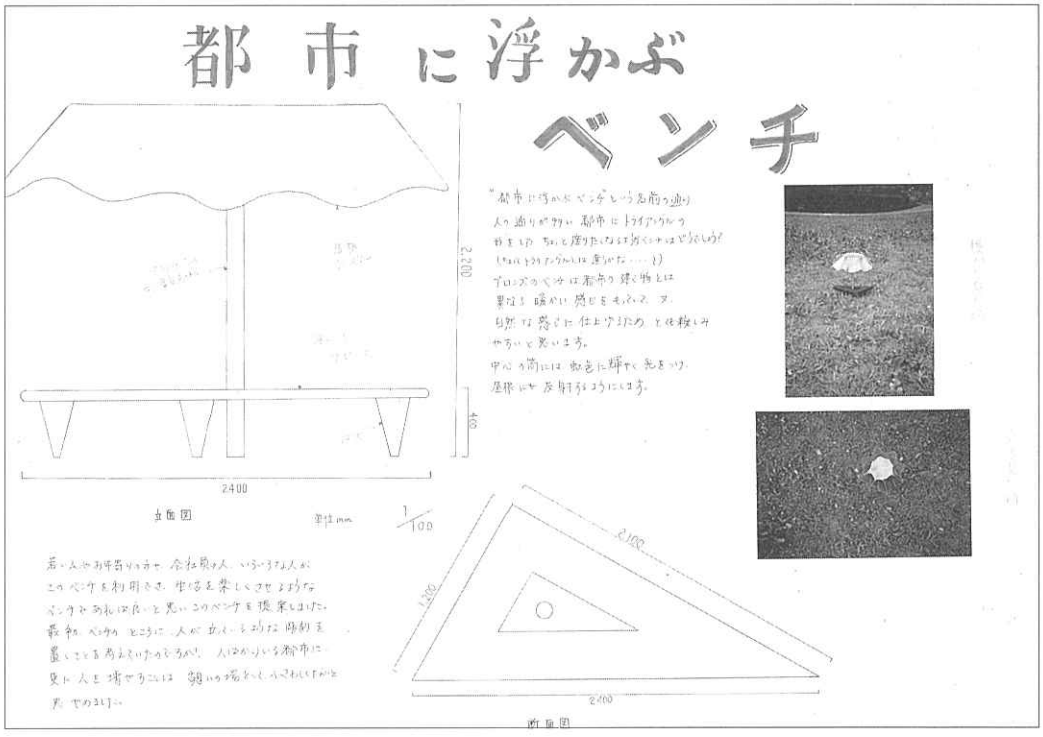


043 松尾　敏子

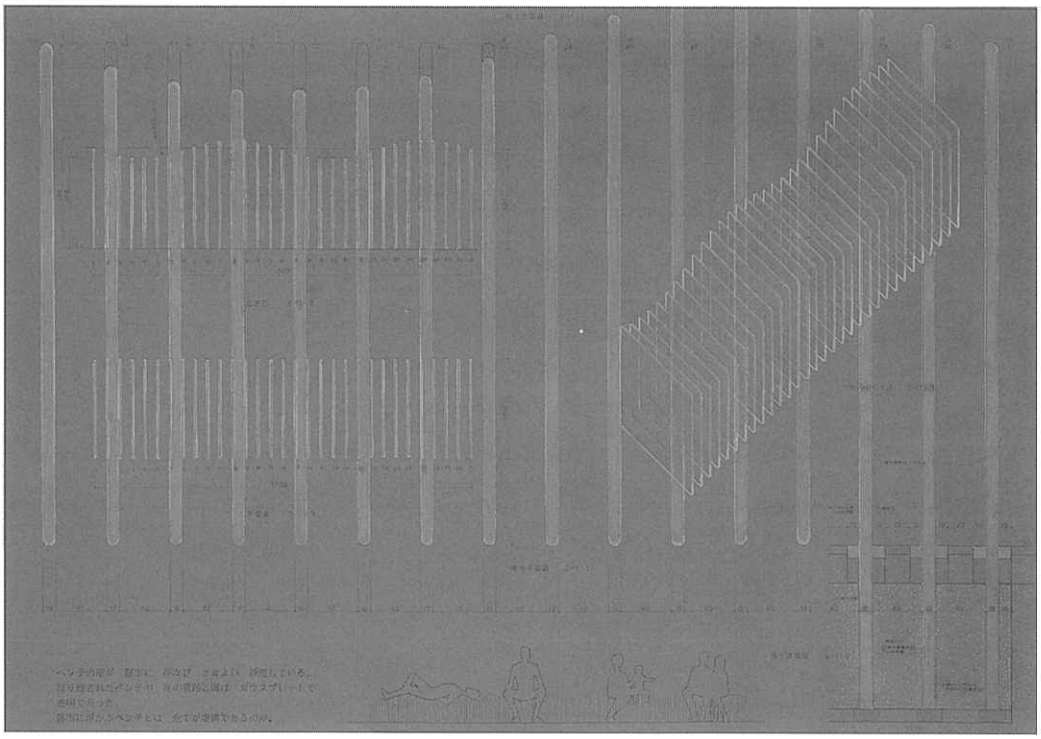
縦



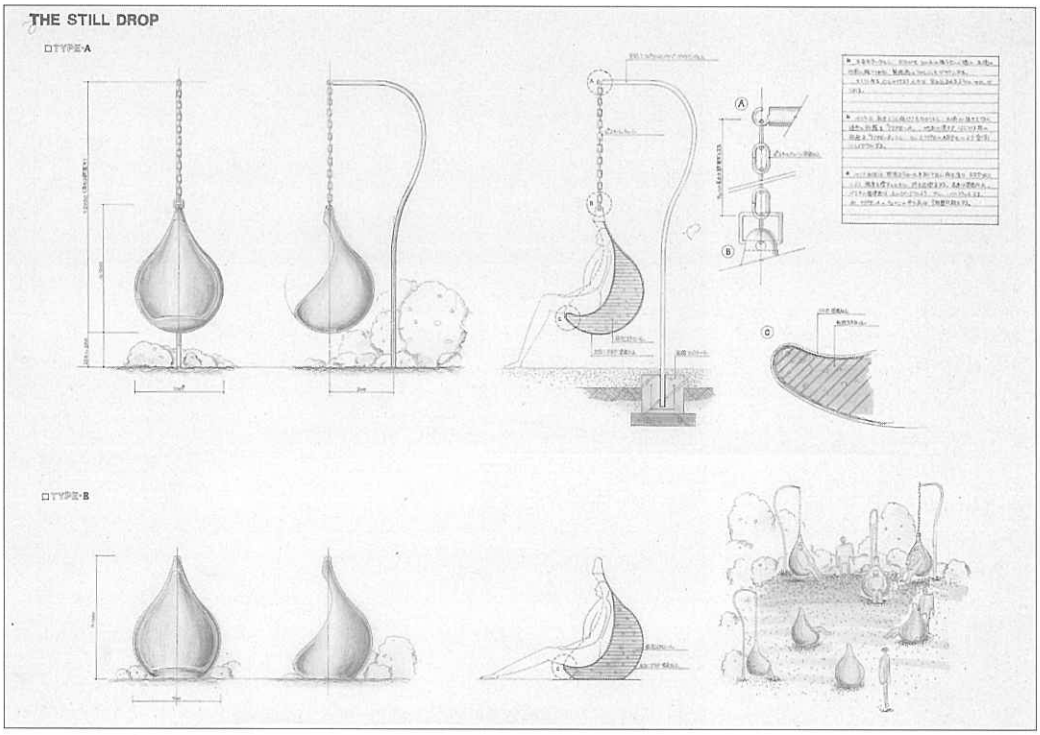
044 三野村真理子



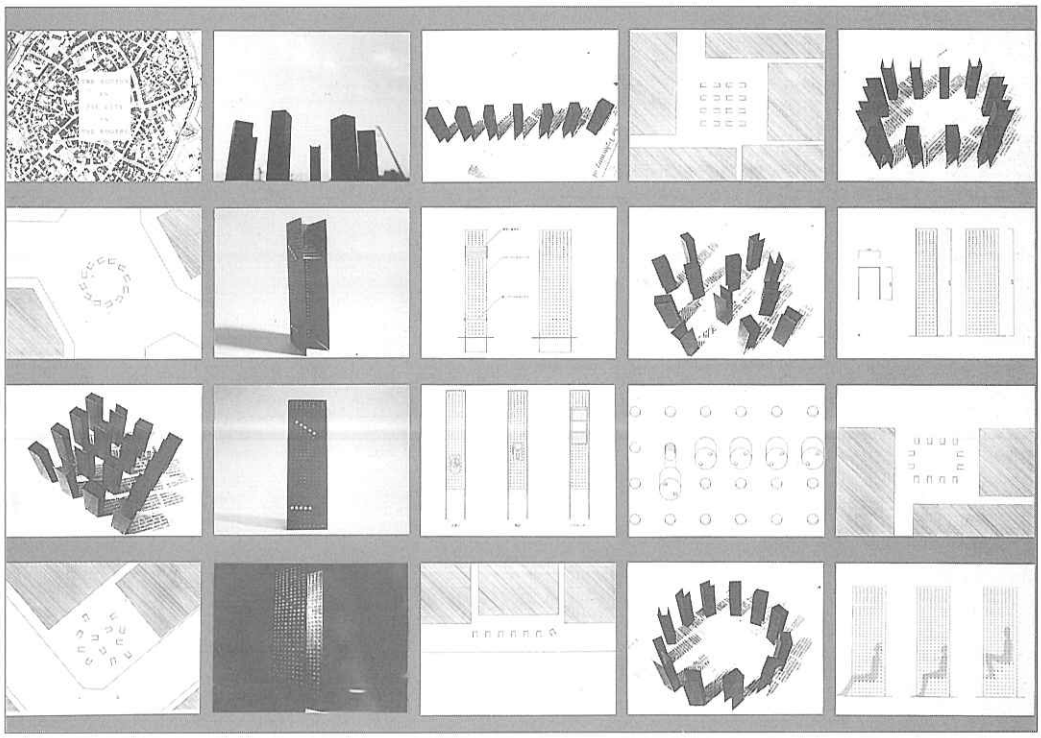
045 永友　秀人
渋谷　武治



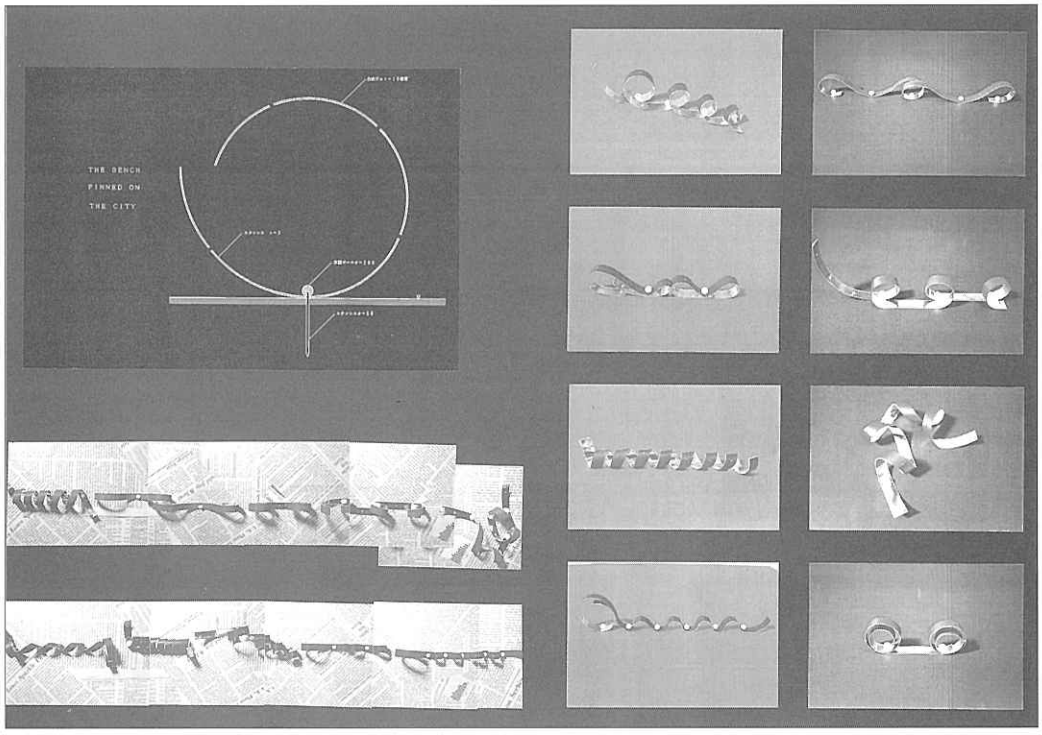
046 田中　清隆



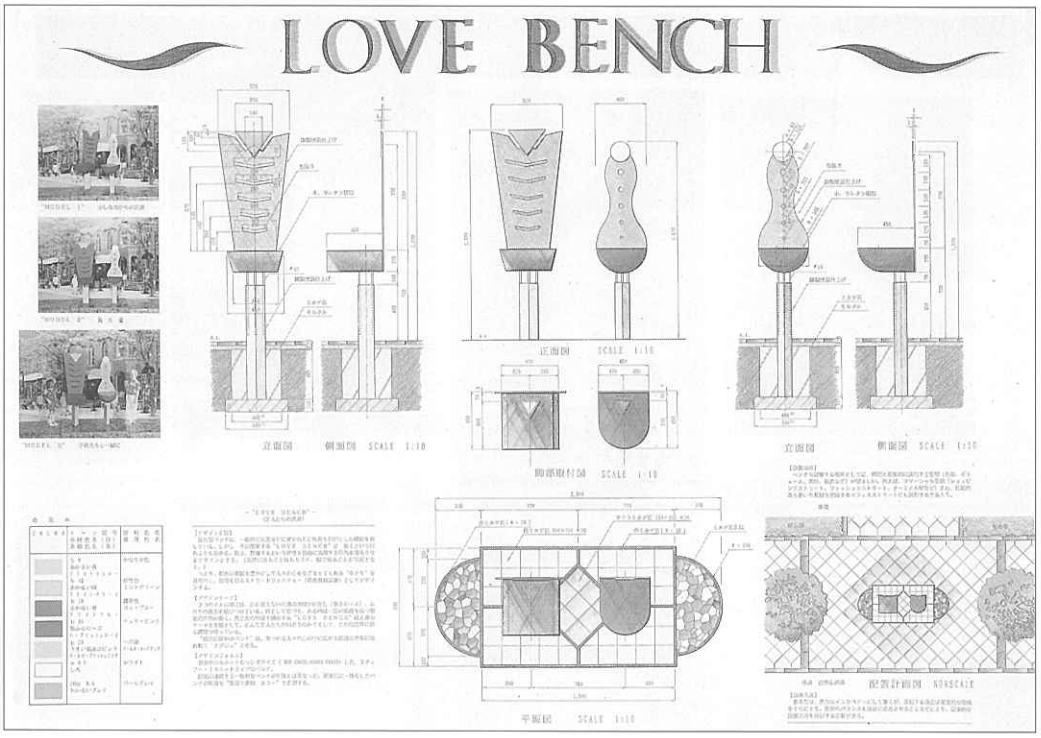
048 青柳　健次



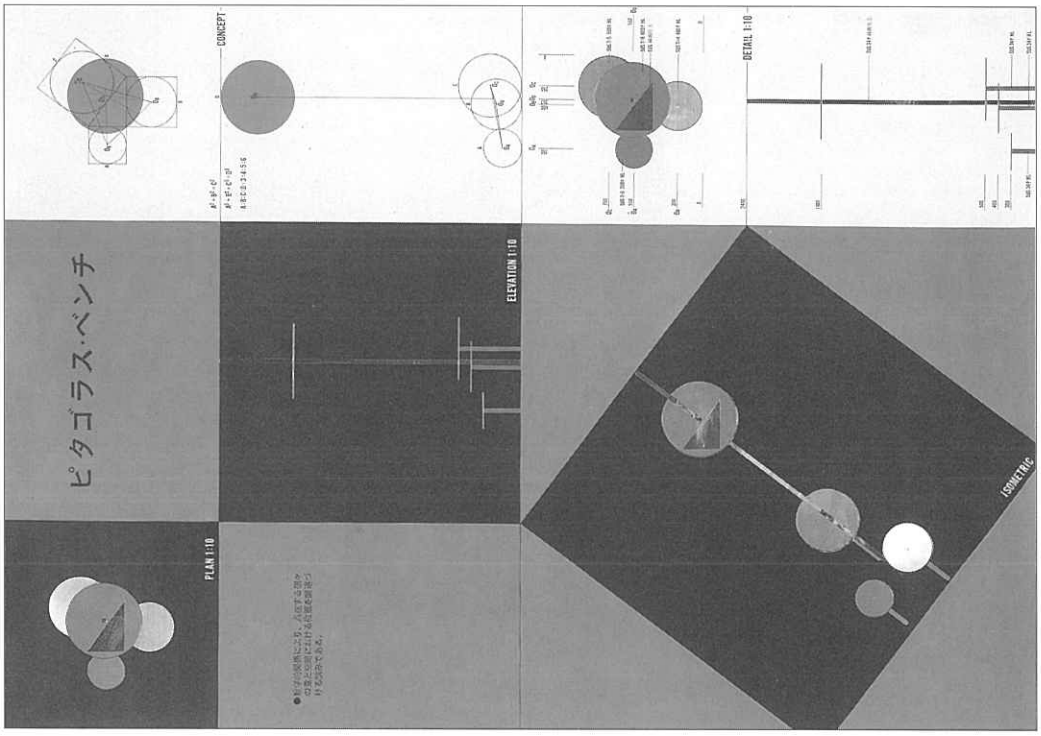
049 青柳　健次



050 田邊　治通



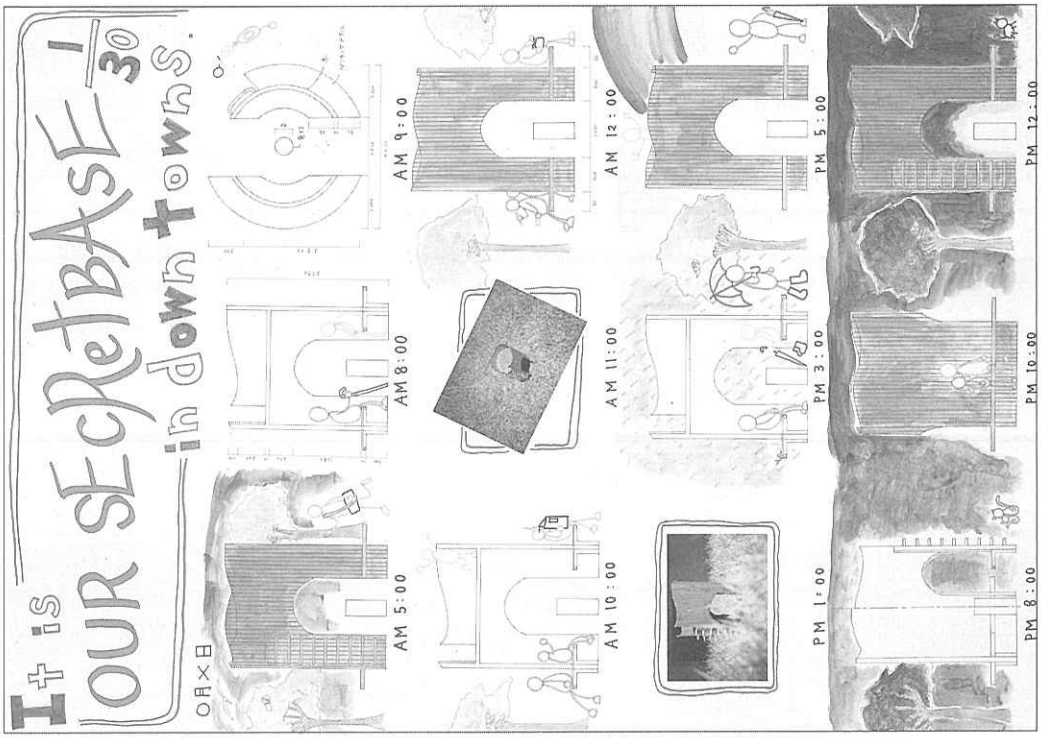
051 南　　泰



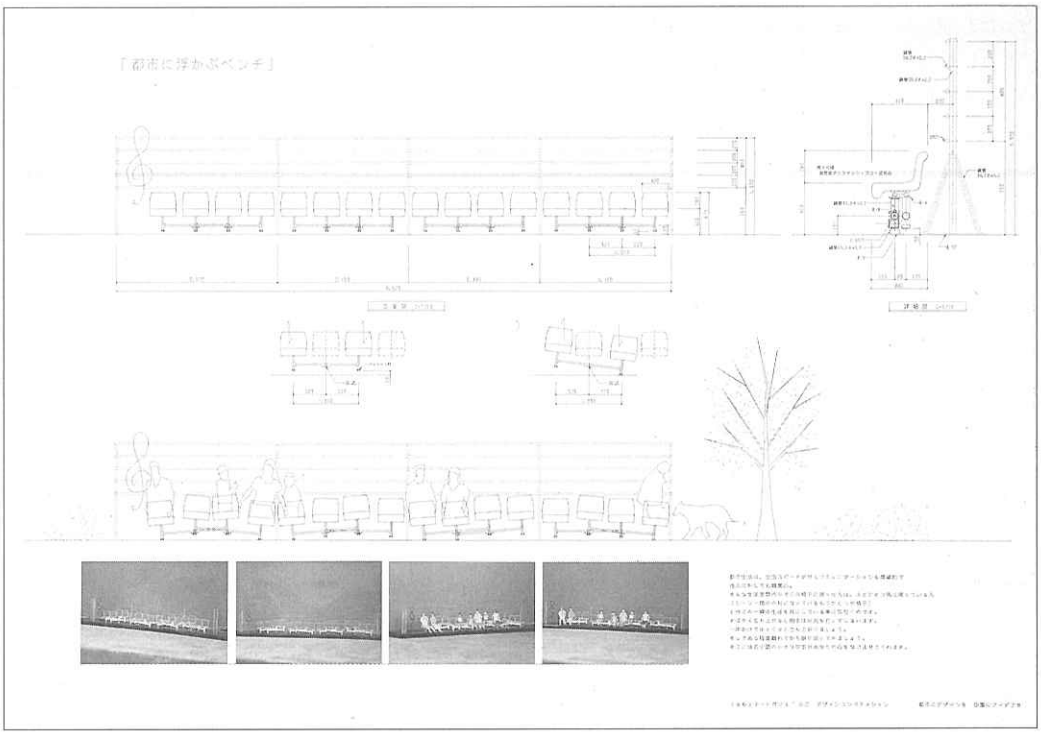
縦

052 井手野睦子

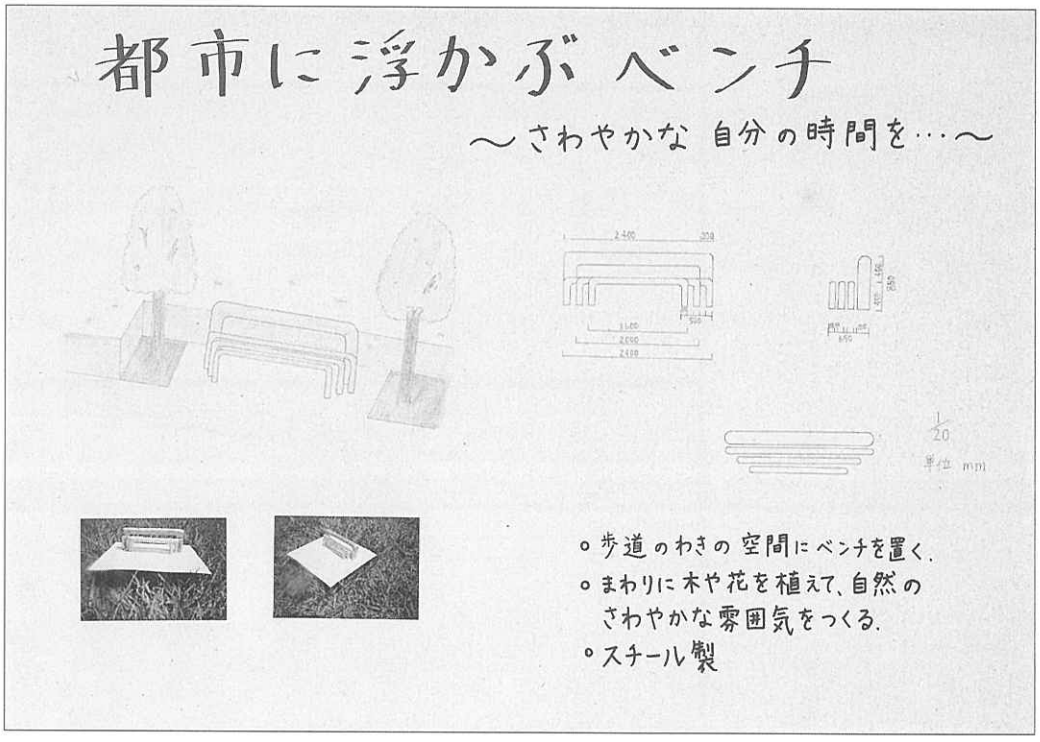
縦



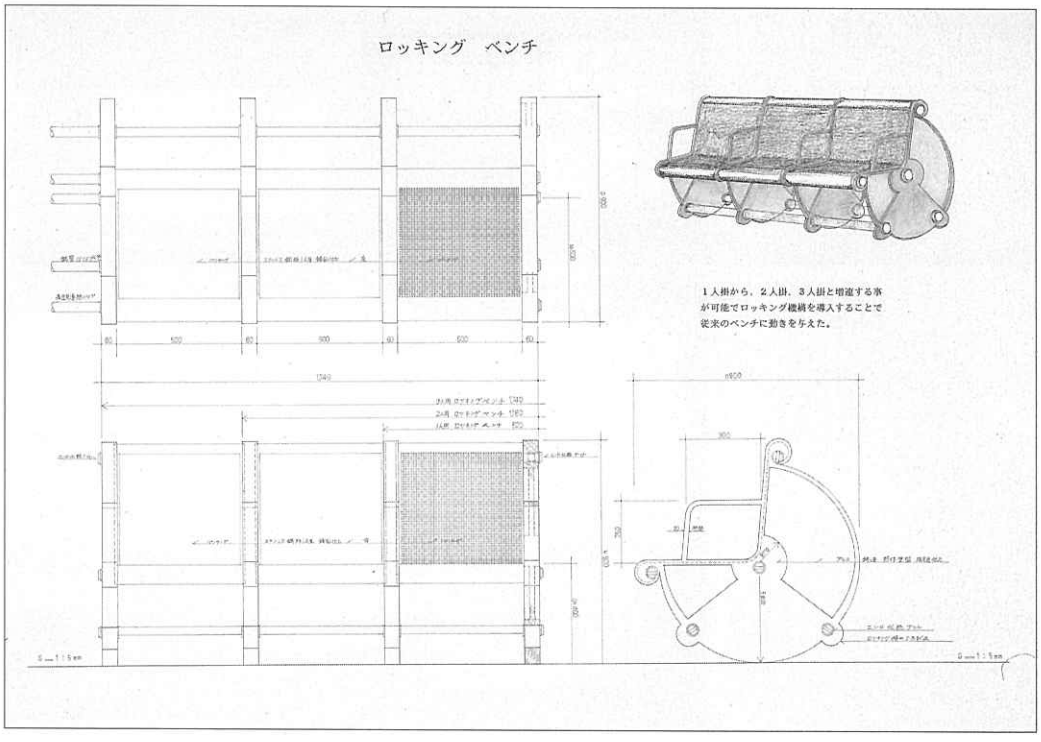
053 西野　正之



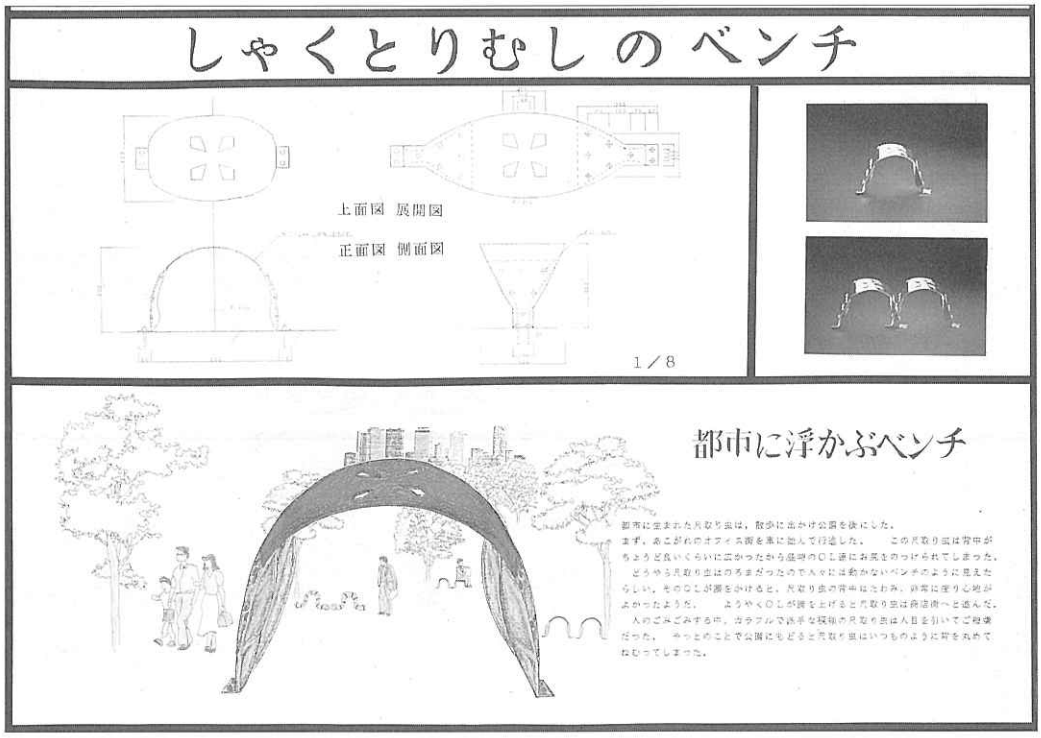
054 大原　紀子



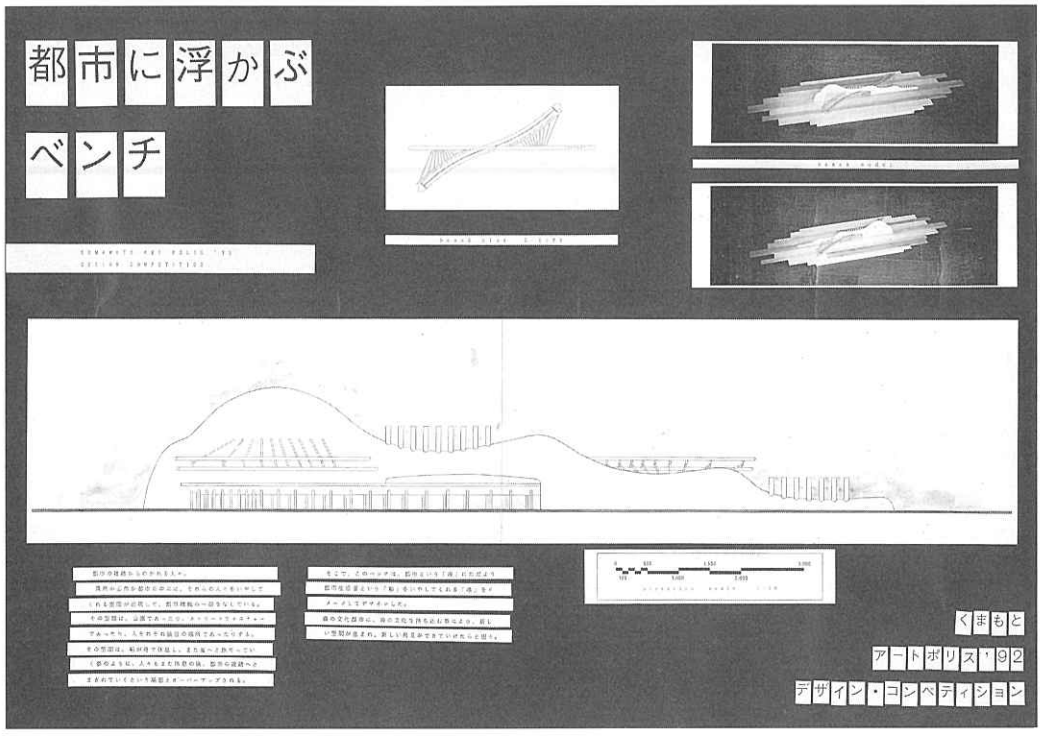
055 七谷百合子



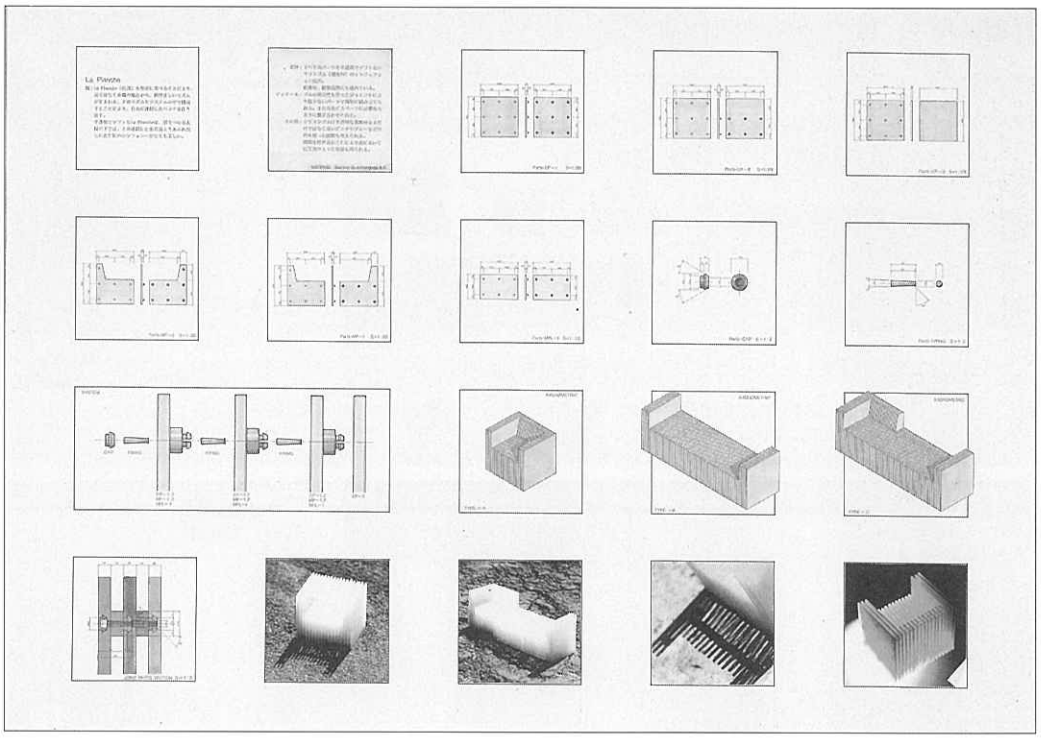
056 梅原千津子



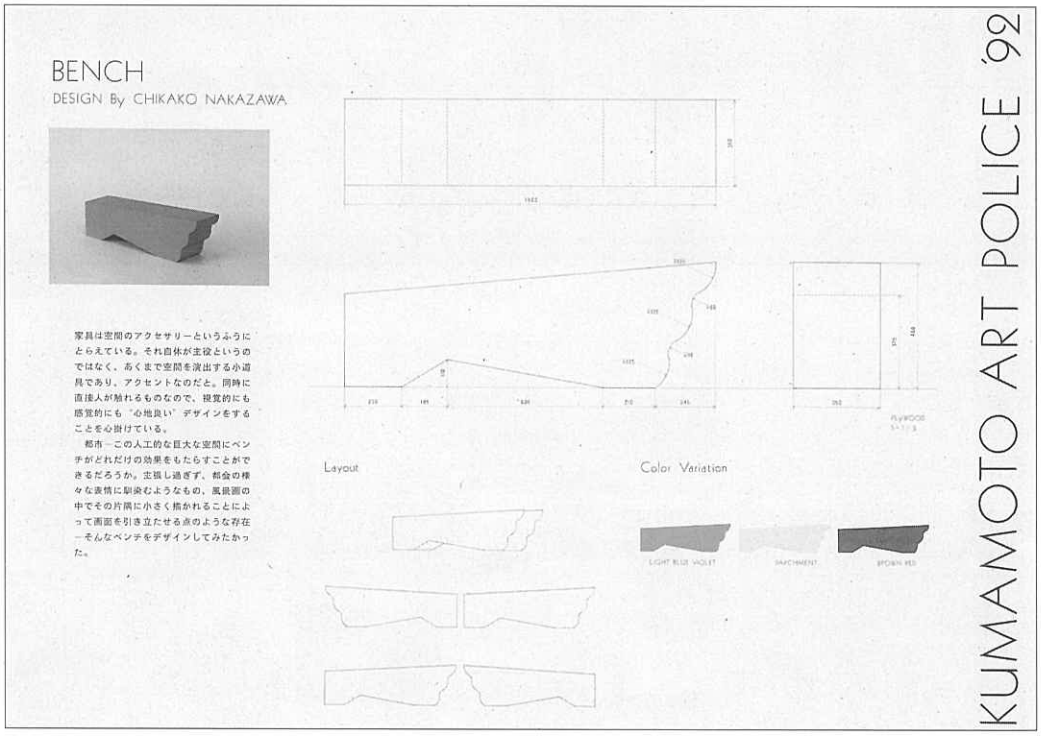
057 井上　弘也



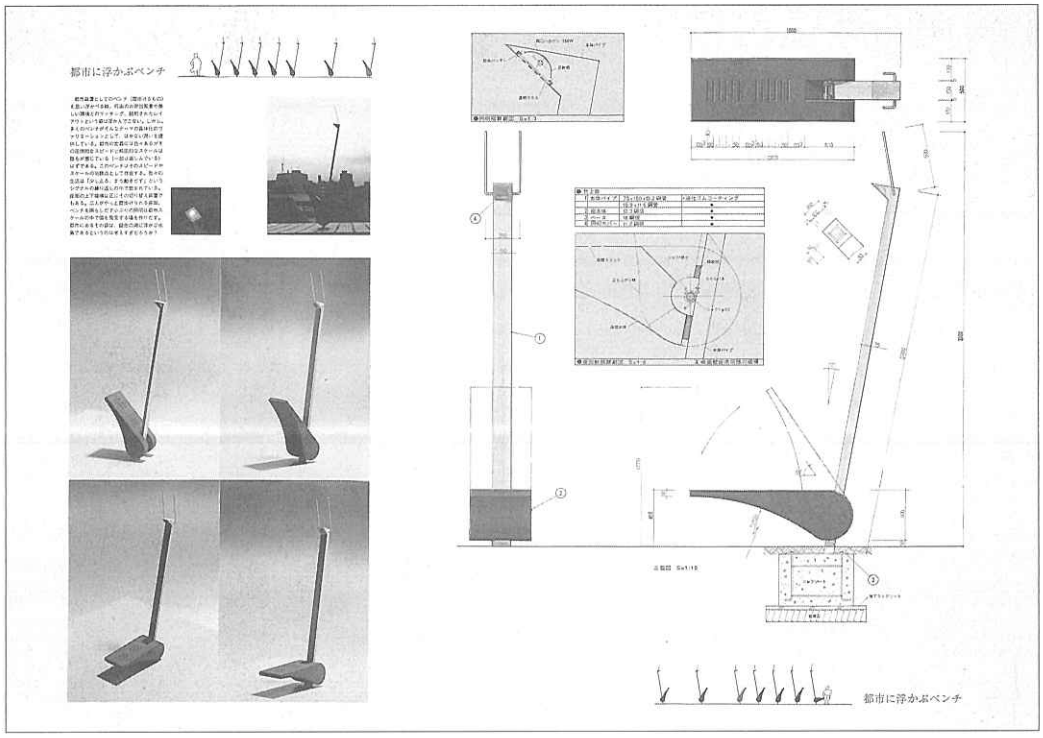
058 森田　敏昭



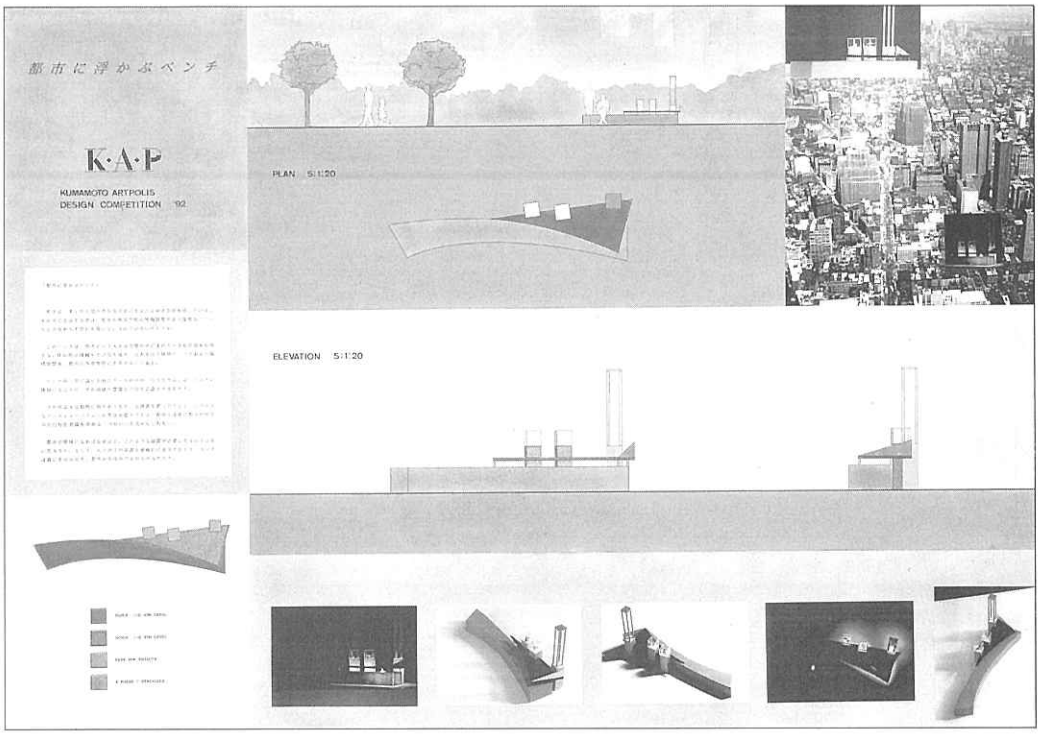
059 中沢千佳子



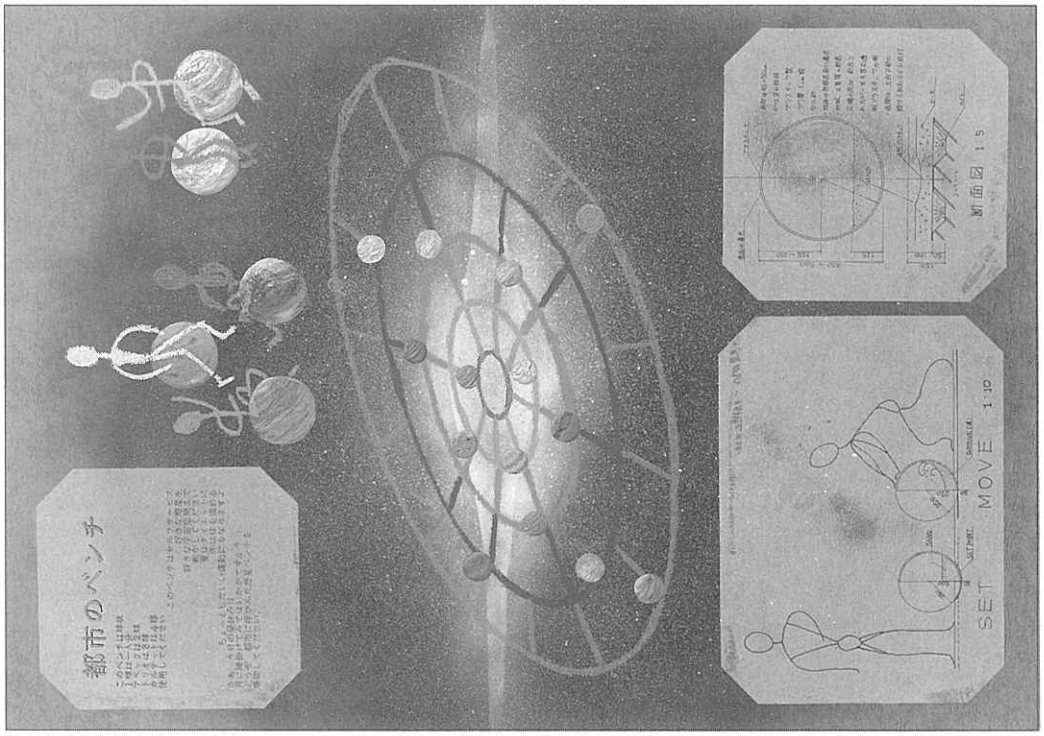
060 浦田　進一
和田　尚之



061 川合　一弘

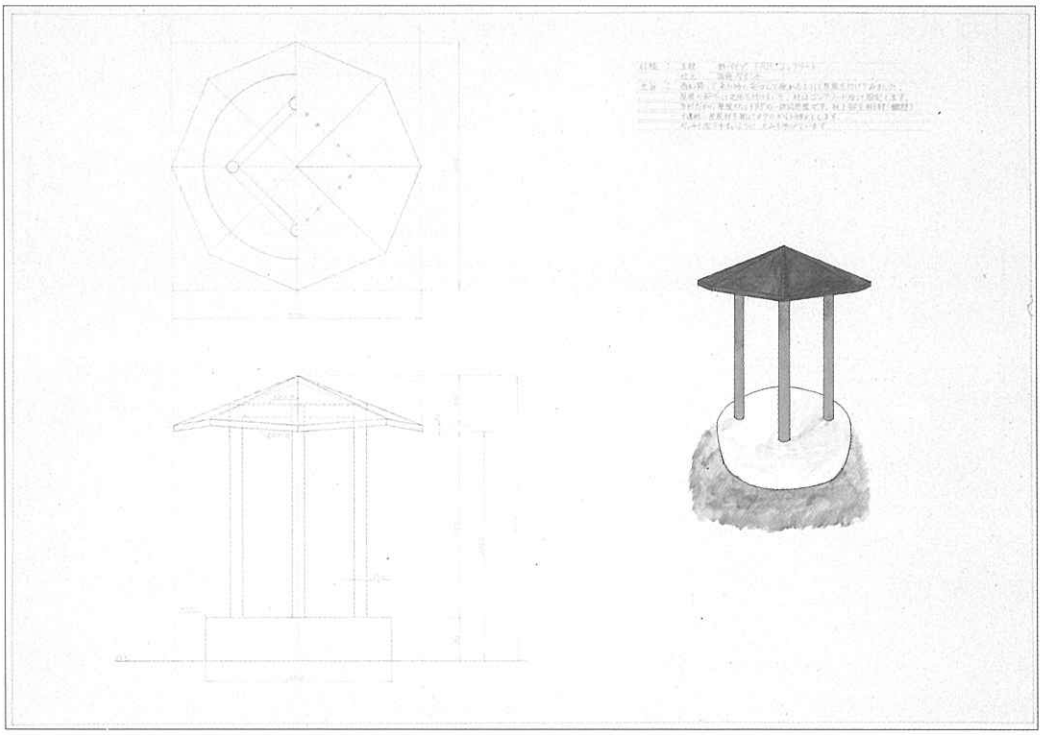


062 鈴木　康博

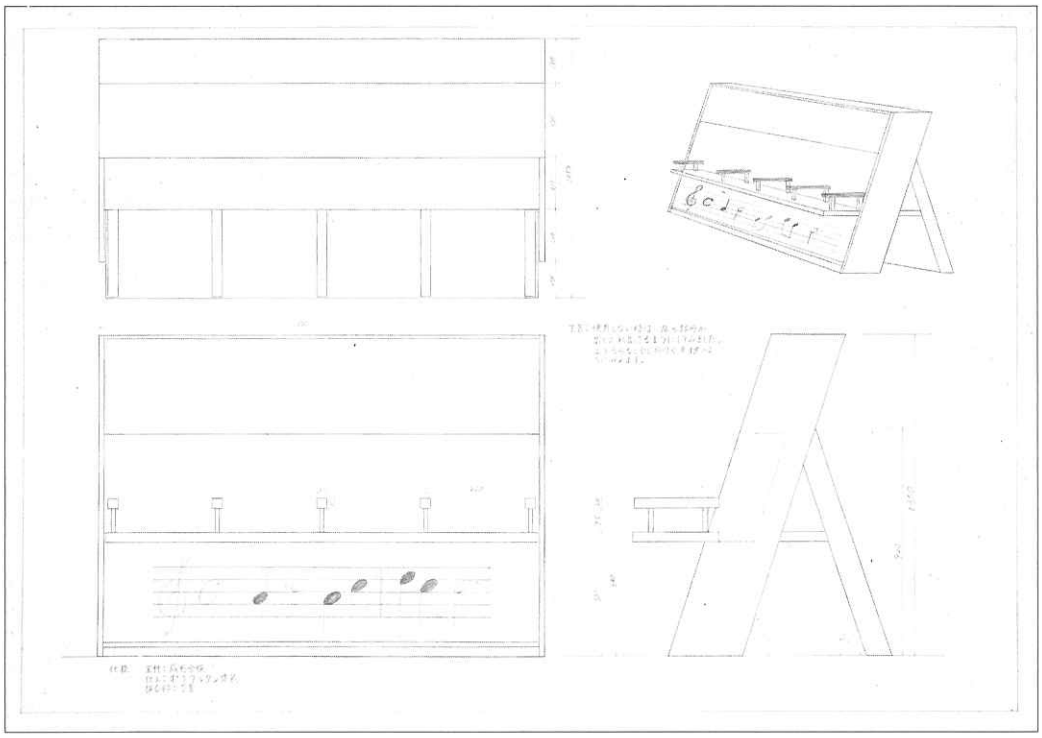


縦

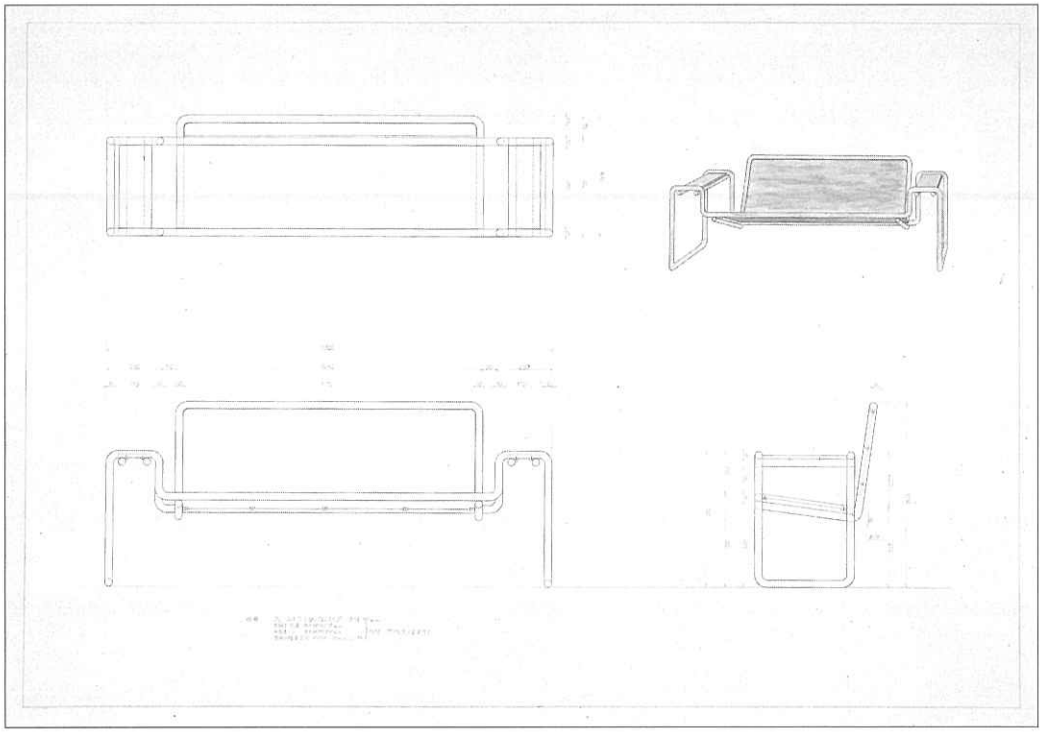
063 正源司優子



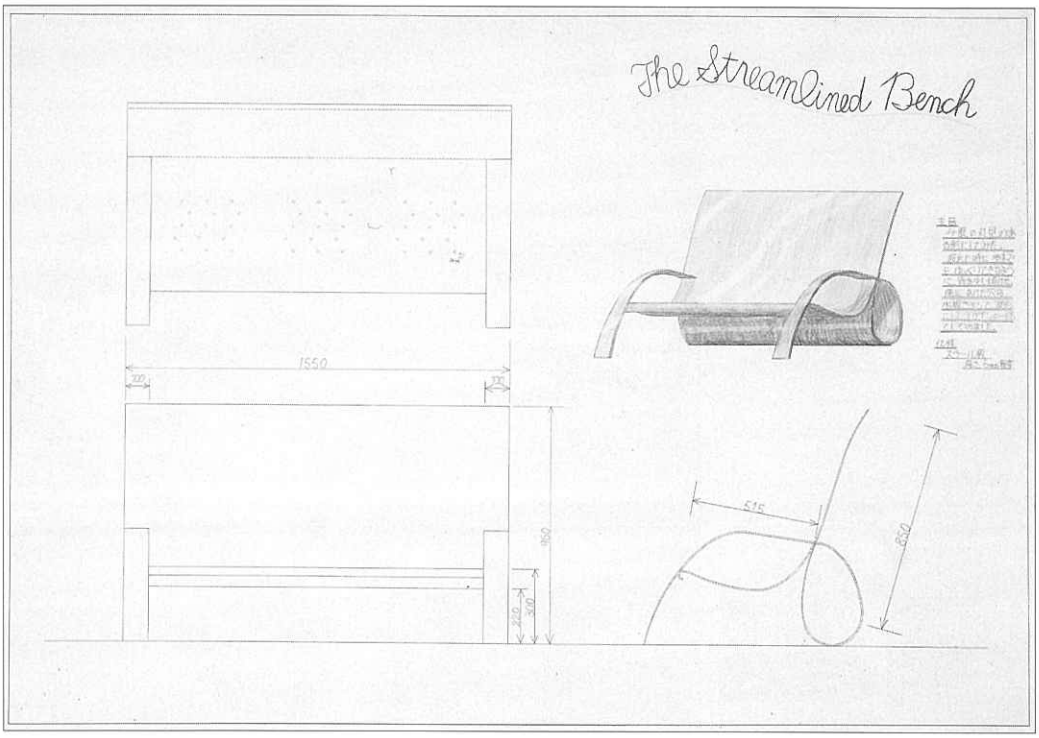
064 中原あづさ



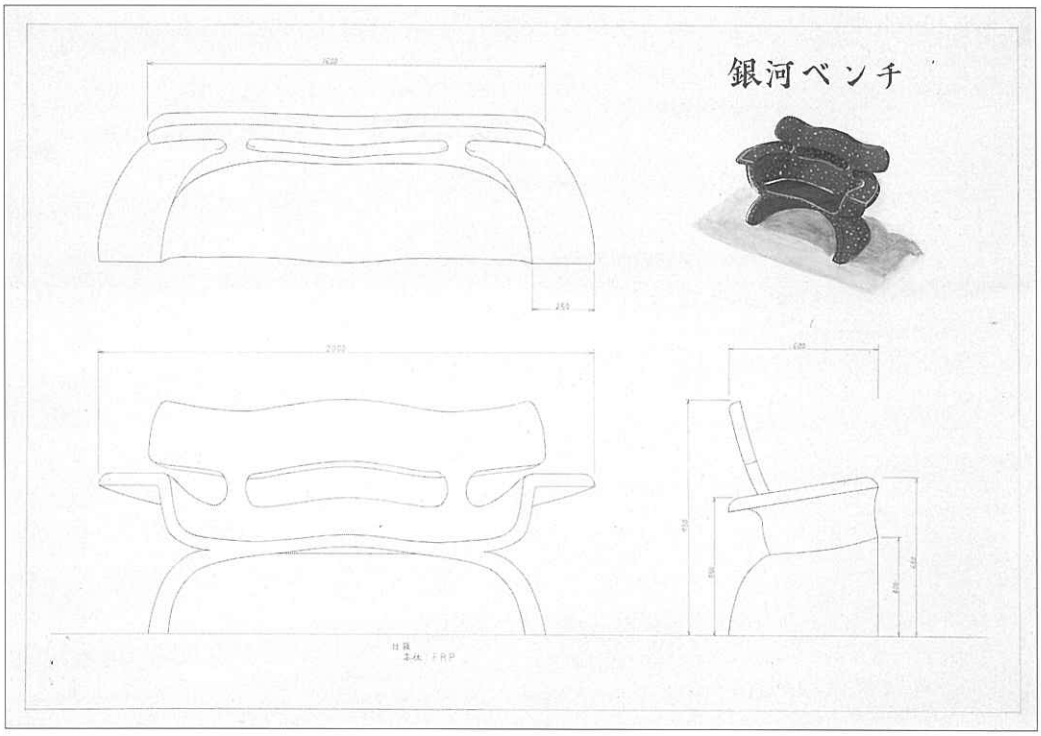
065 渕崎　雄紀



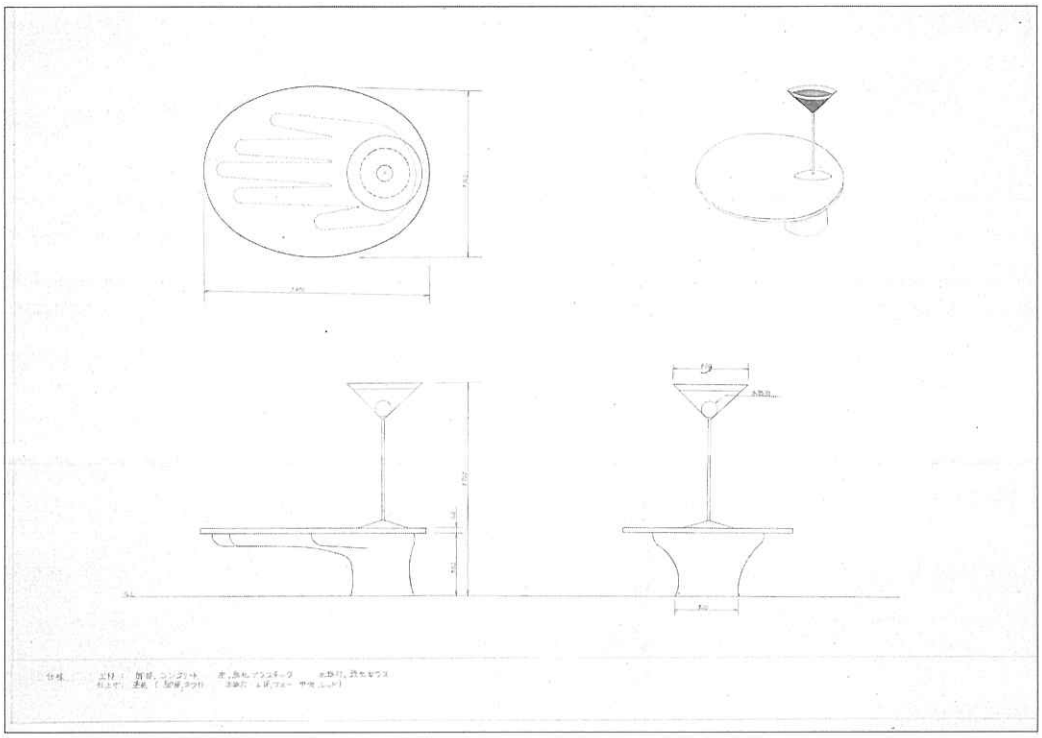
066 梶原　健生



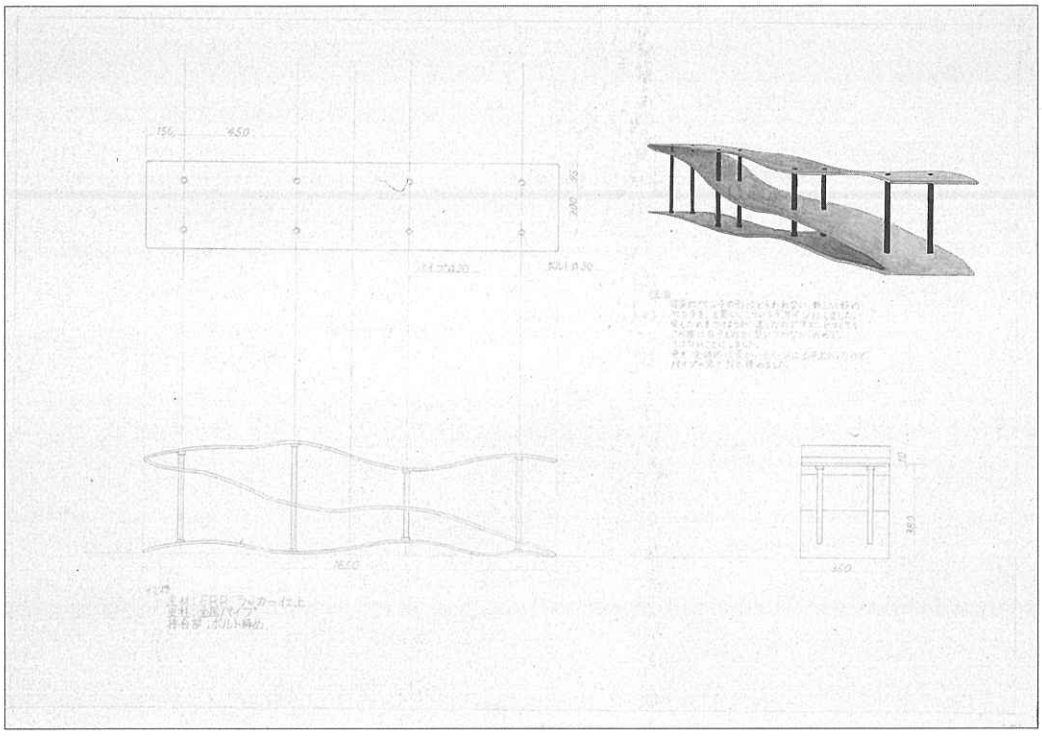
067 倉掛　晋悟



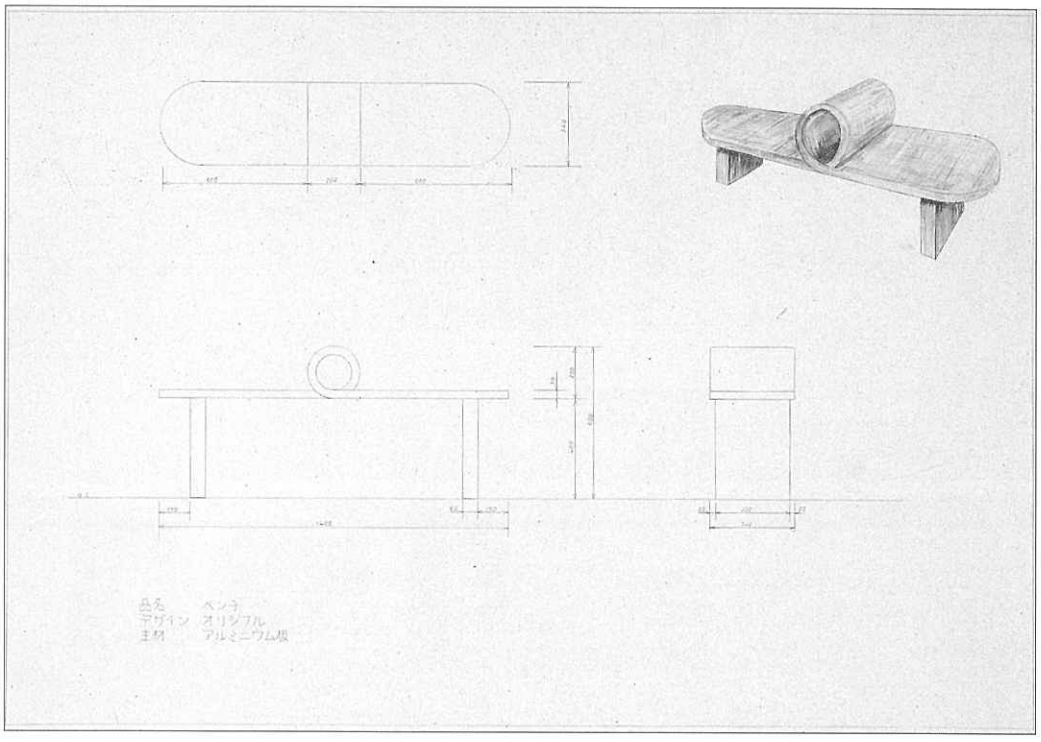
068 西釜由紀子



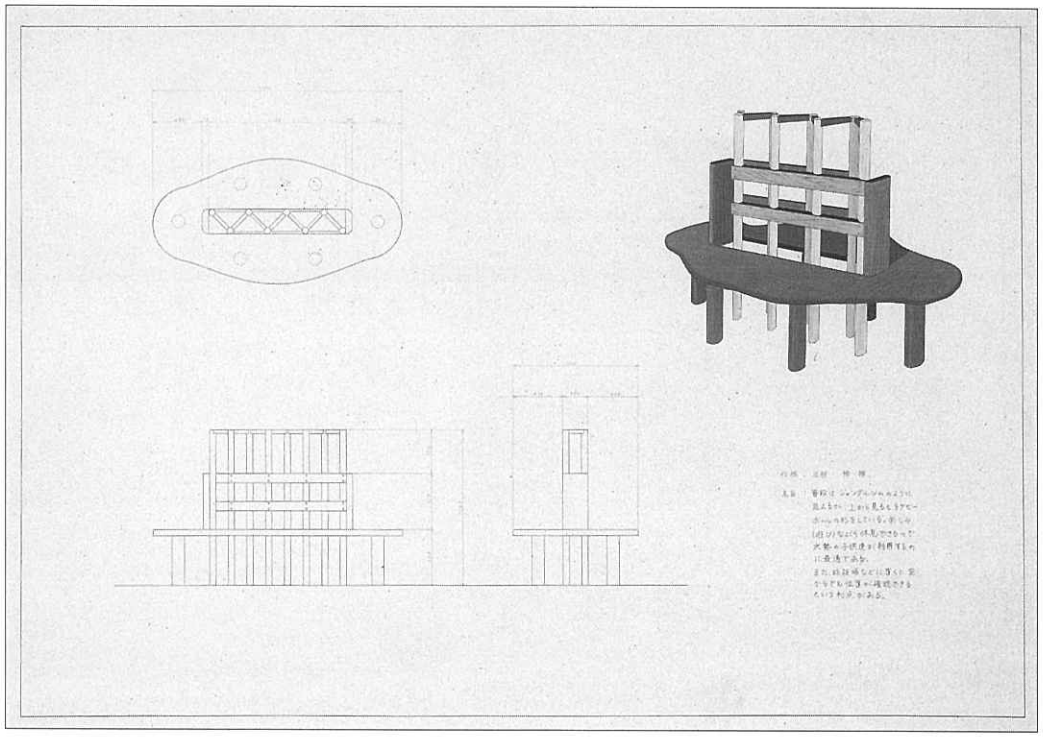
069 川上　玲子



070 小手川　歩

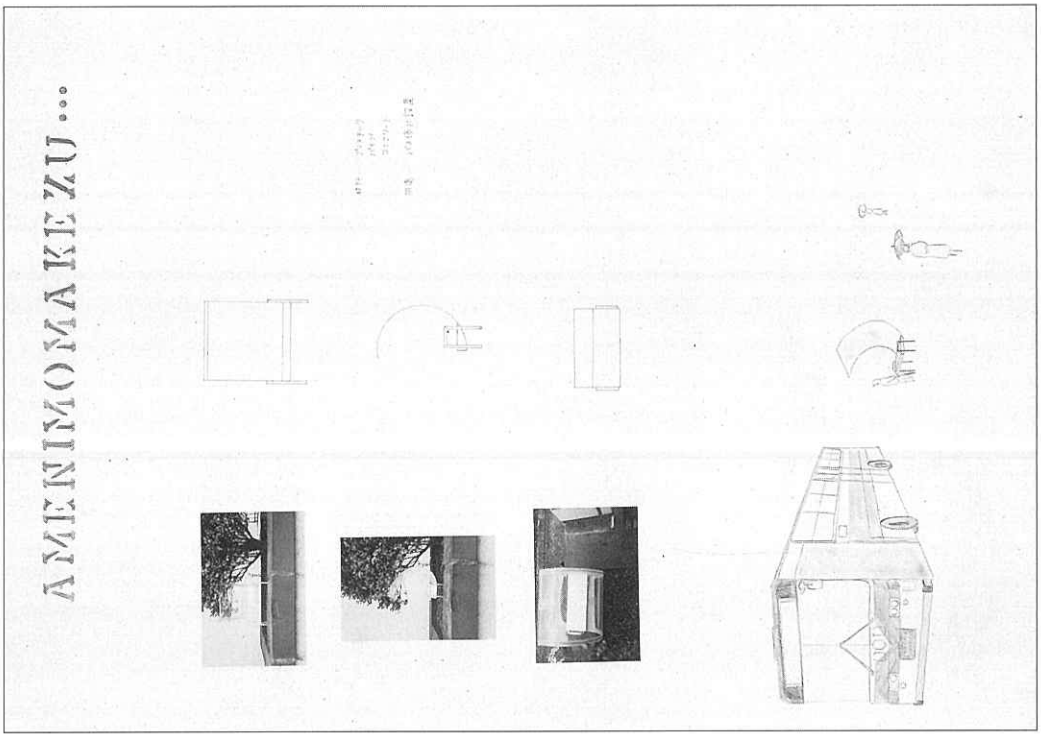


071 渡辺　明美

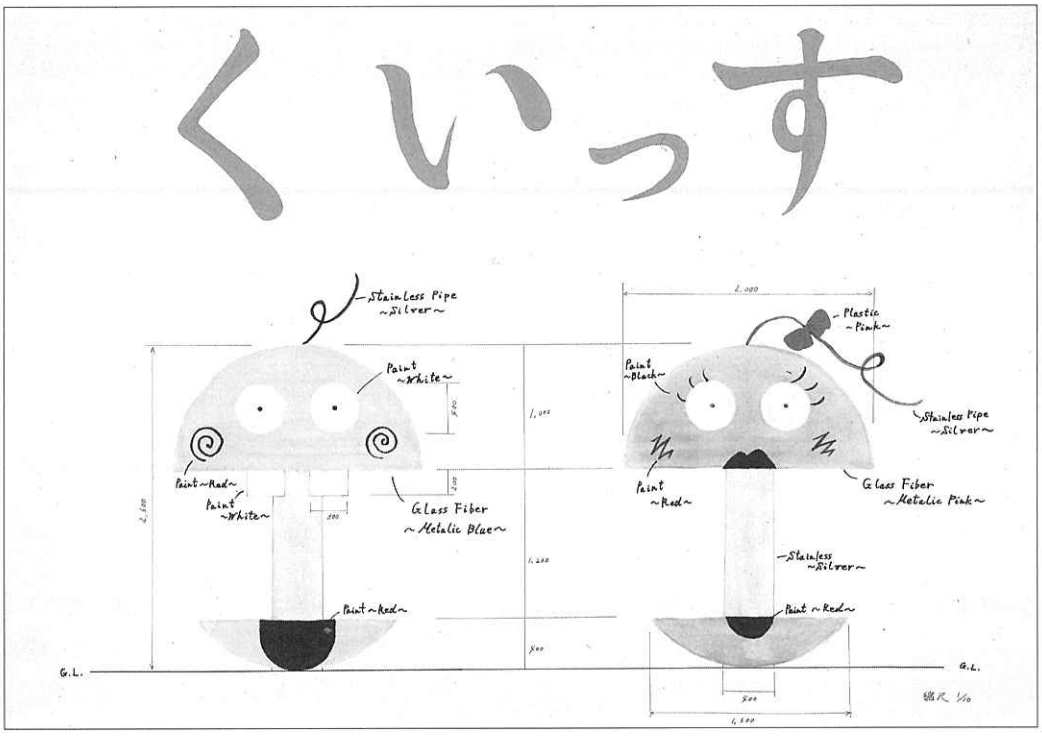


072 小林　紀子

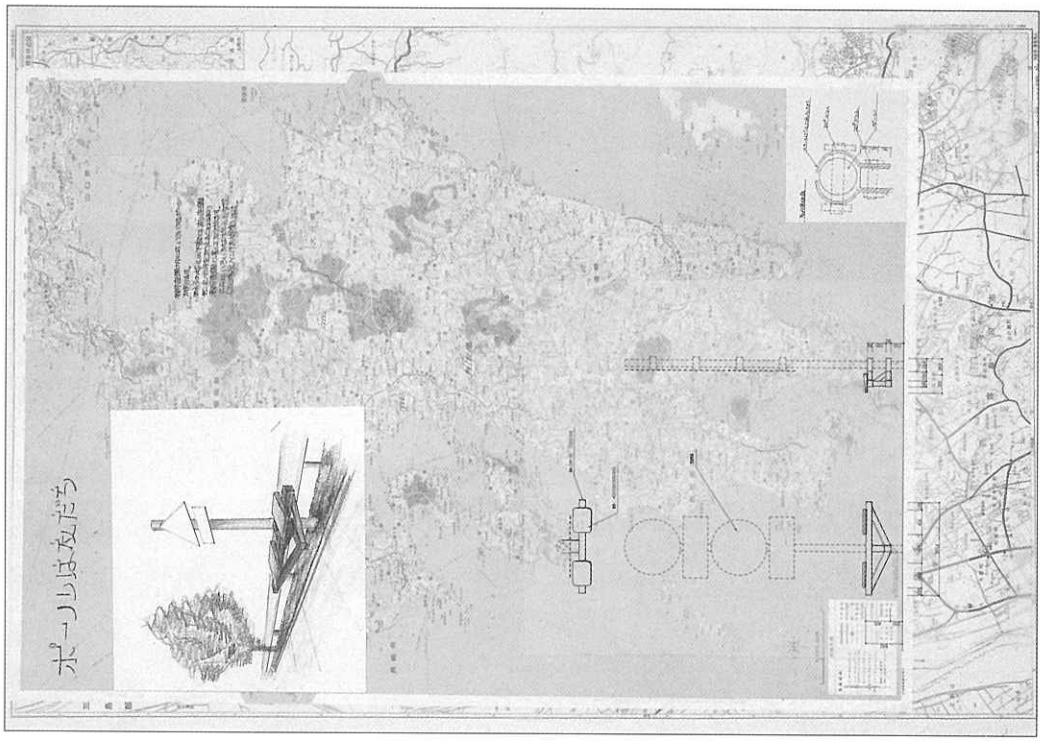
縦



073 上角　美月

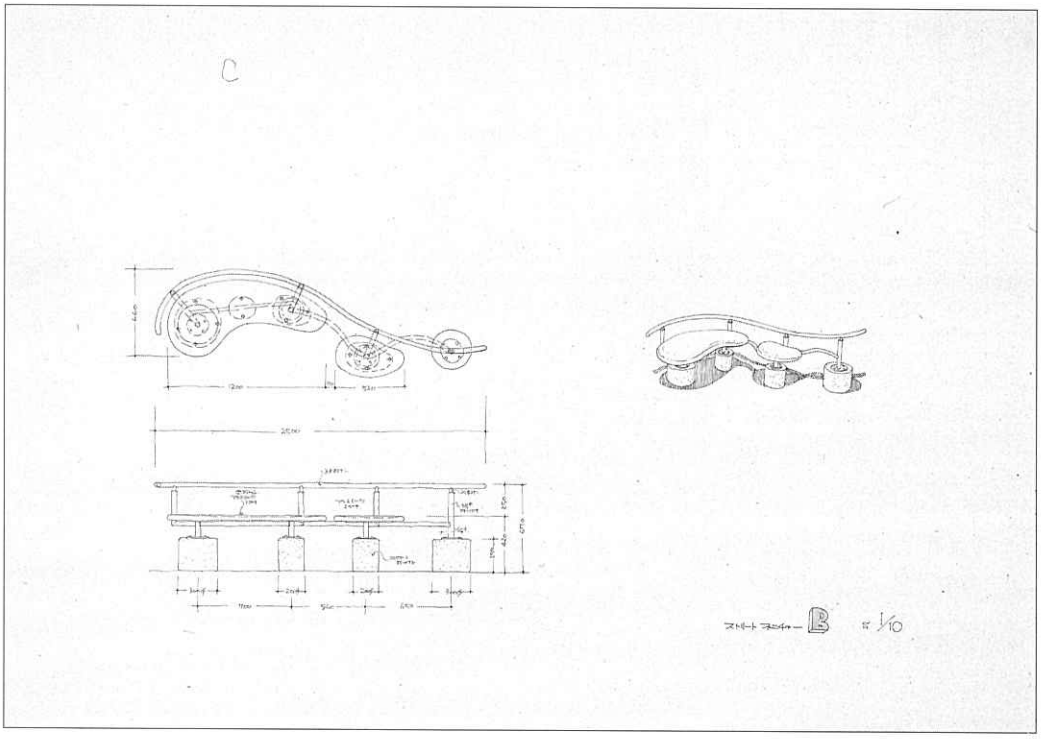


075 武智　稔

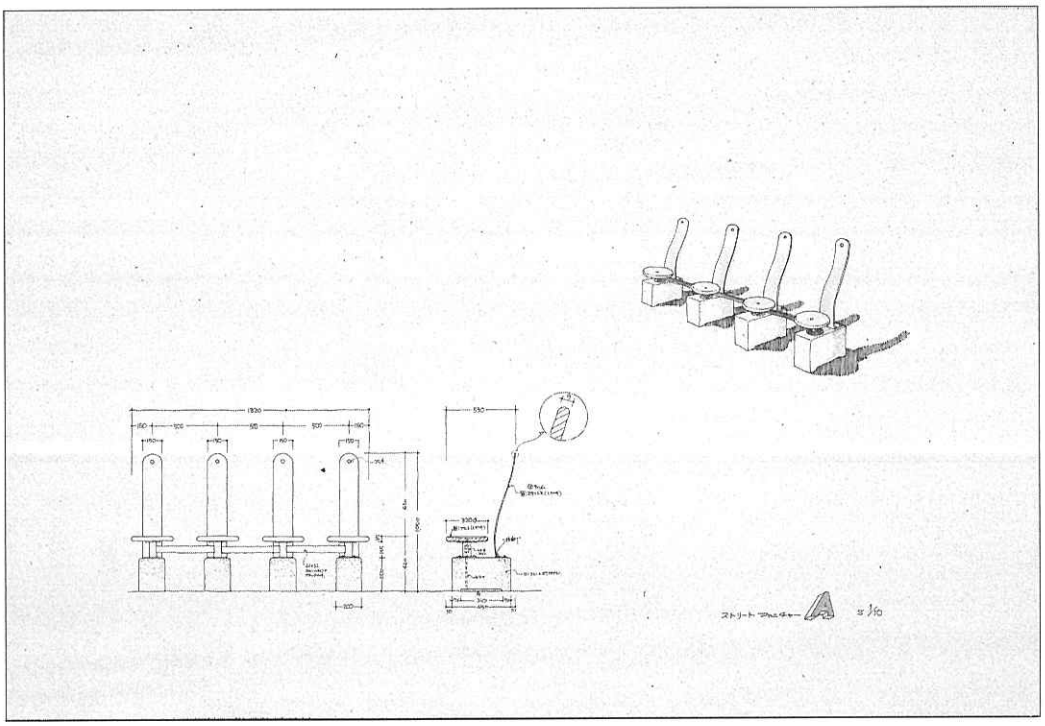


縦

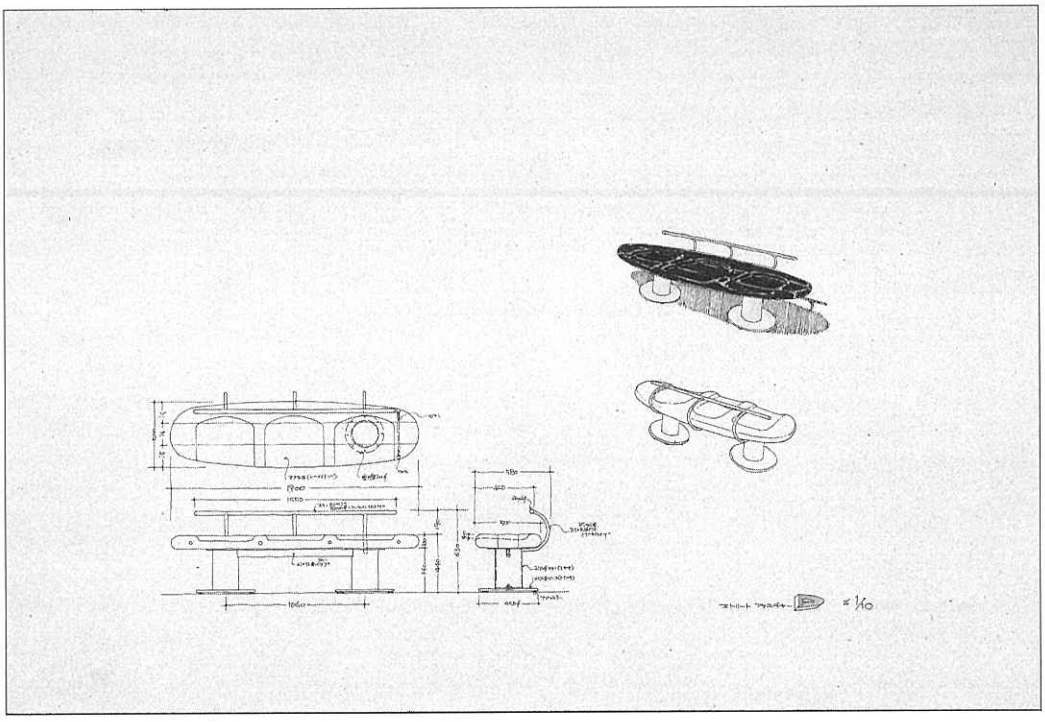
076 篠田　光生



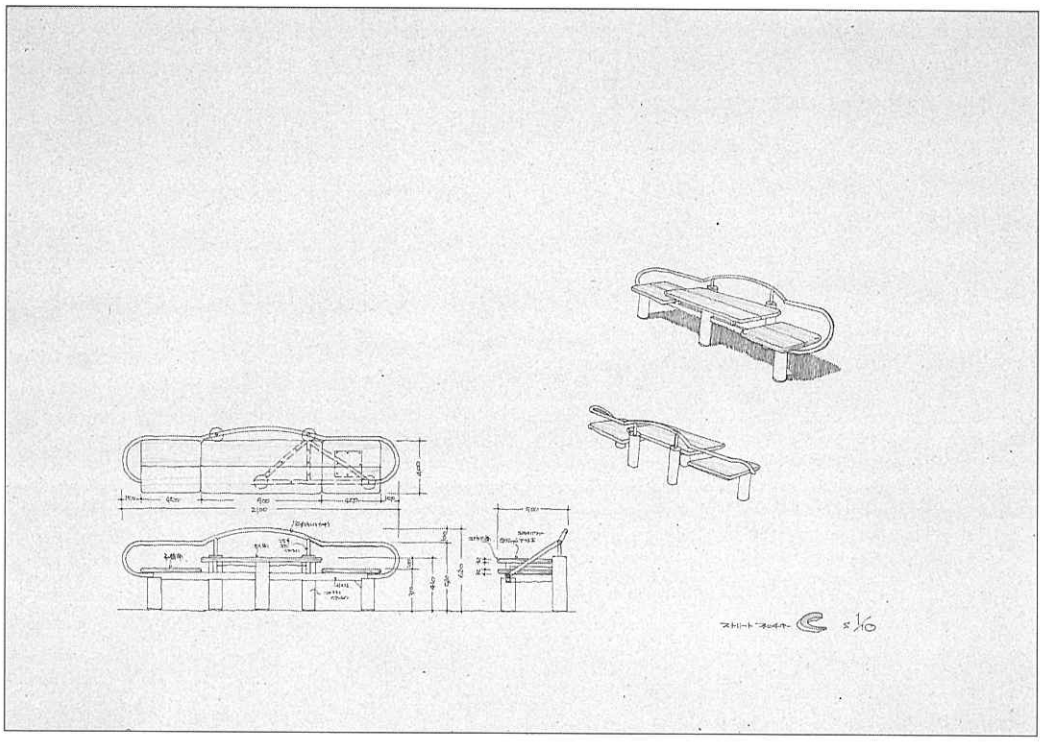
077 篠田　光生



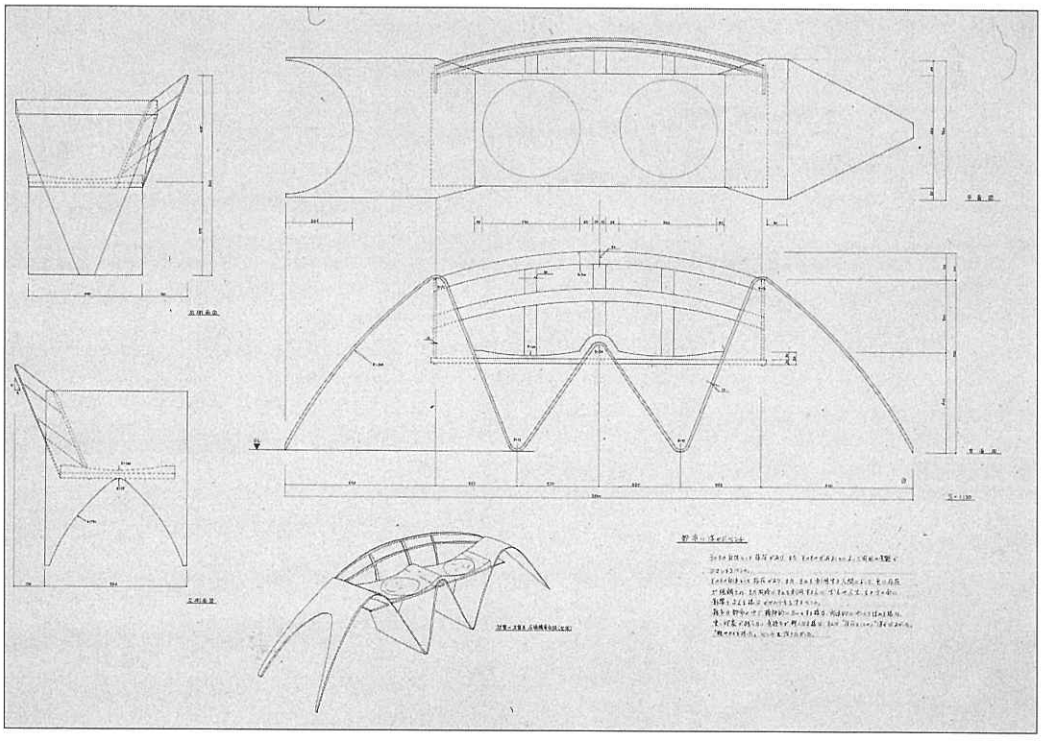
078 篠田　光生



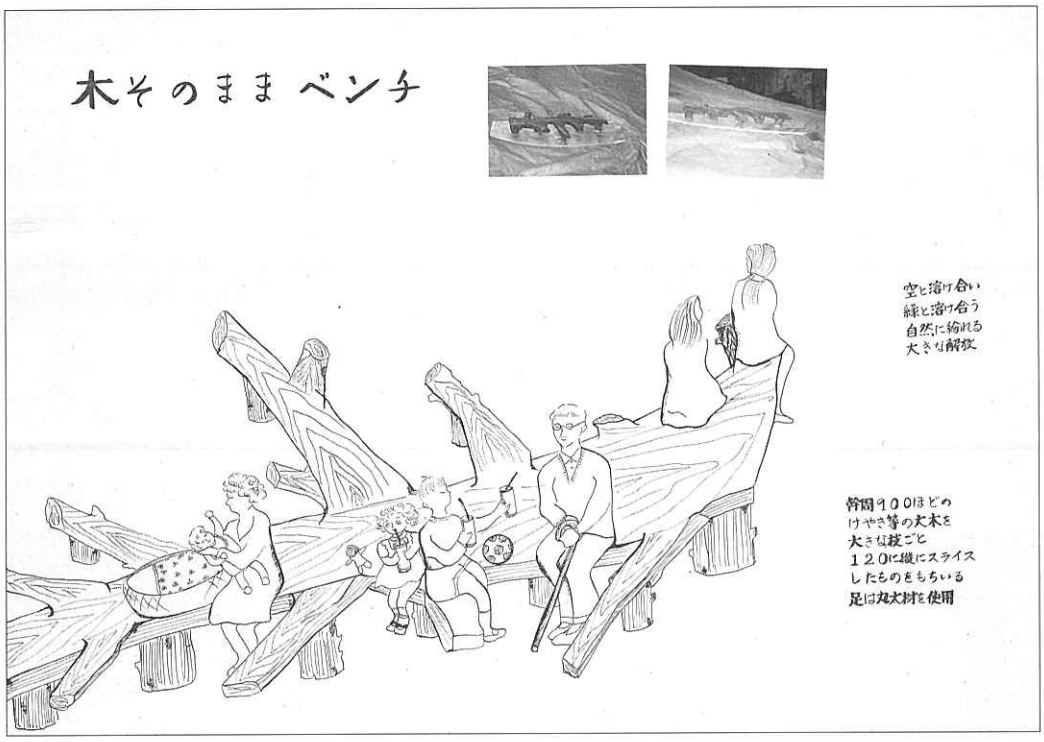
079 篠田　光生



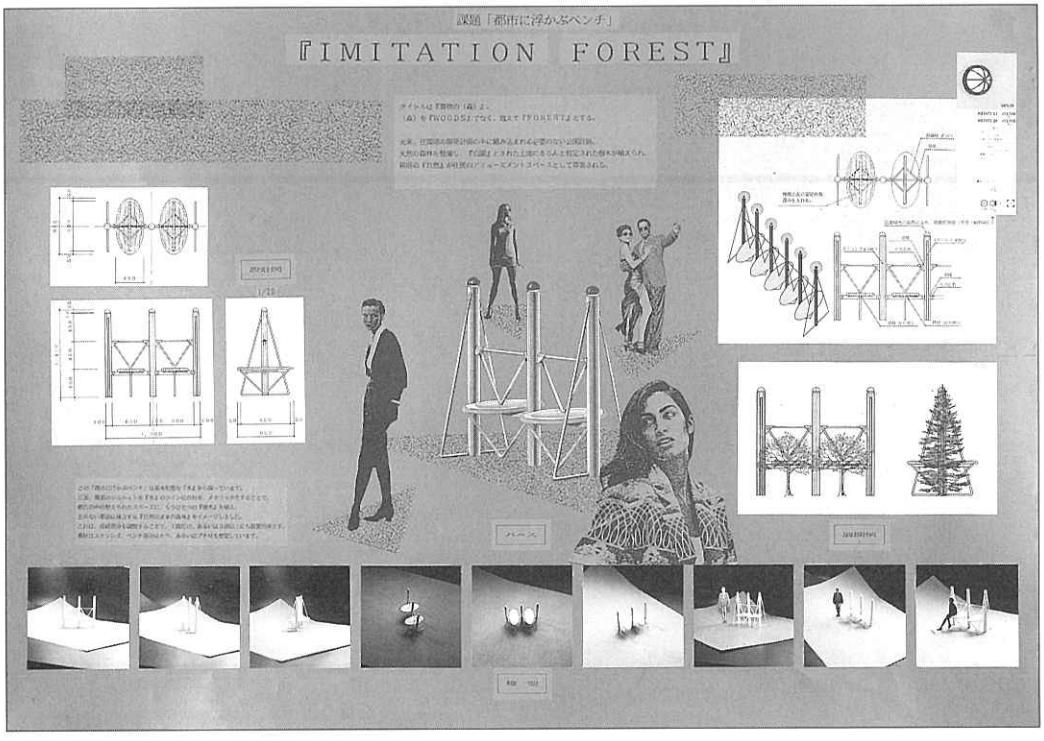
080 宮崎　靖智



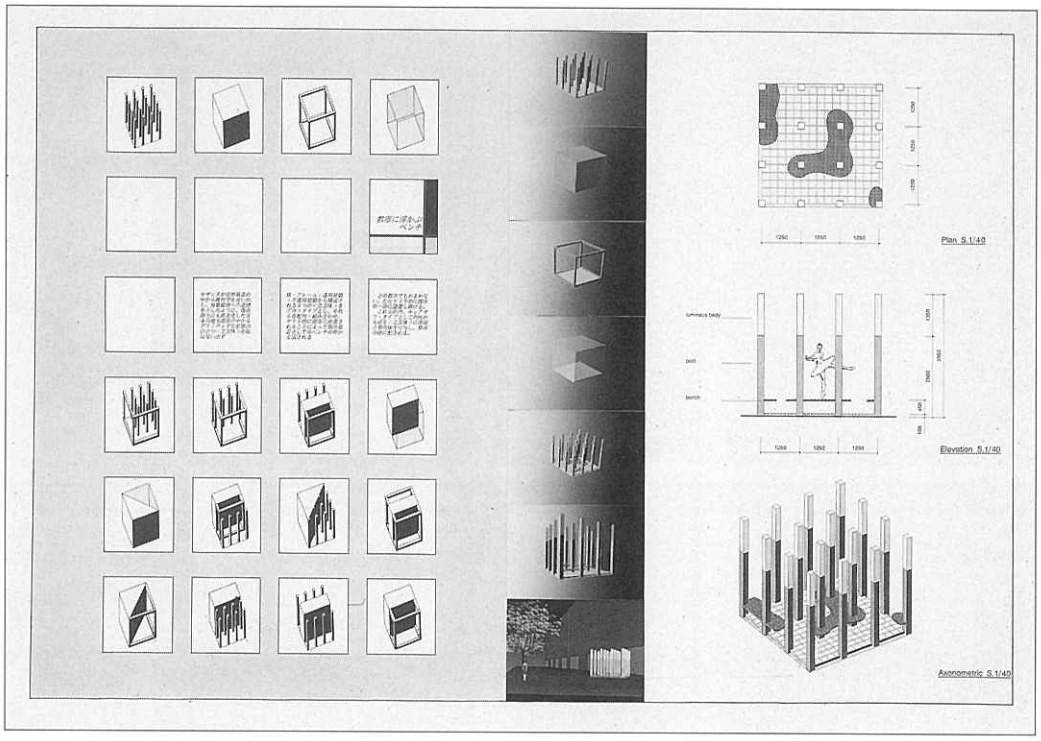
081 和田　鈴子



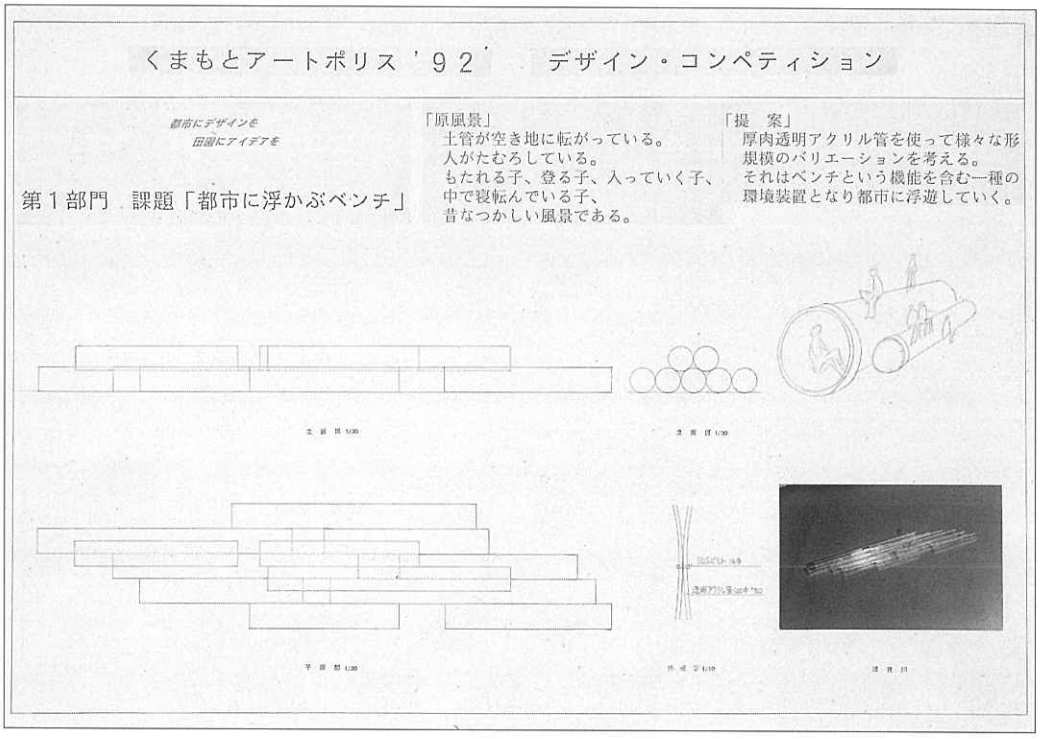
082 飯銅　理子
濱本　憲洋



083 佐々木健夫

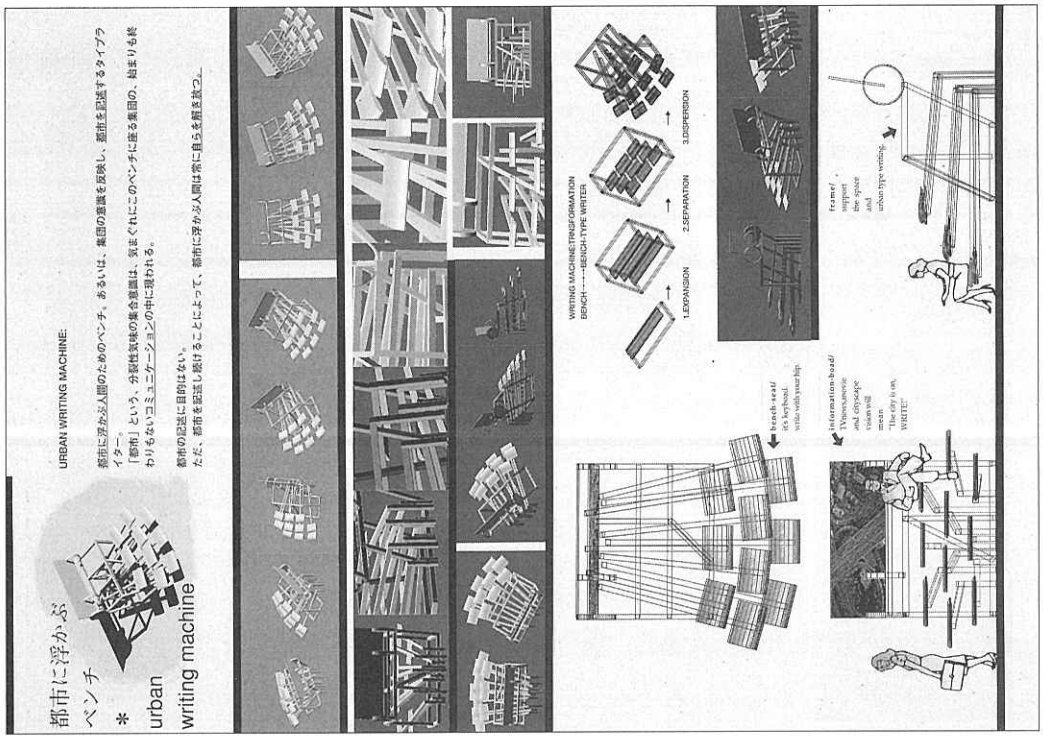


084 江畑　弘

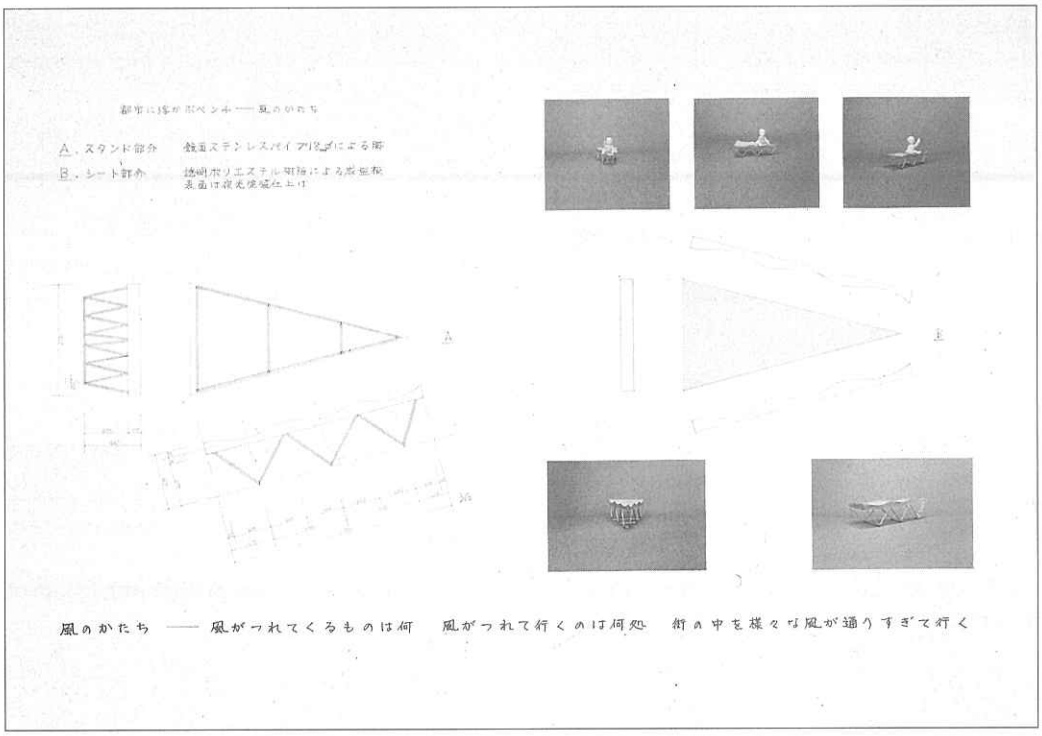


085 門脇　哲也

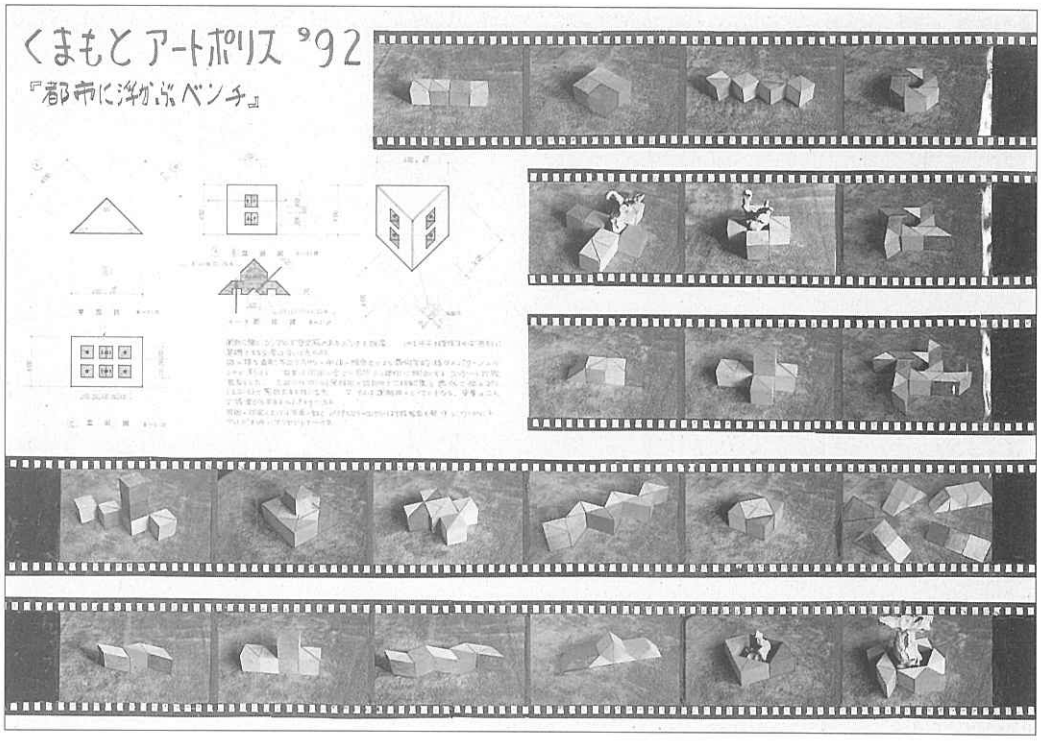
縦



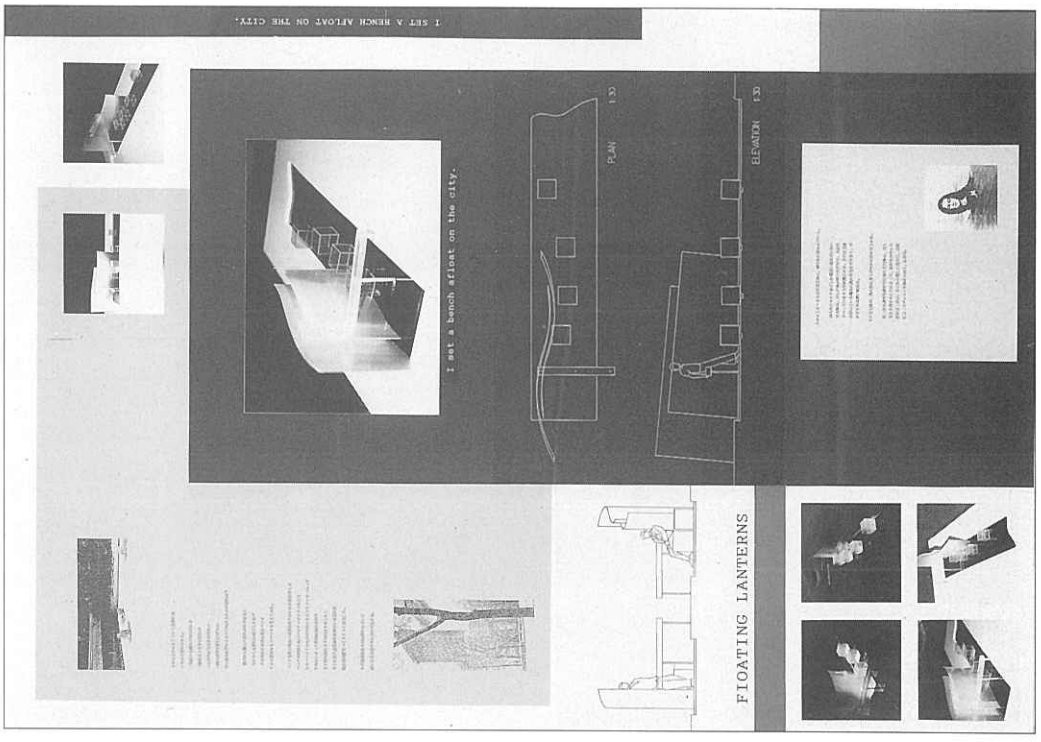
086 廣瀬　智洋



087 森　辰興

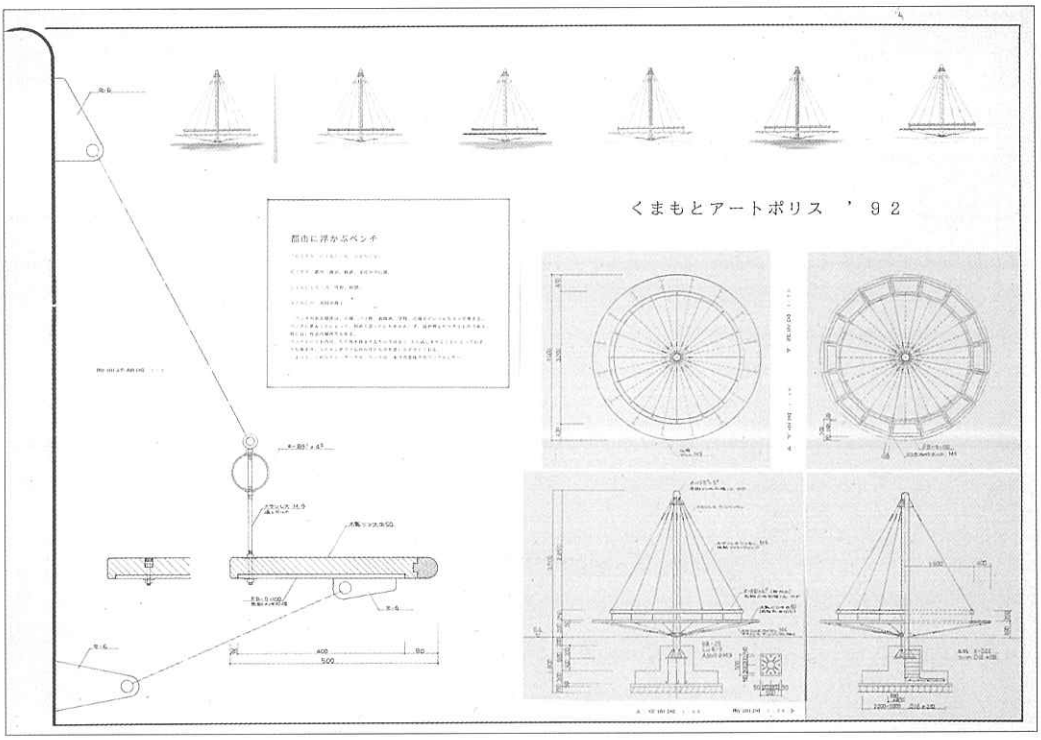


088 内田　貴久

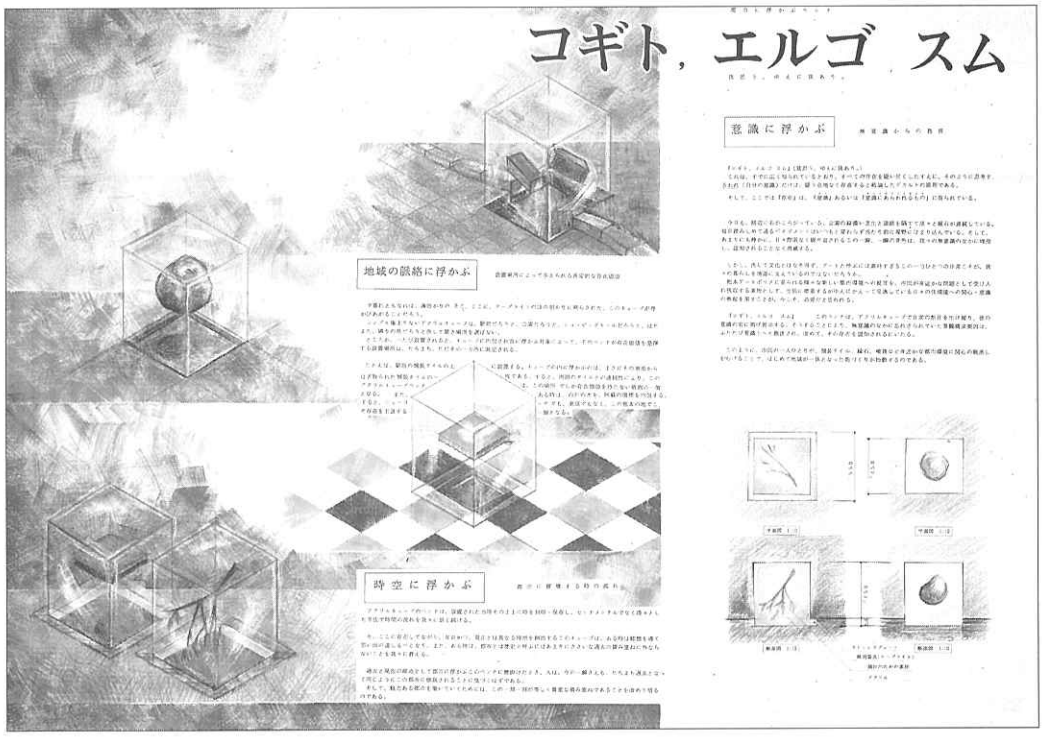


縦

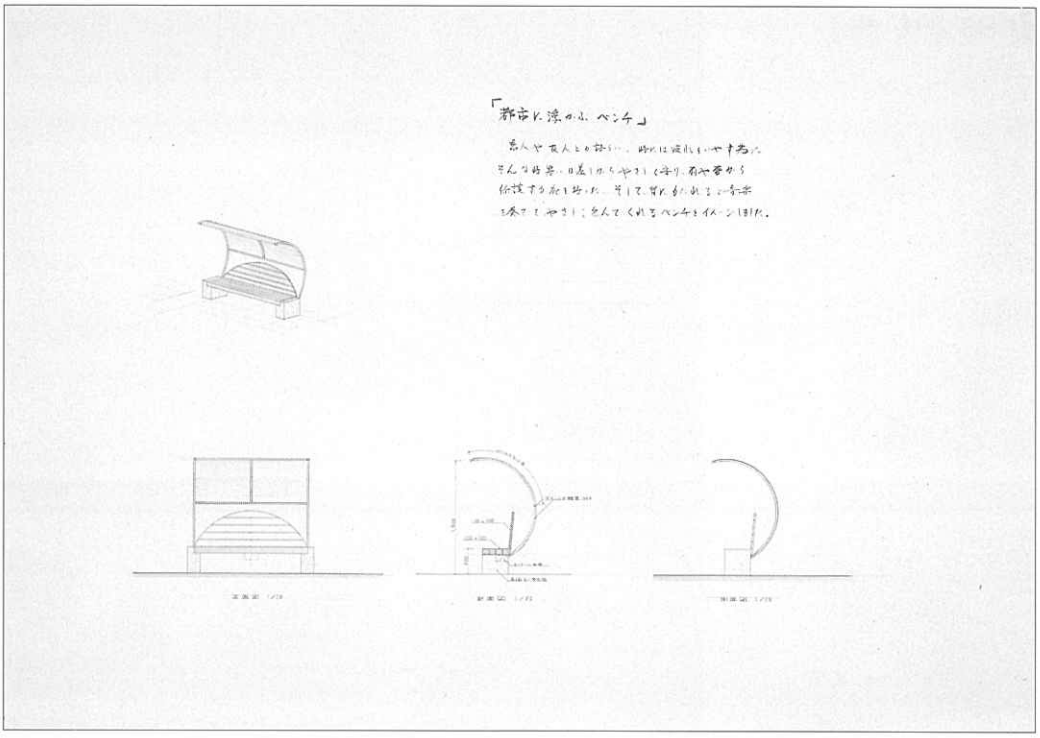
089 上野　弘幸



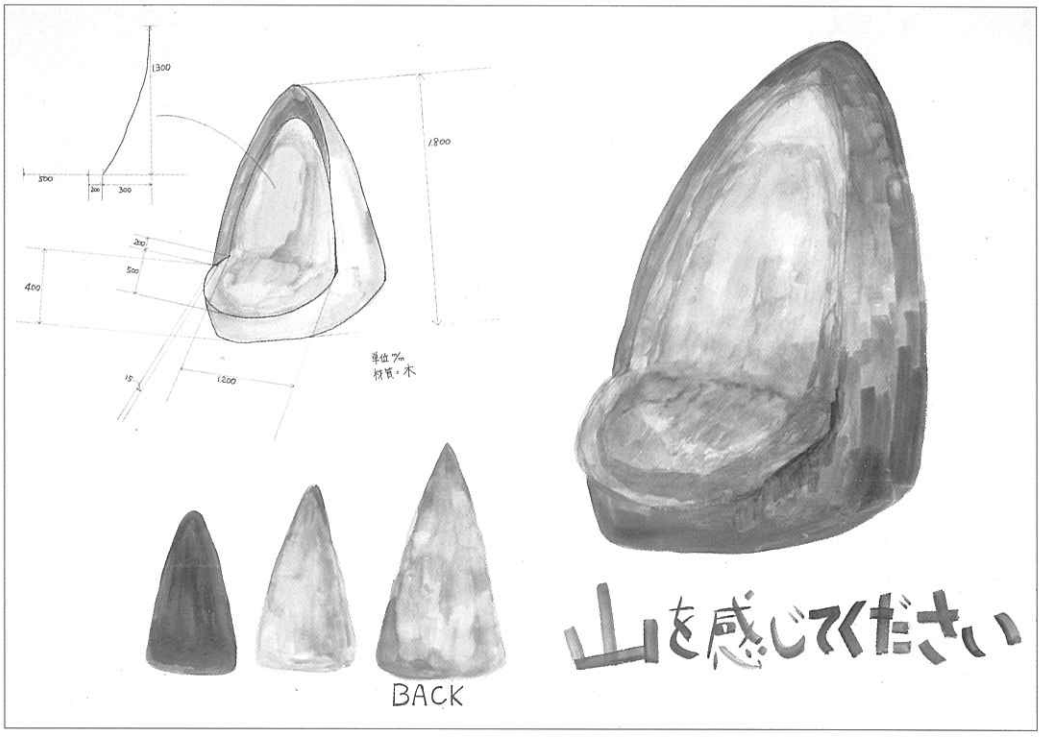
090 古家　英俊
橋本　千絵
石原　典子



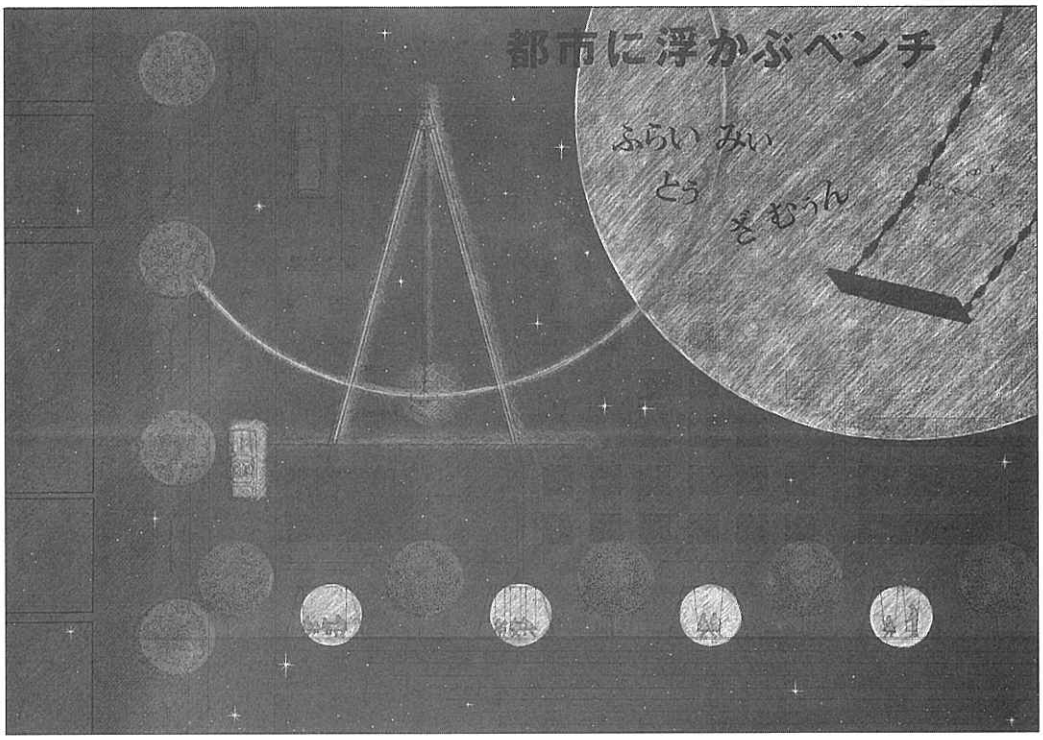
091 田中　和代



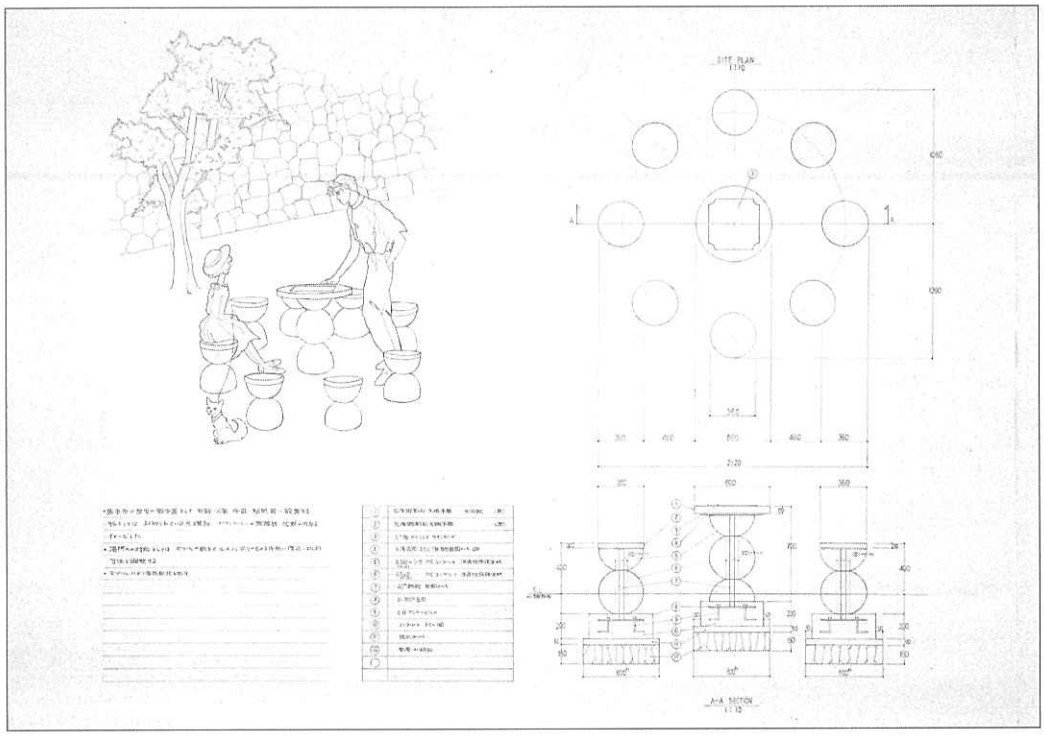
092 尾上　智美



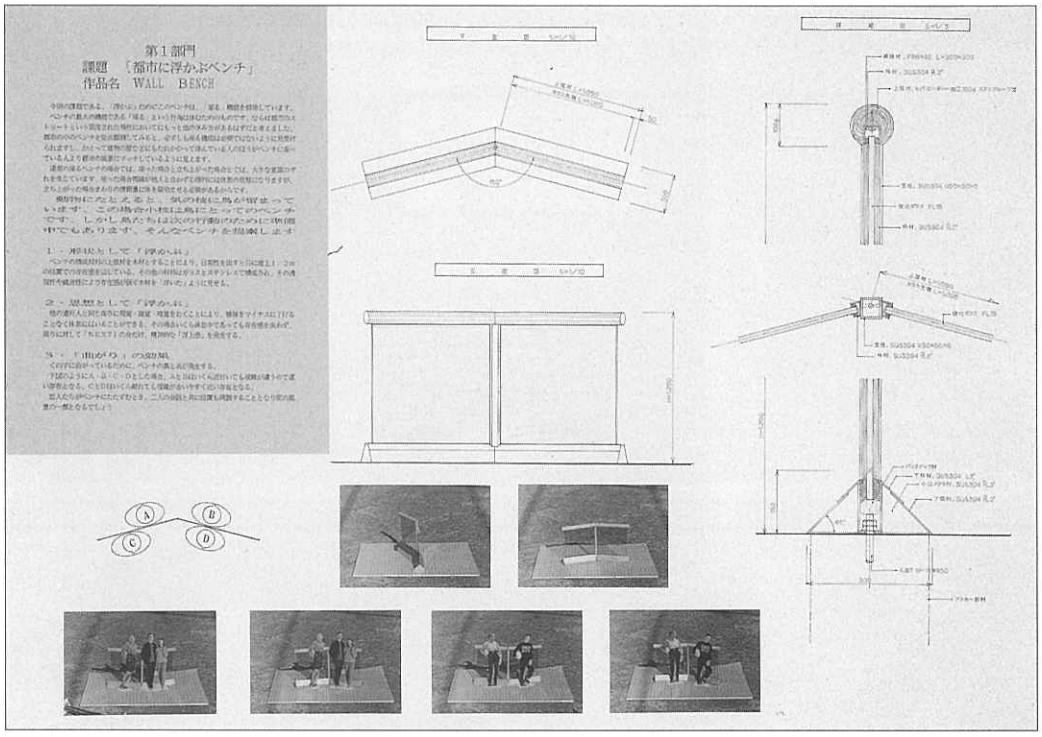
093 竹村　和彦



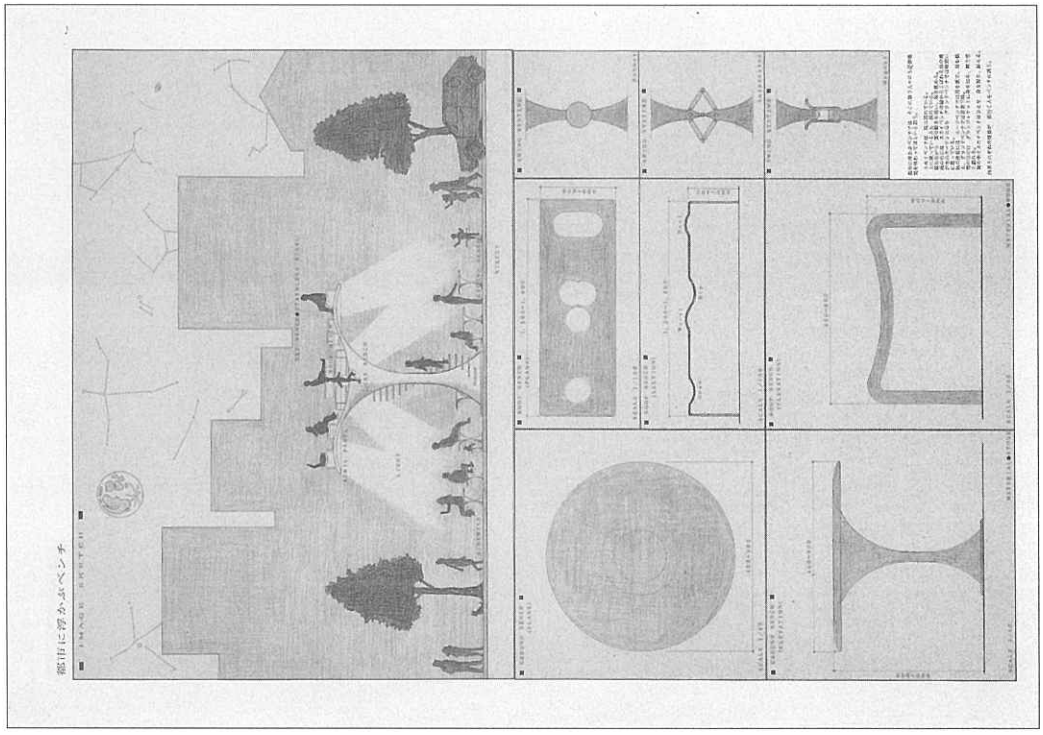
094 工藤　孝夫



095 大田黒元雄

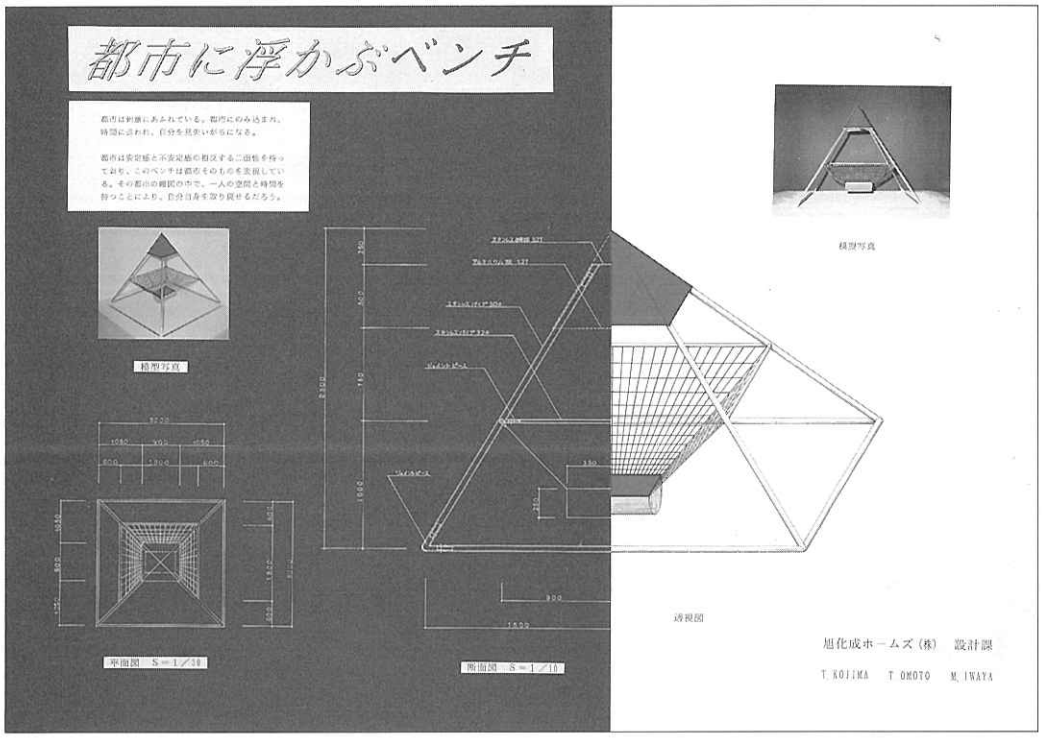


096 河村　孝子
久保田政美

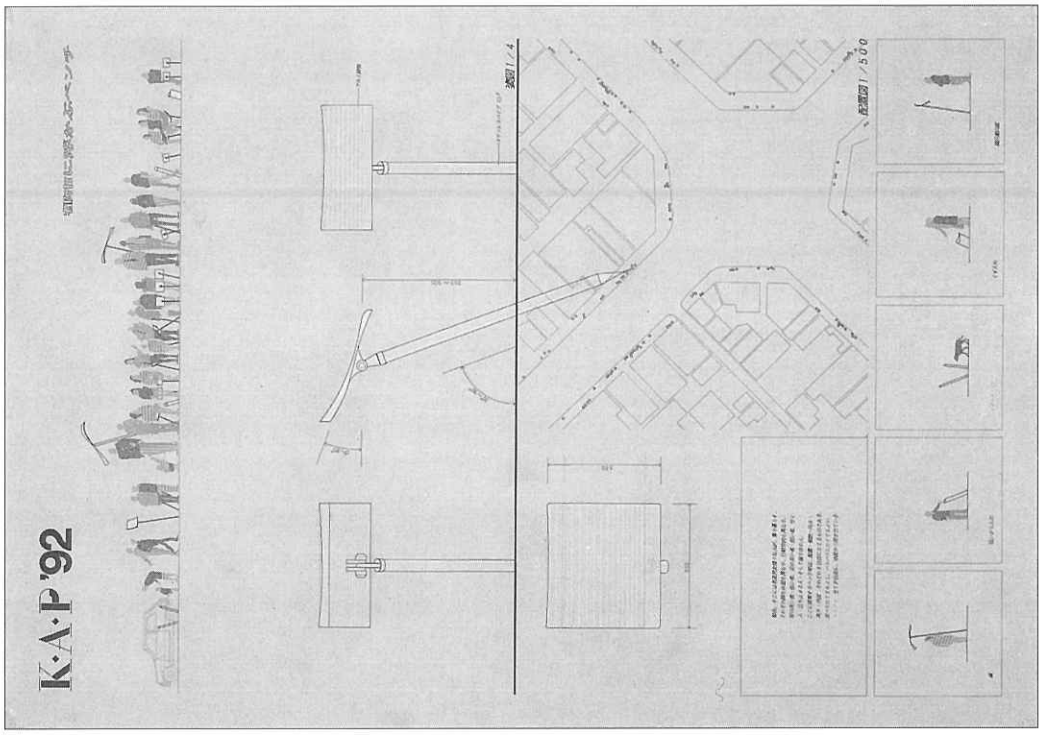


縦

097 小嶌　利幸(代表)



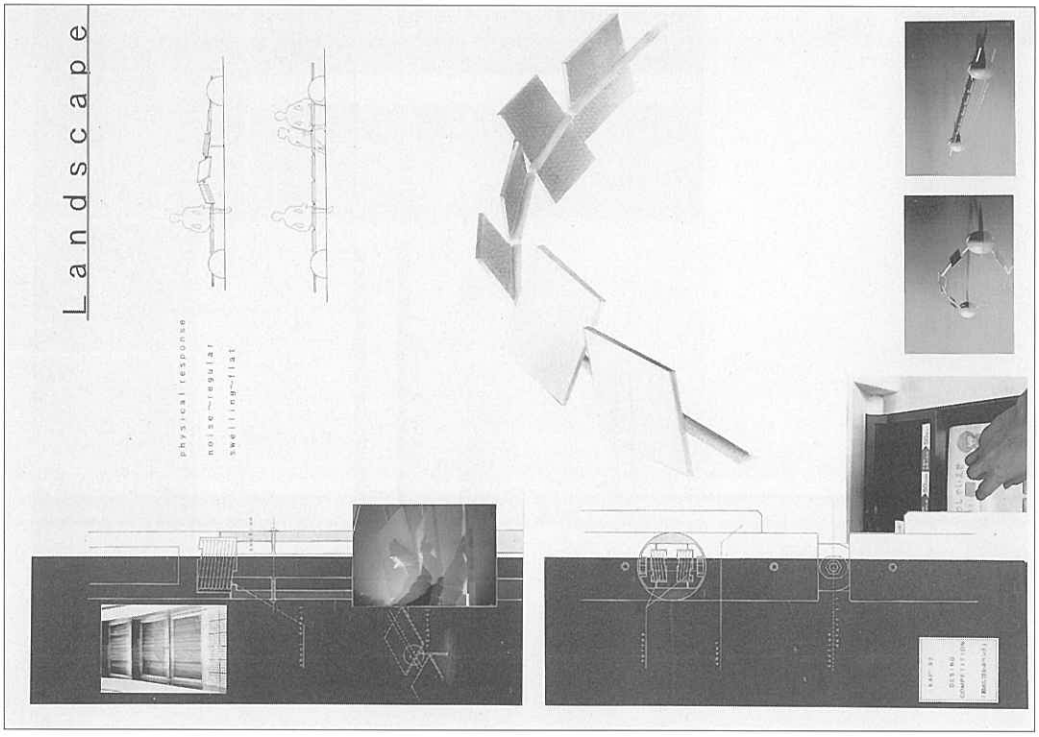
098 石丸　隆久



縦

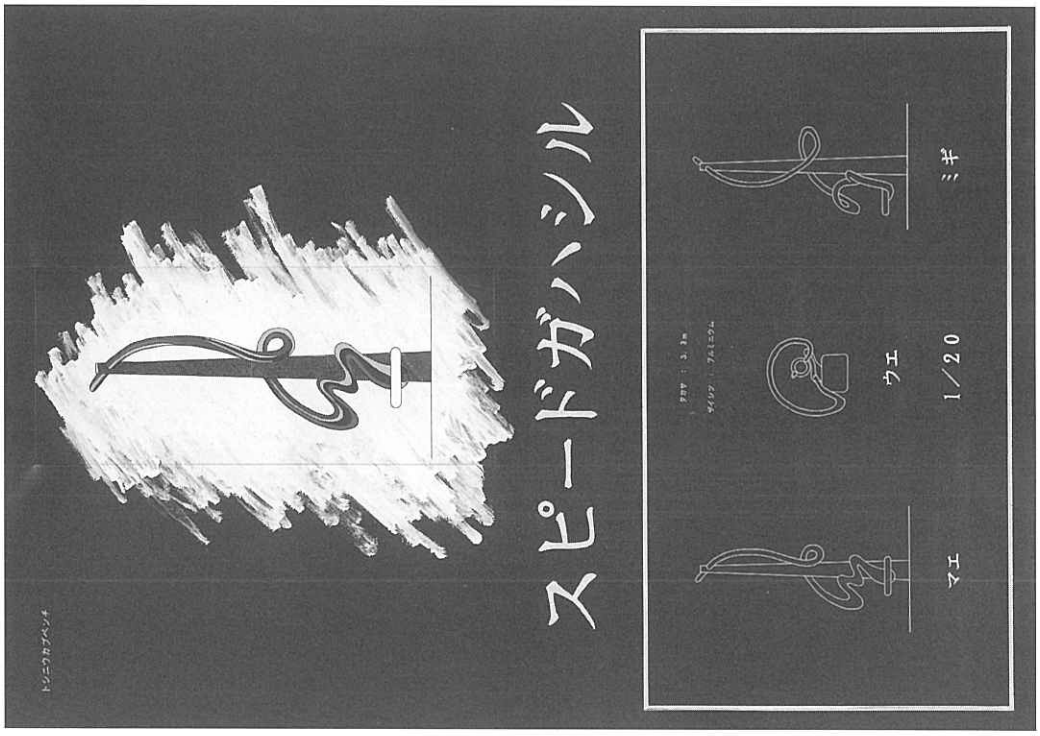
099 国生　健一

縦

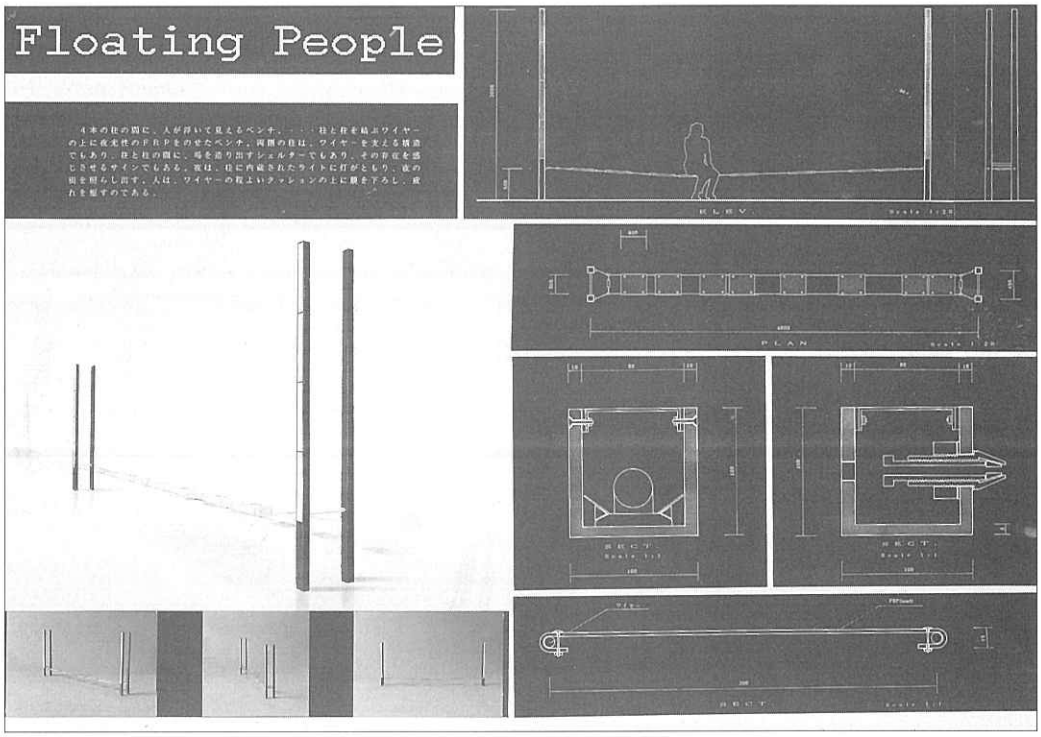


102 伊奈　　尚

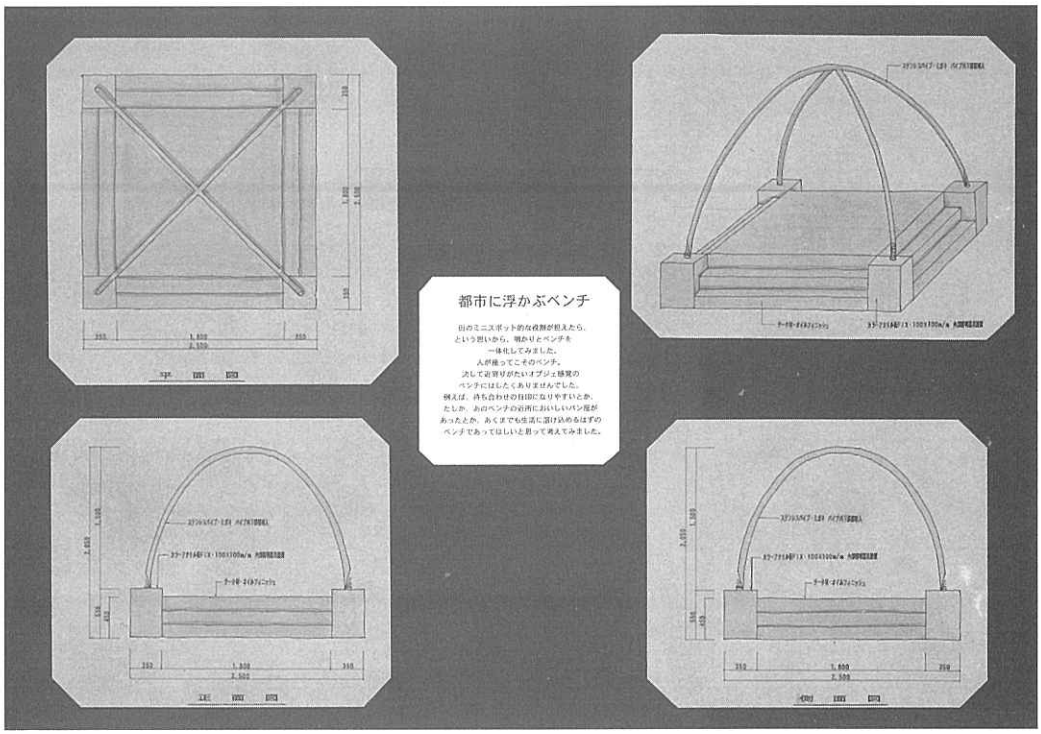
縦



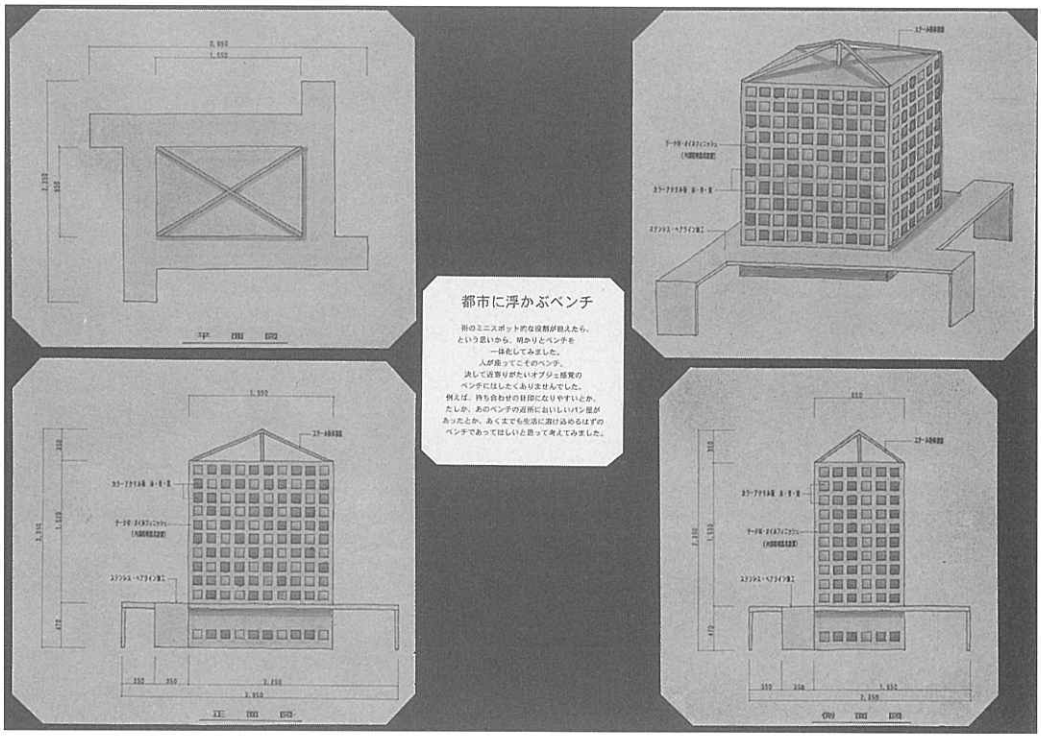
103 高嶋　誠司



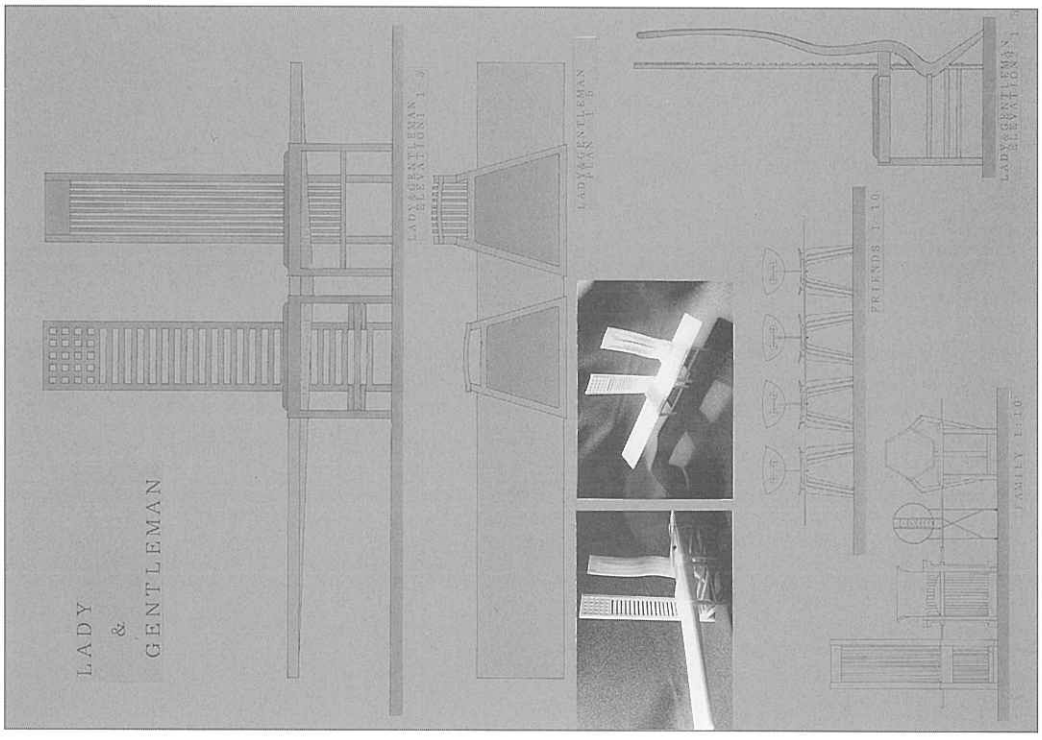
104 小室　聡美



105 小室　聡美

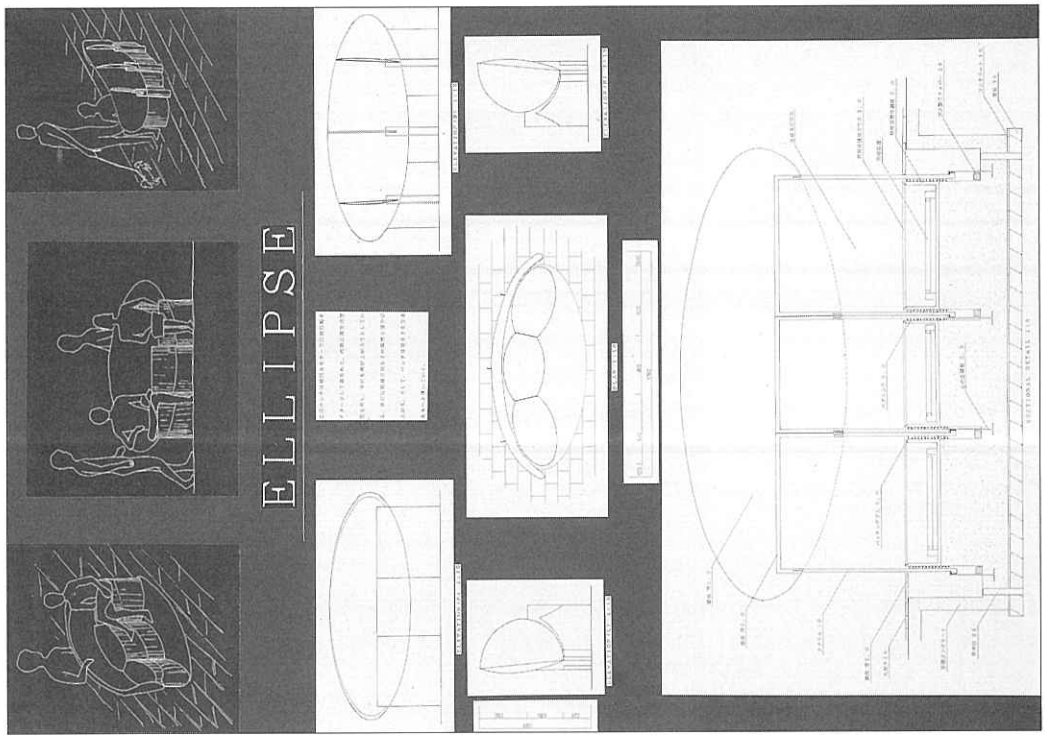


106 曽我部　準



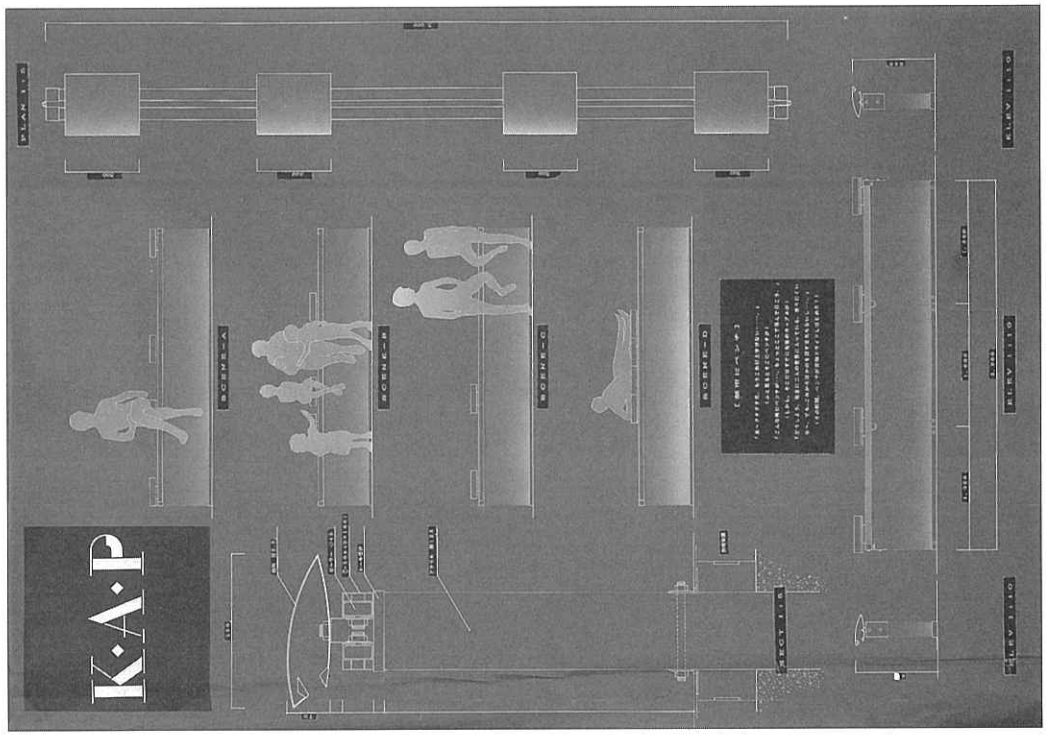
縦

107 新開　和則



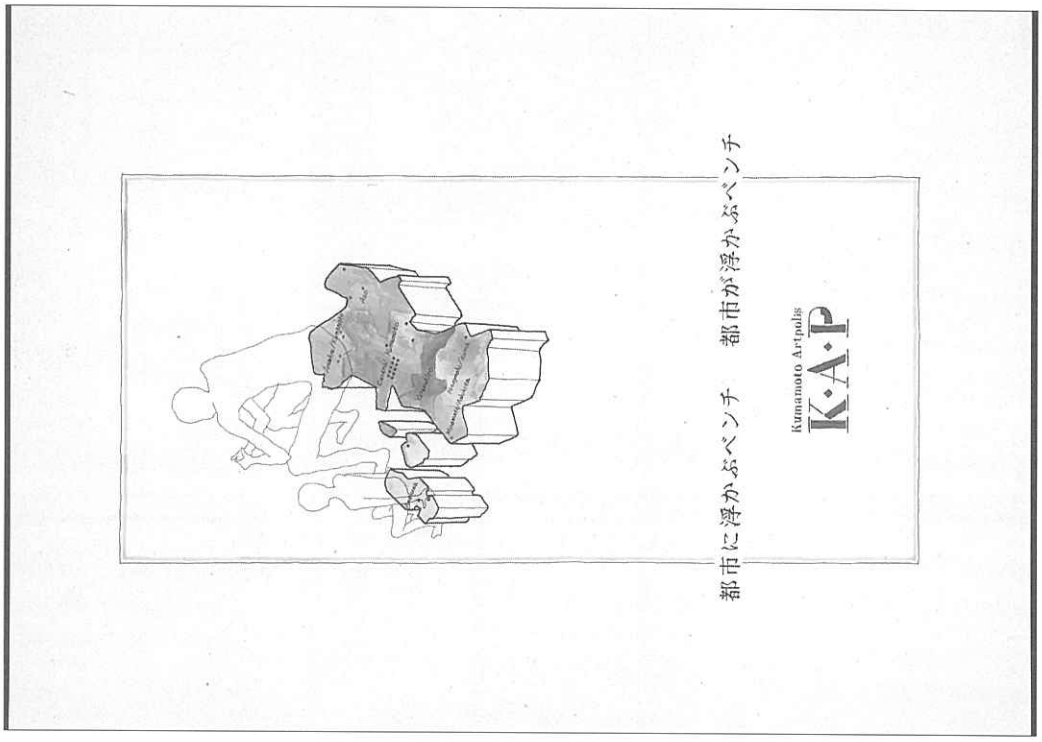
縦

108 福田　寿久



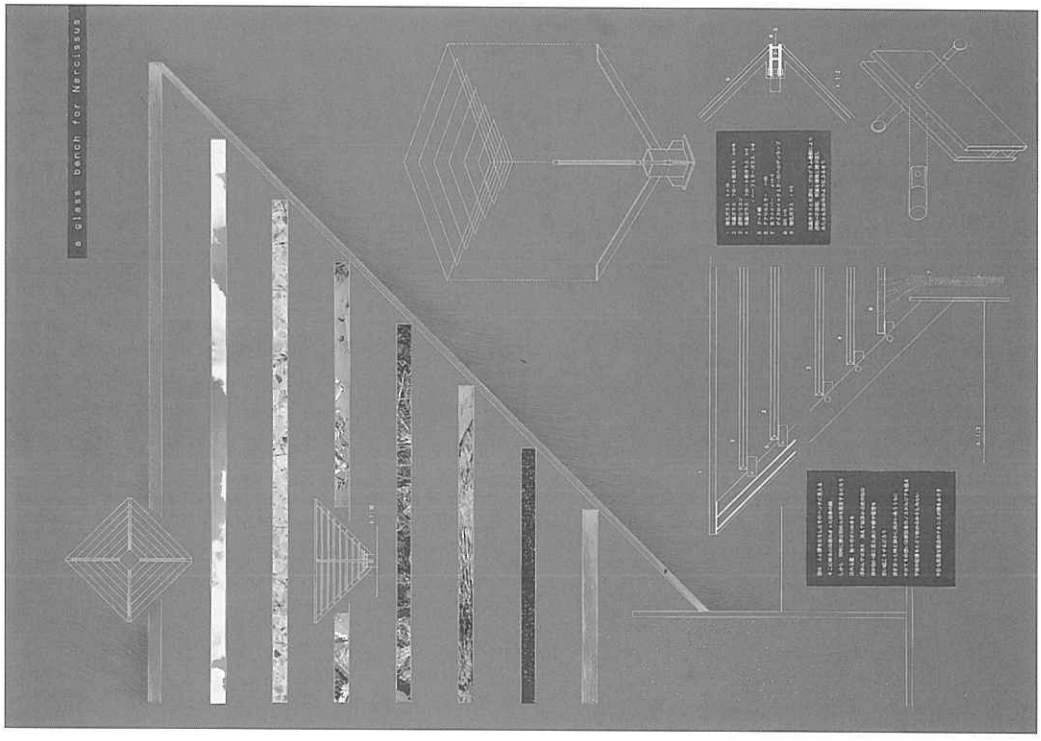
縦

109 永田　敦士



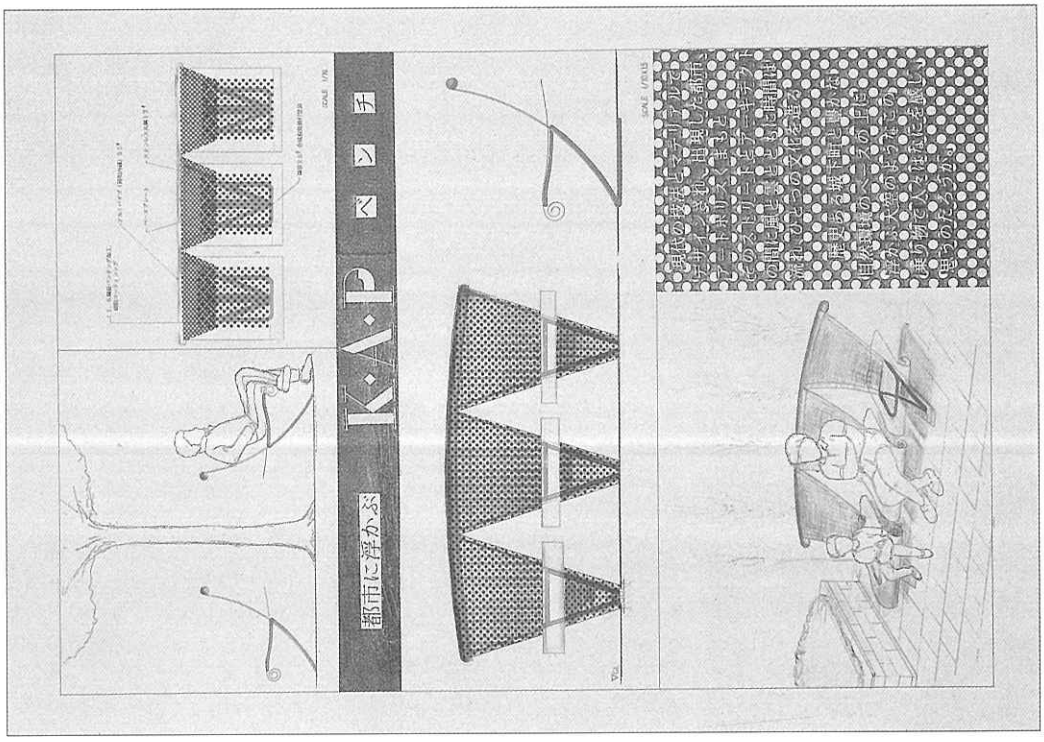
縦

110 塩井かおる



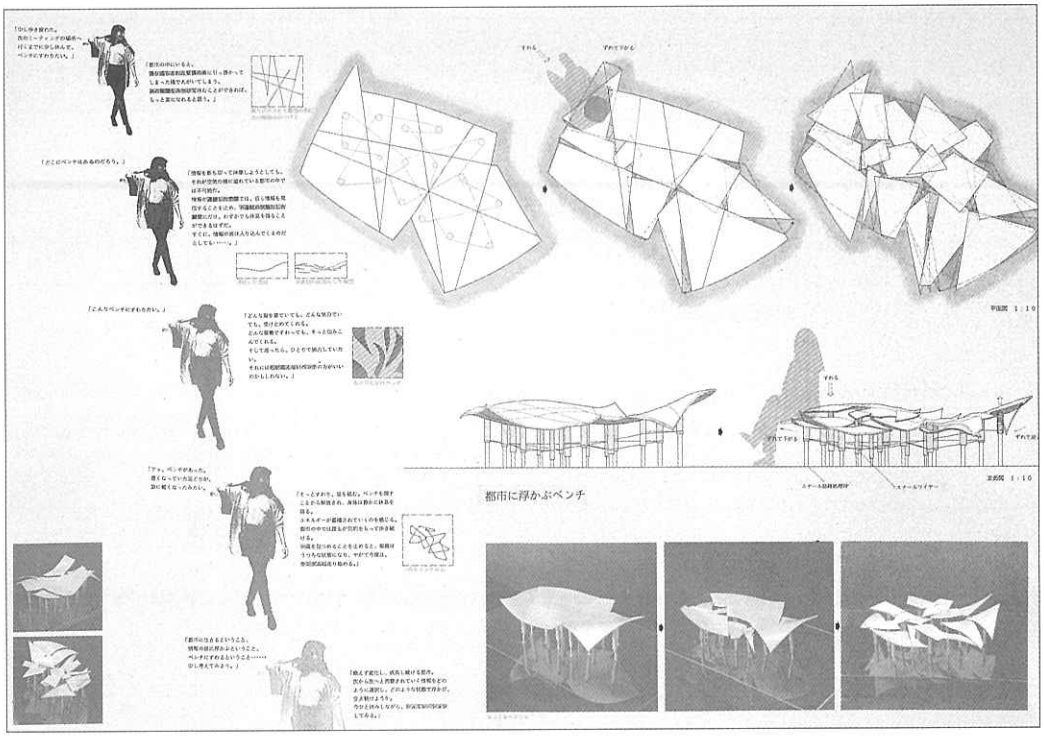
縦

111 庭田　隆一



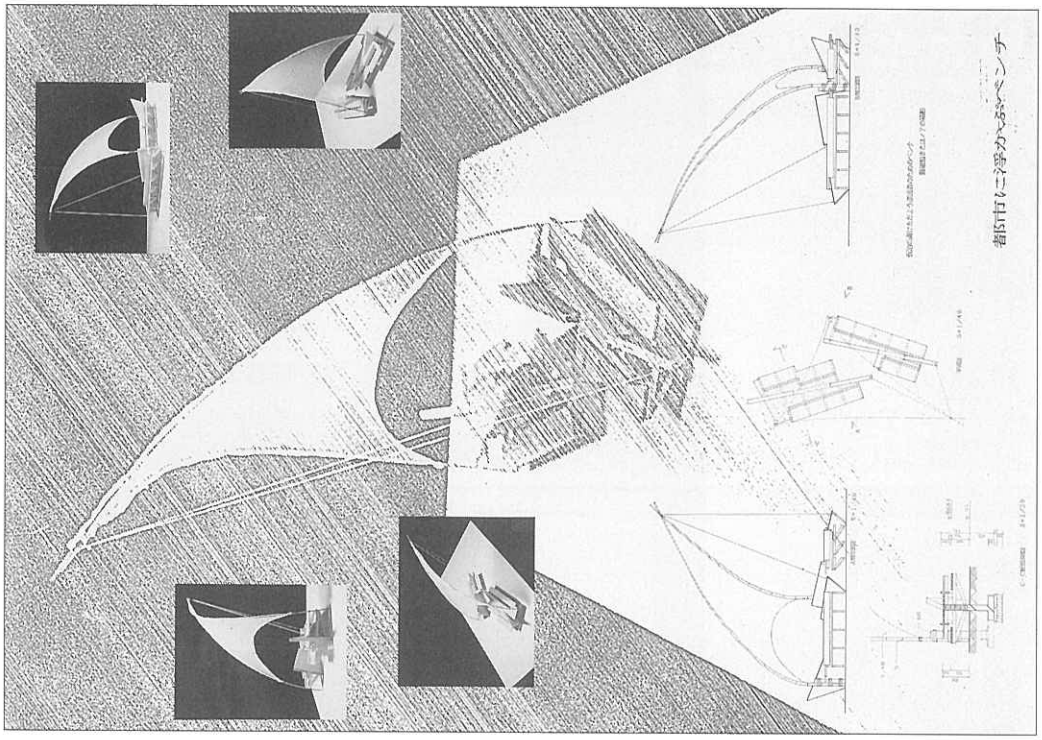
縦

112 細田みぎわ

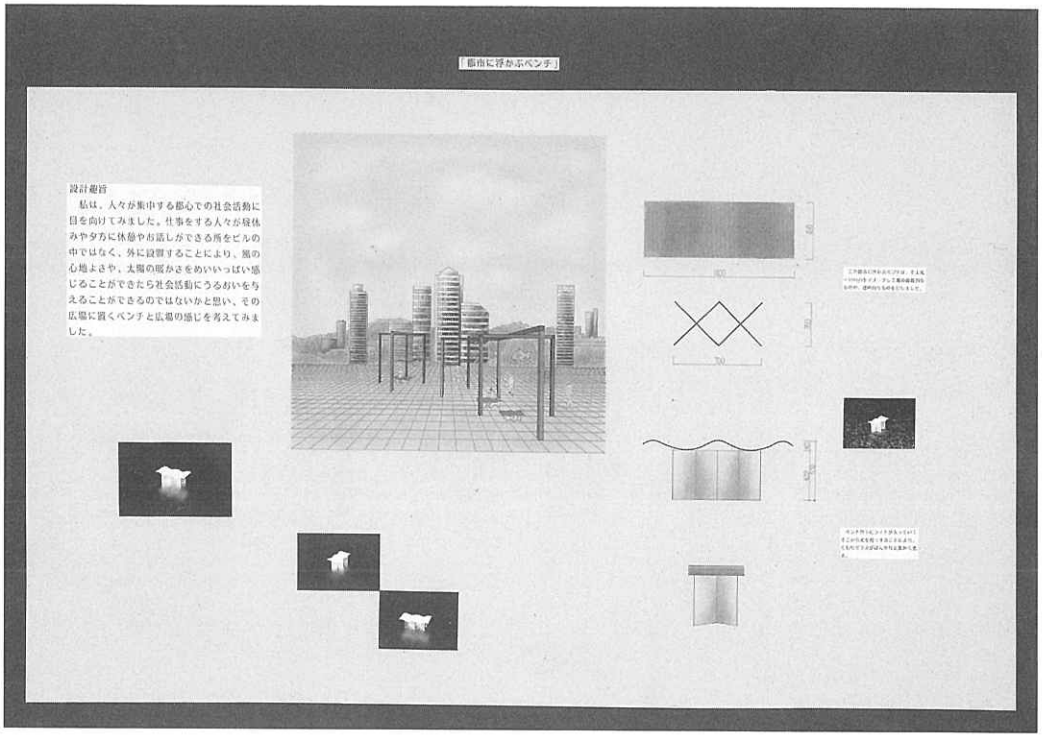


113 武山　智子
武山　　肇

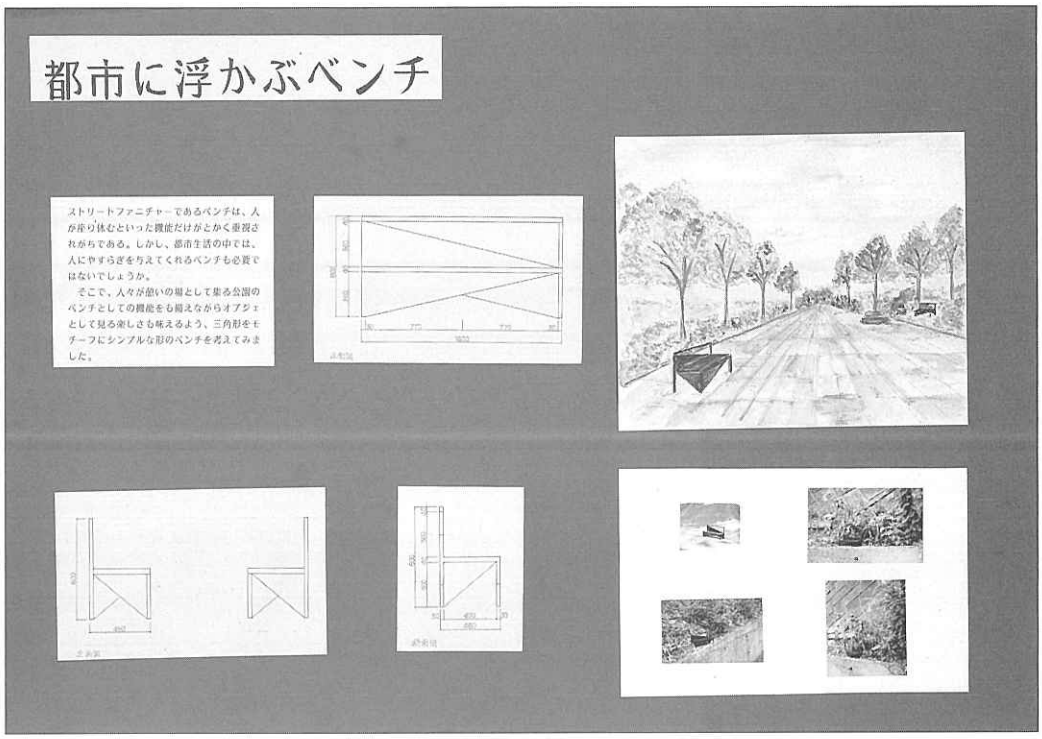
縦



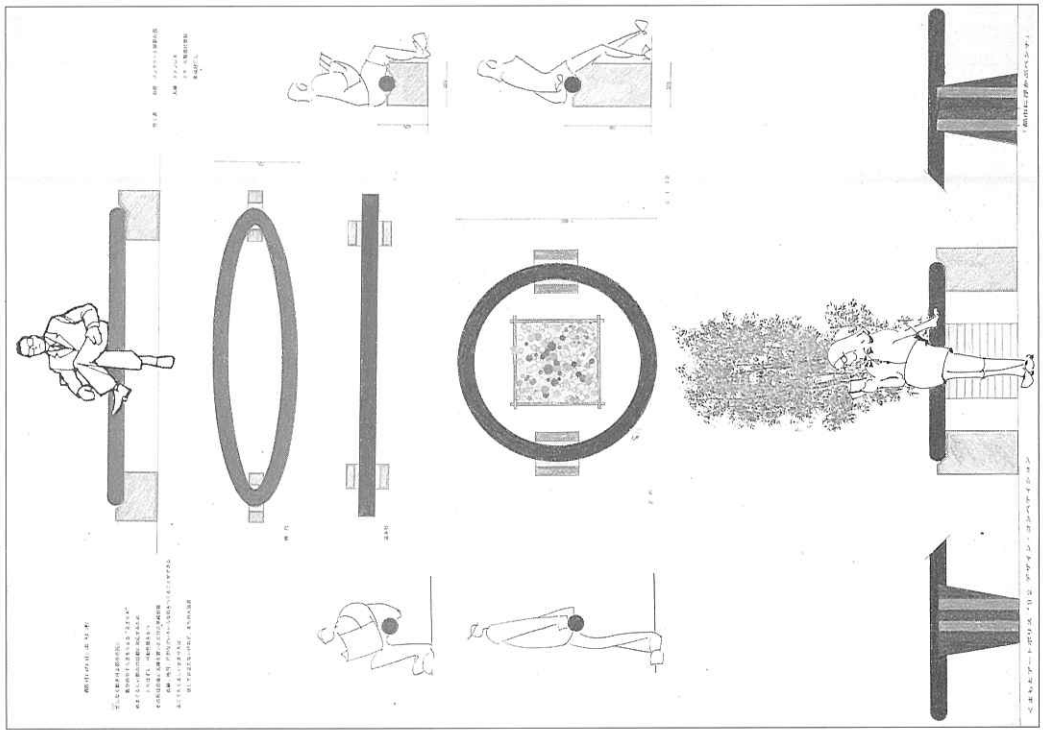
114 守田　洋子



115 太田　千晶

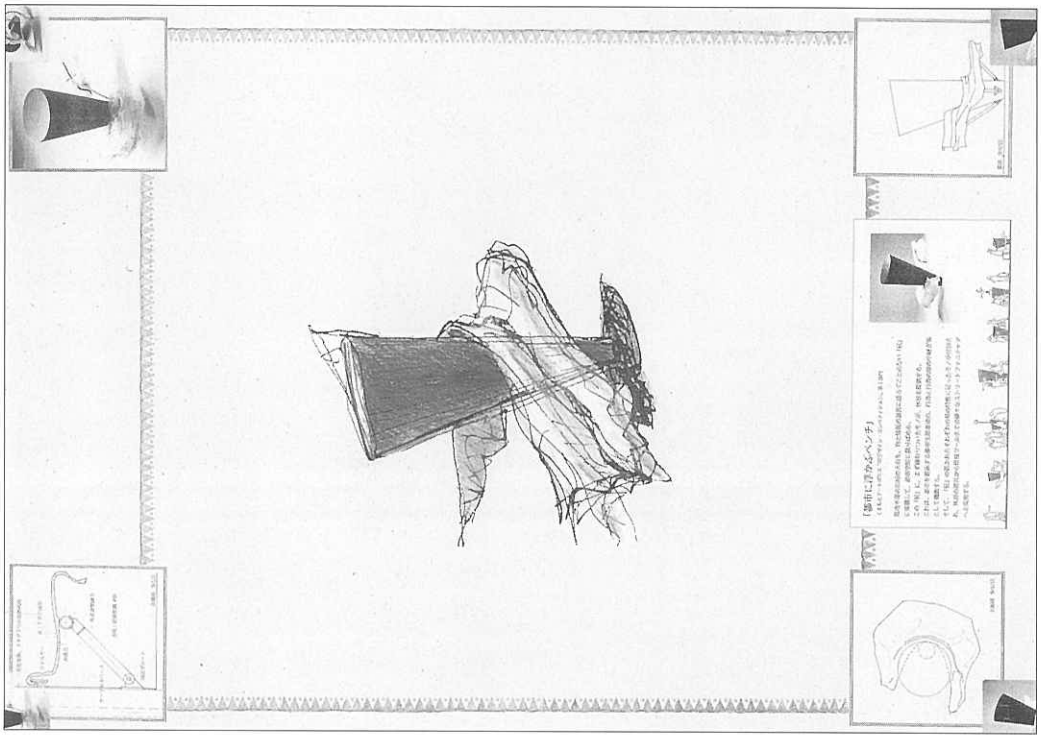


116 栂野　秀一
福田　幸代



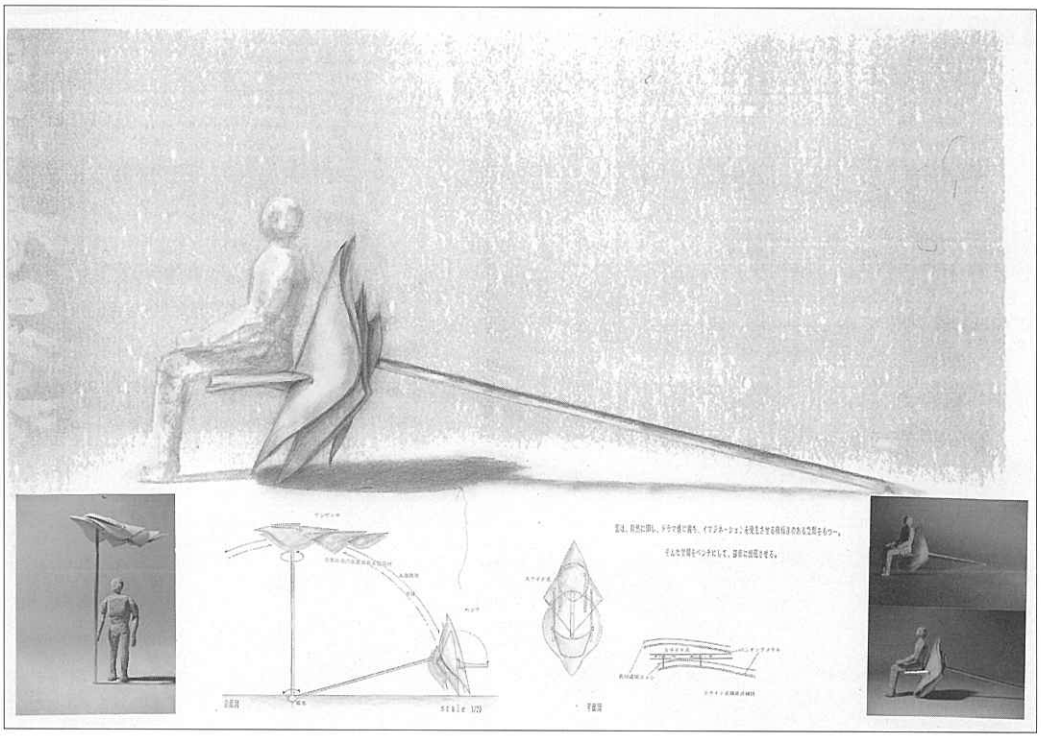
縦

117 翠川　竜矢
朝日　匡子

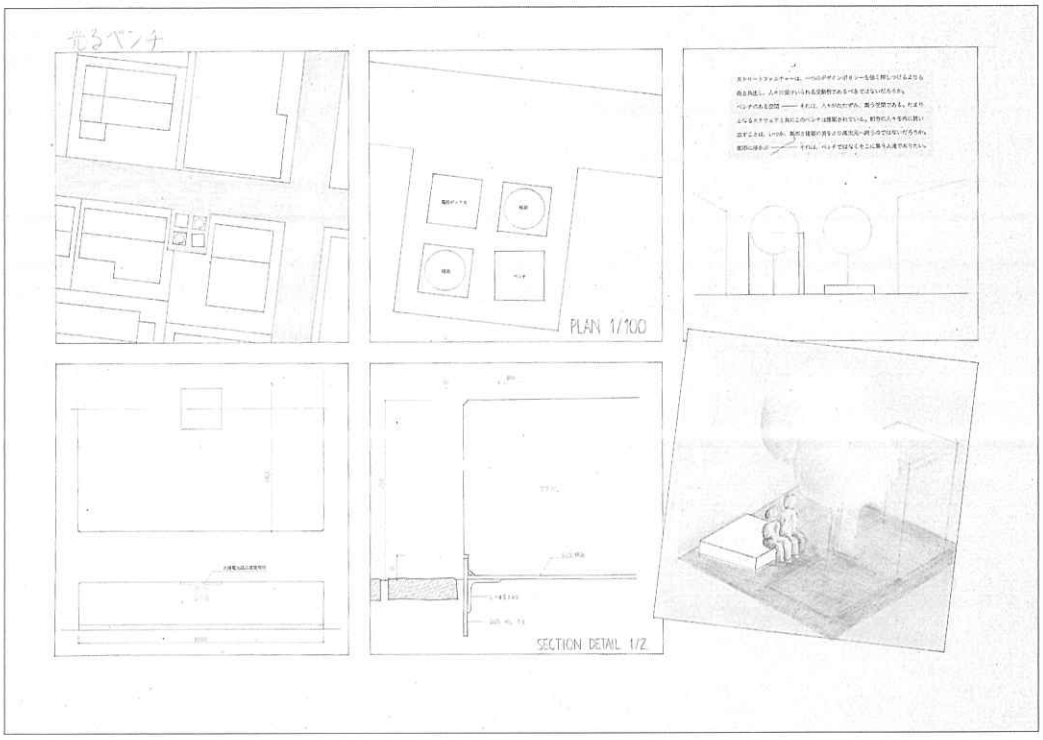


縦

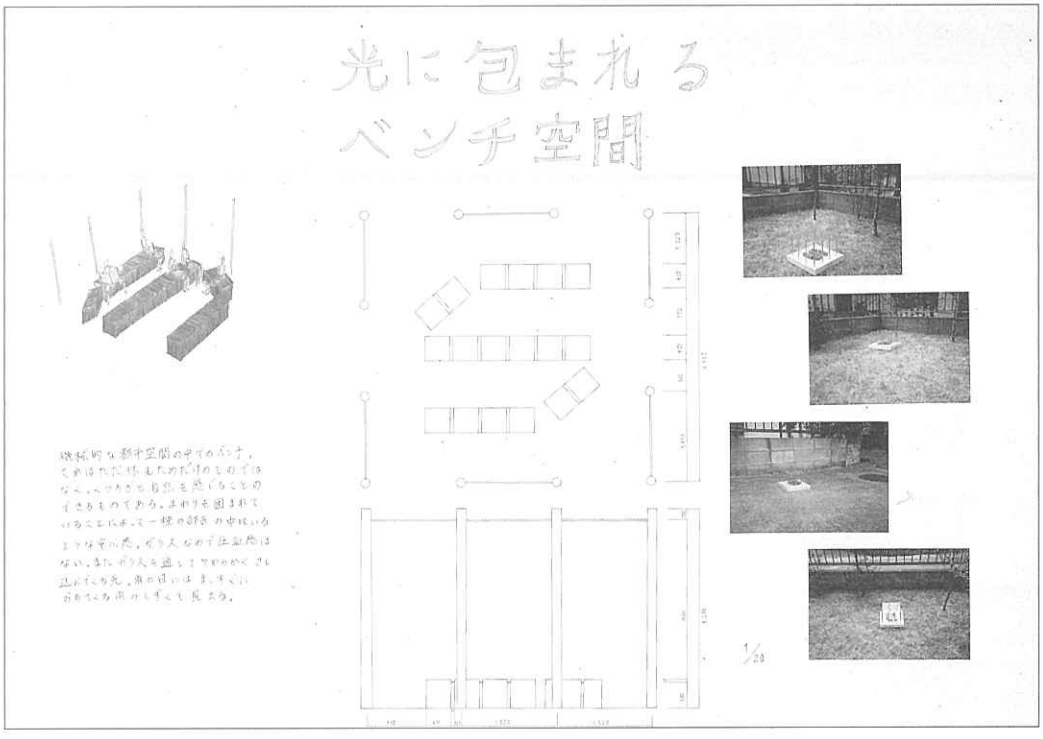
118 吉村　祐輝



119 鰺坂　徹

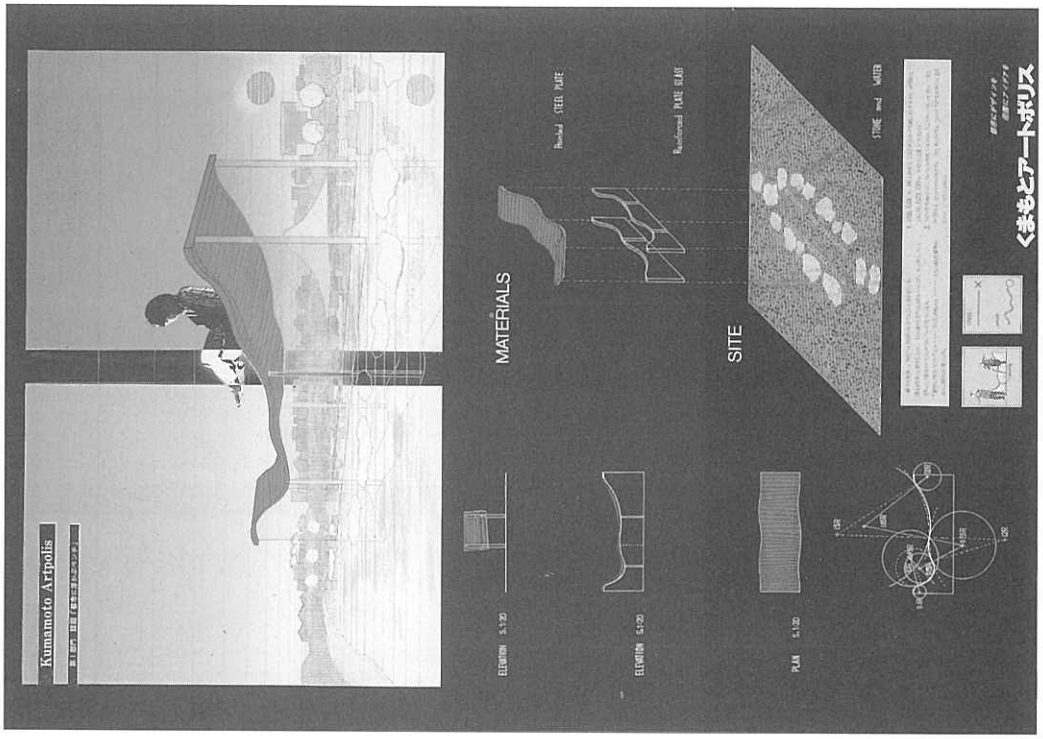


121 木内亜紀子



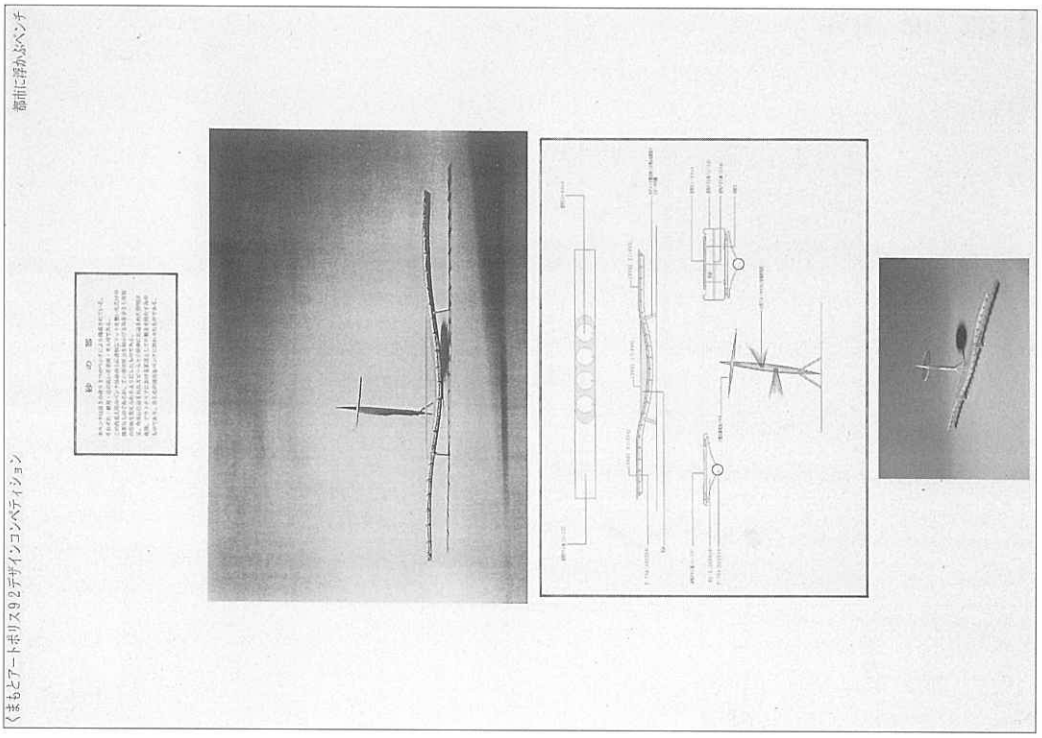
122 田中　俊明

縦

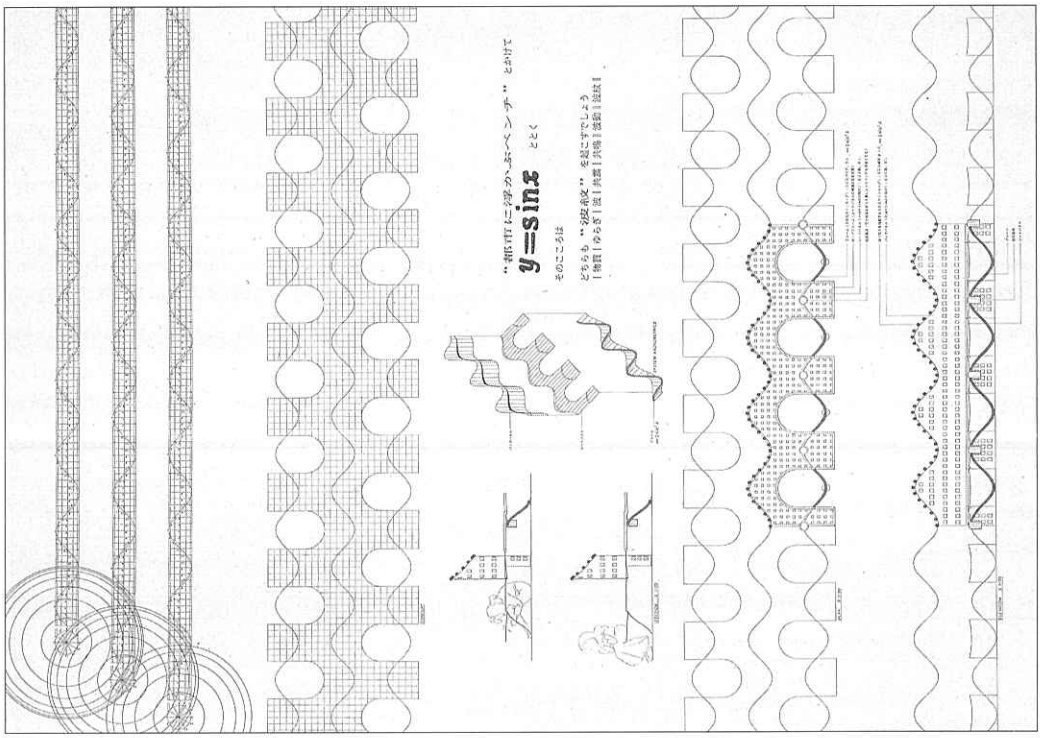


123 有馬　尚孝

縦

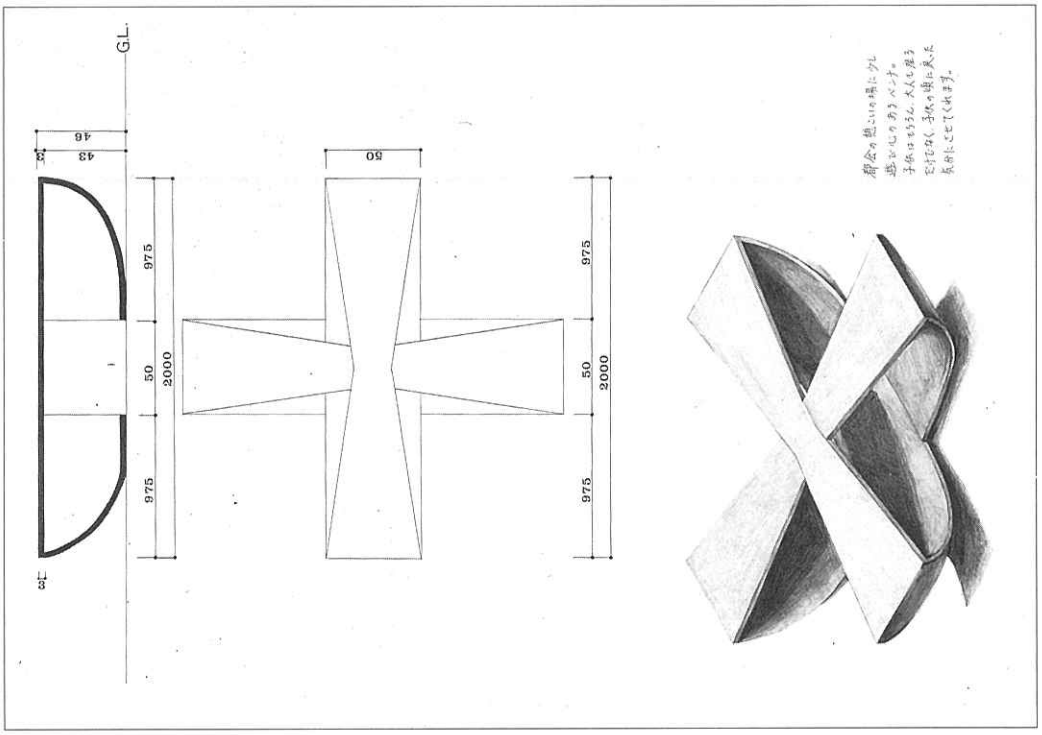


124 中野　康秀



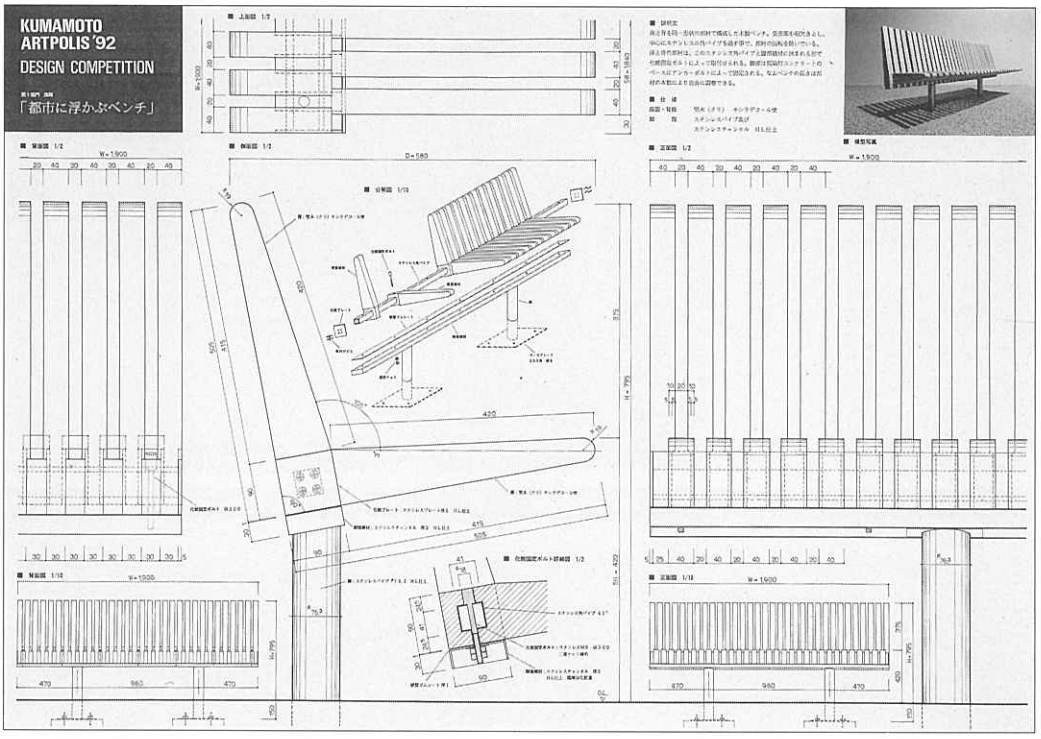
縦

125 小倉　輝美

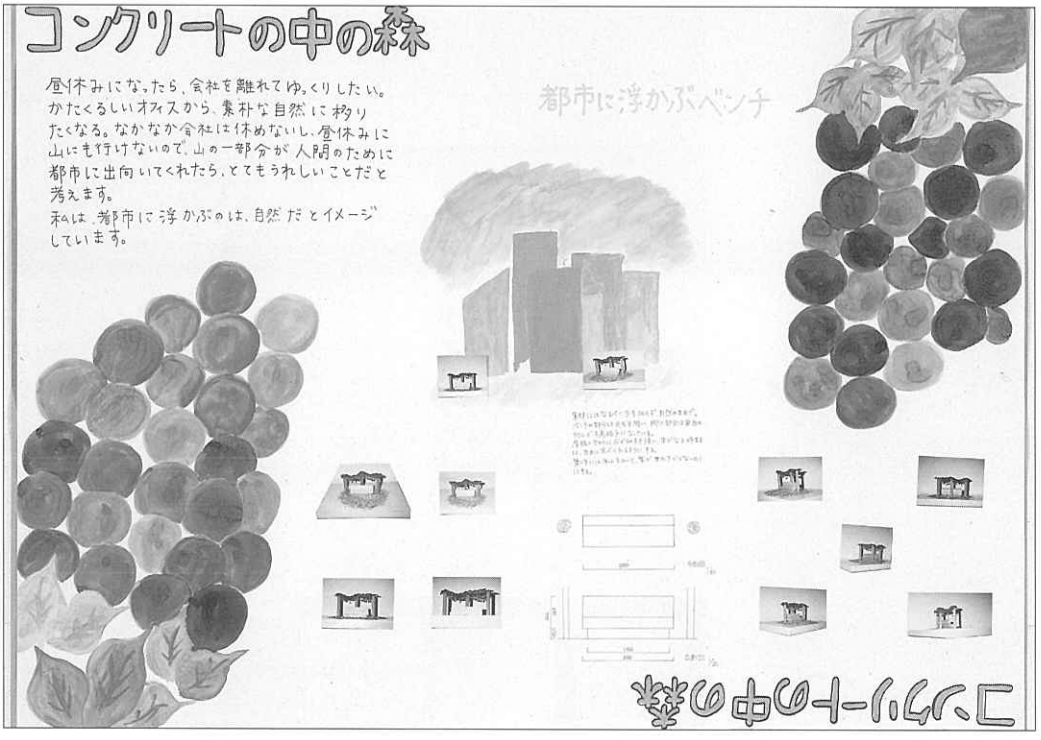


縦

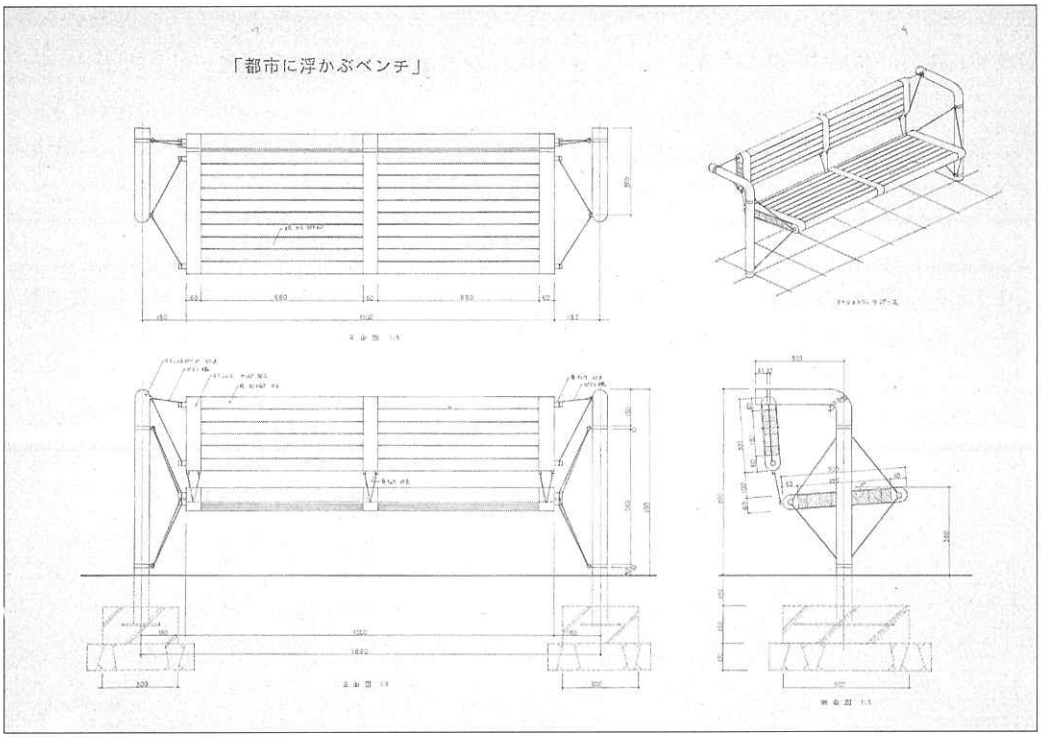
127 紫冨田啓一
岡本　直己
小白　　勇



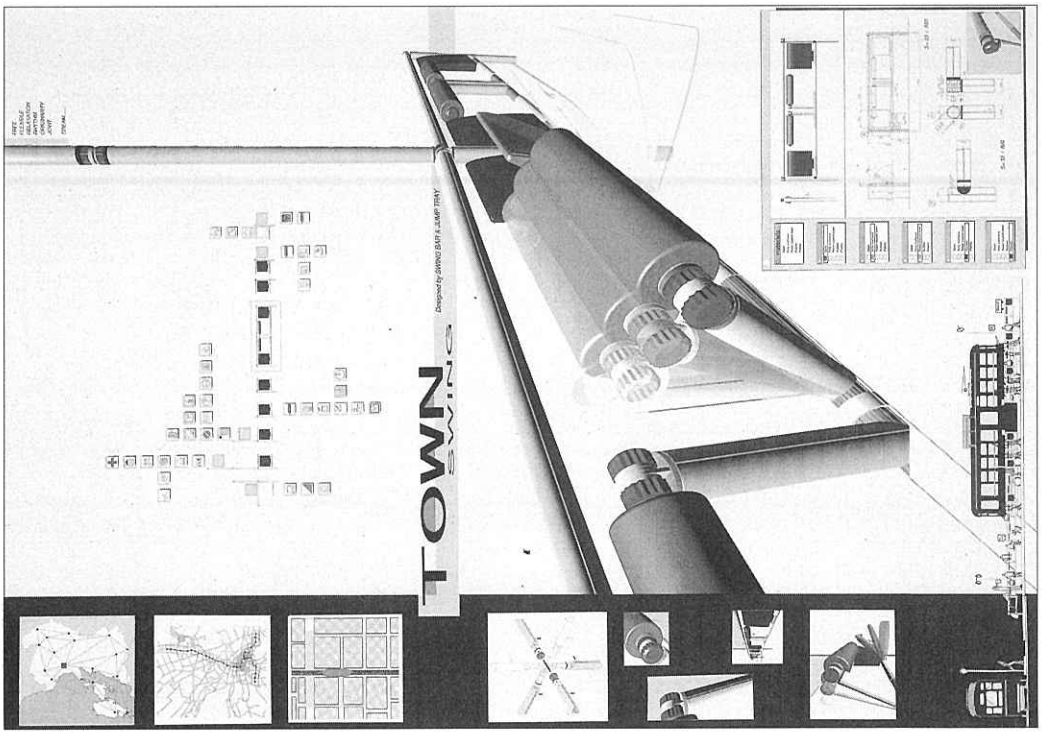
128 鈴木留美子



129 杉浦　利彦

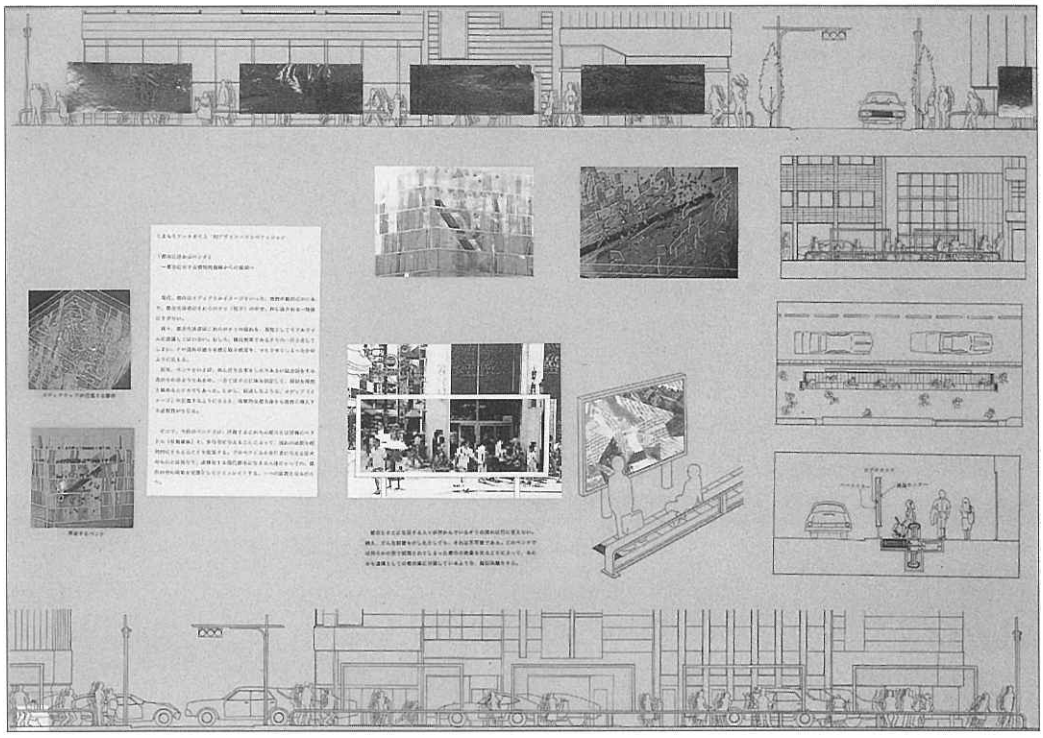


130 鈴木　正史

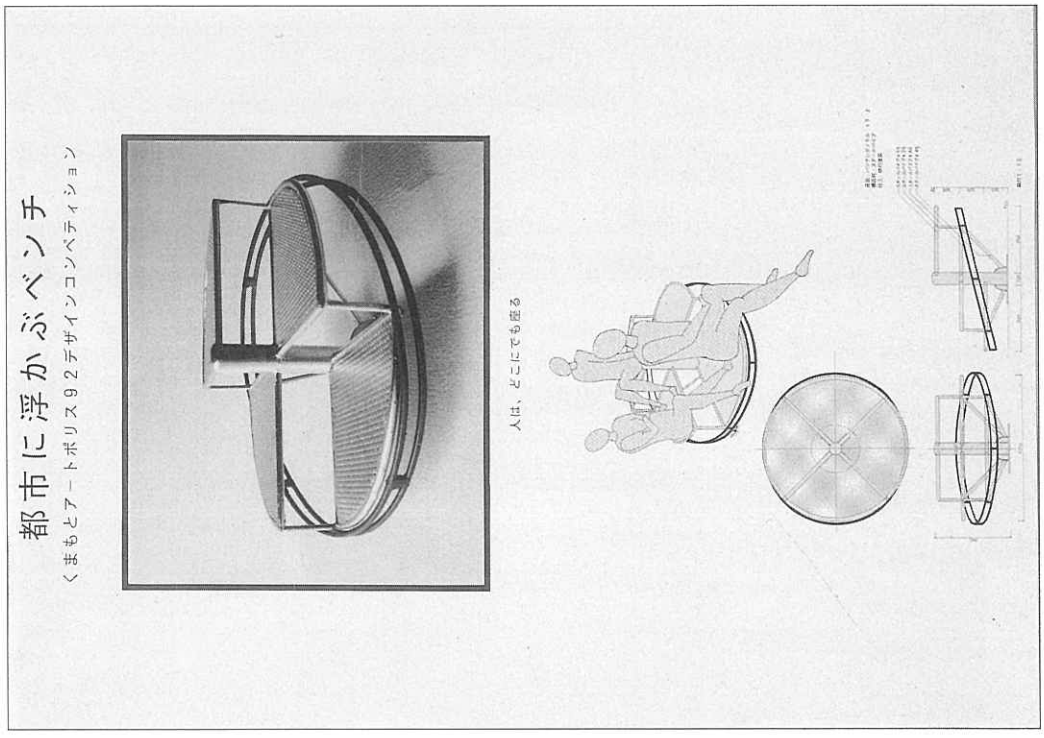


縦

132 砂田絵理子
阿部　仁祐

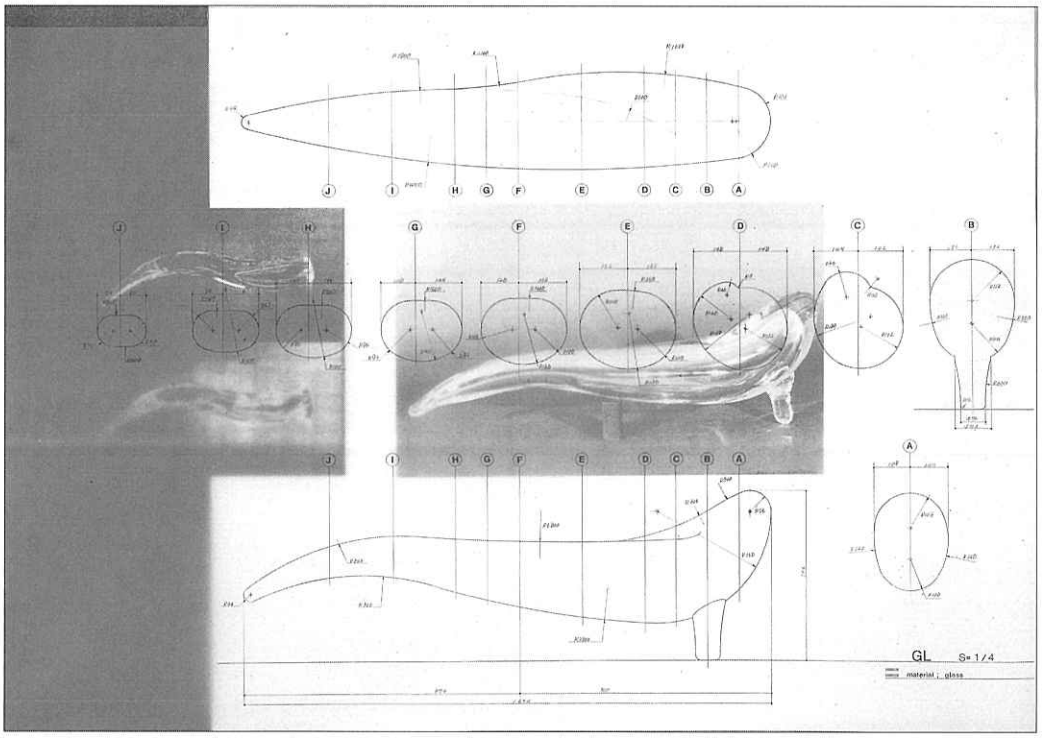


134 友澤　　薫

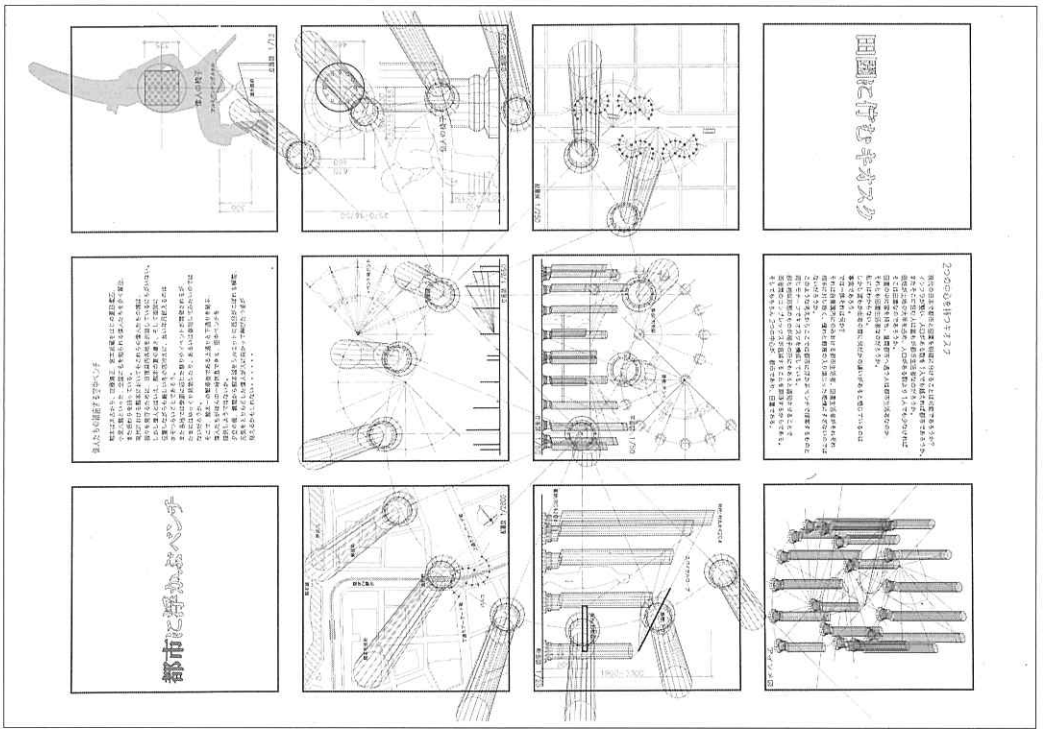


縦

137 古川美智子



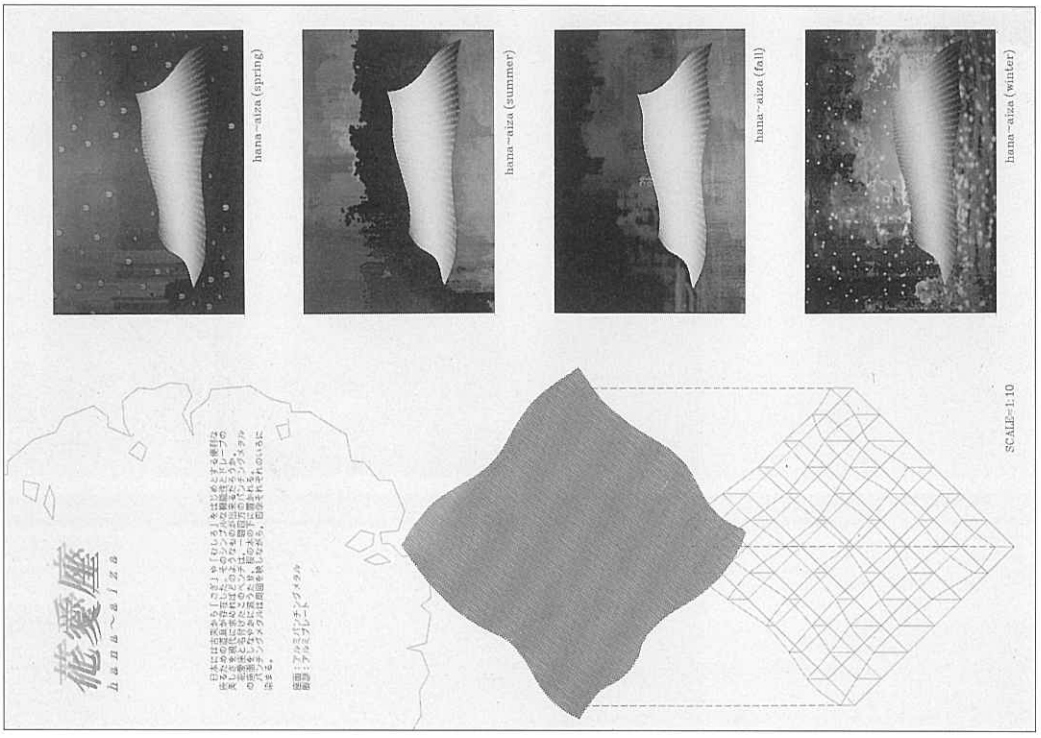
138 菊池　武



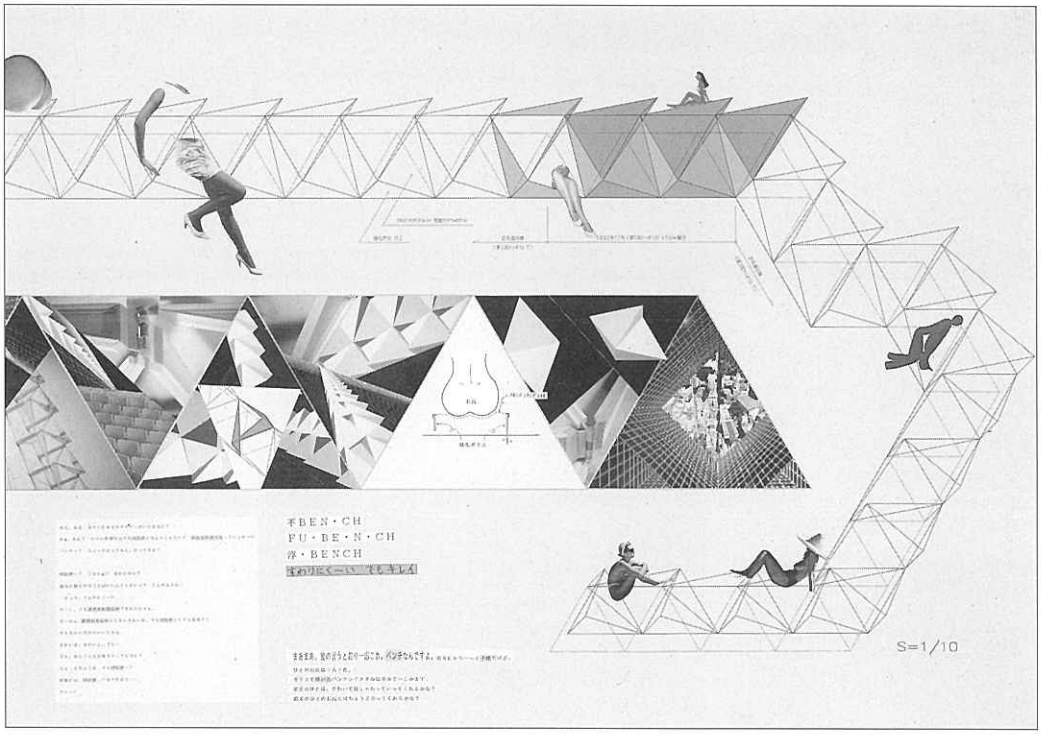
縦

139 梅田　健之

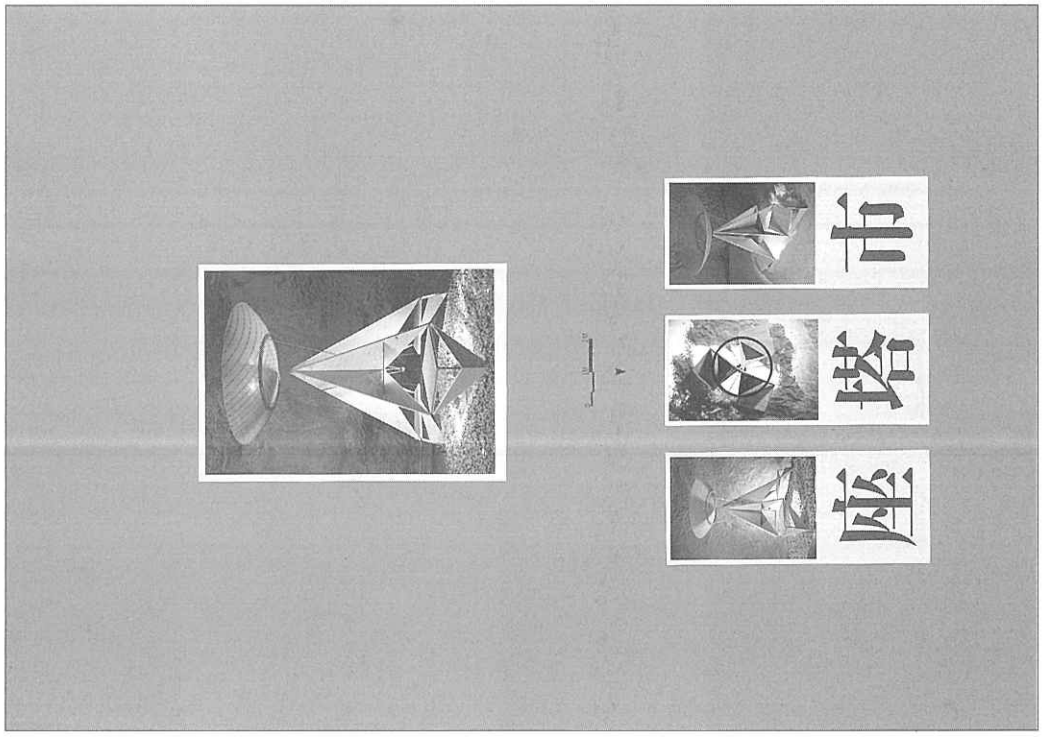
縦



140 吉田　眞
花島　伸幸
芝崎　聡子

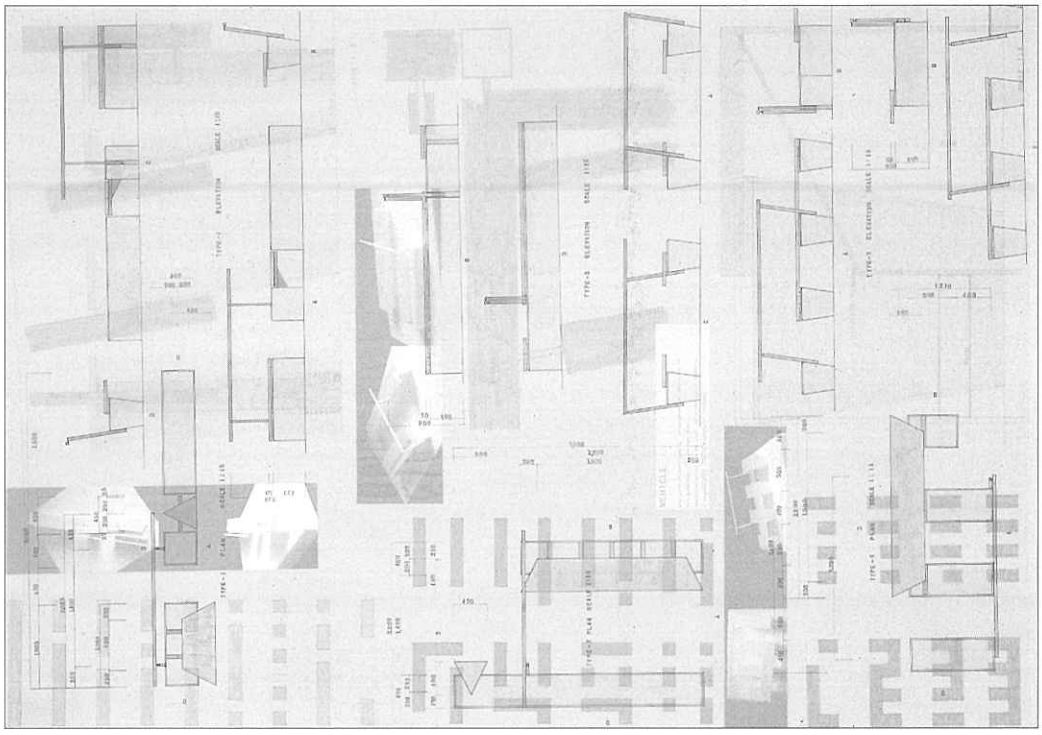


141 杉本　洋文
富永　哲史
中尾　準二
小西　由通
関谷有里子



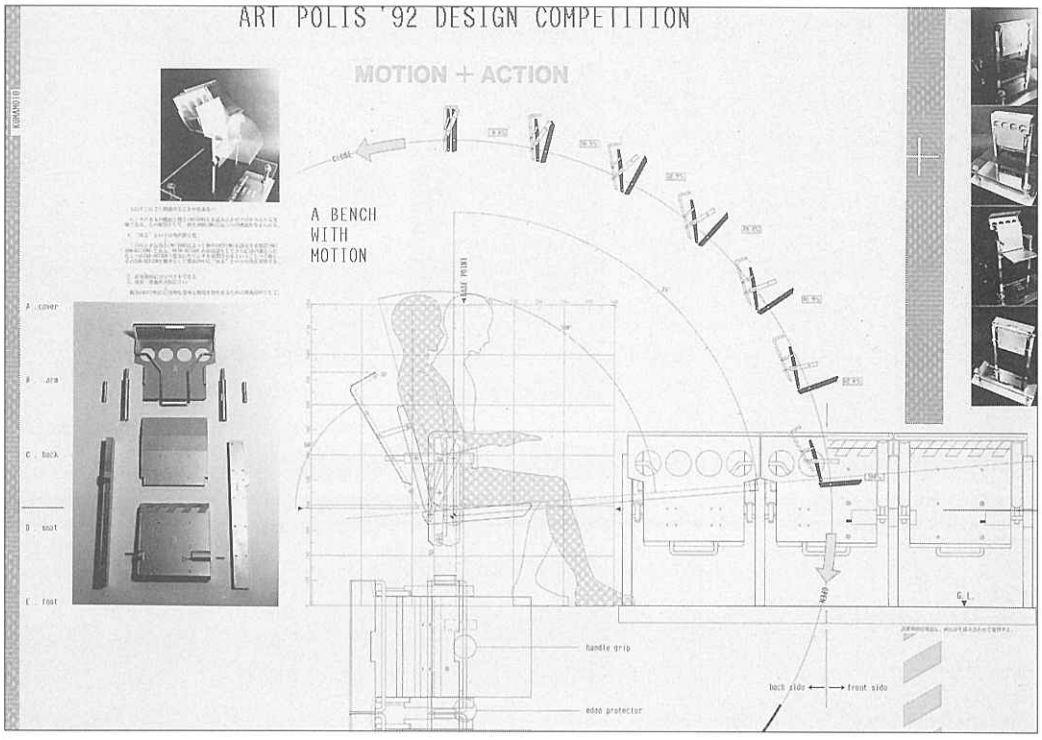
縦

142 若林　秀和

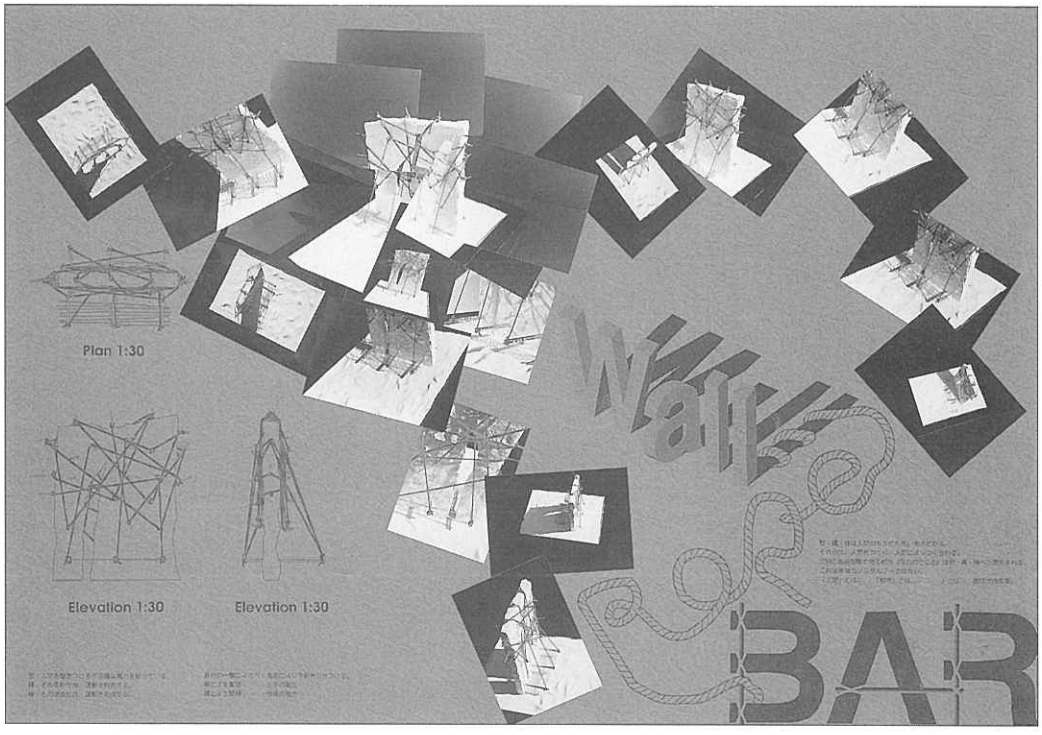


縦

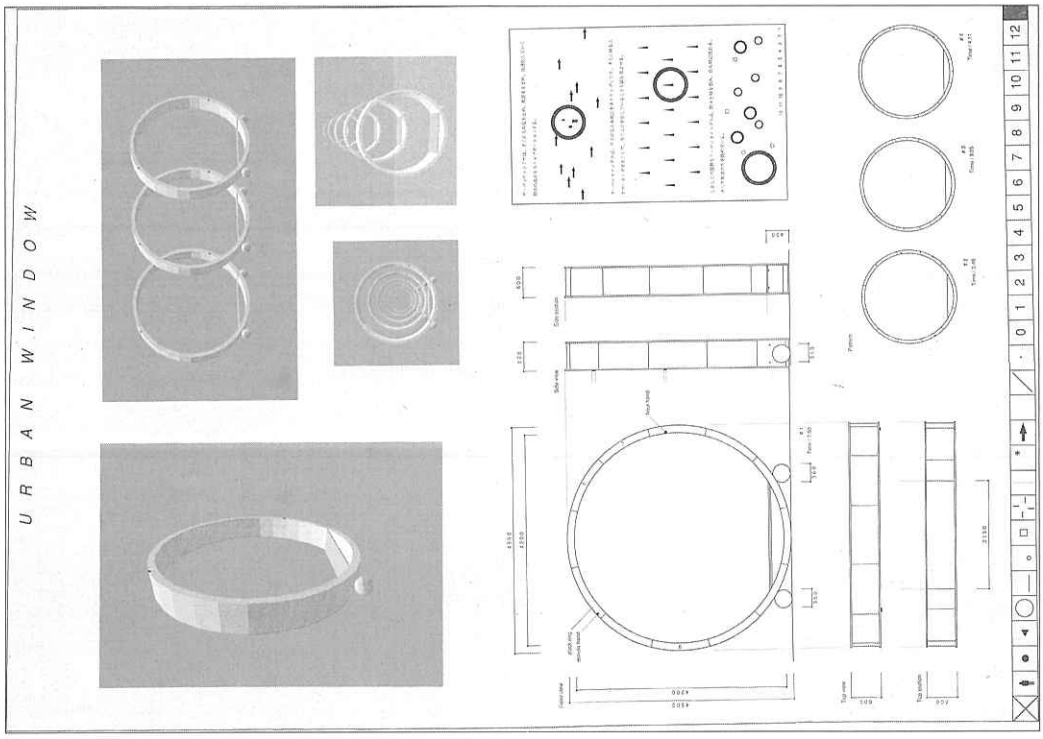
143 有田　佳生



144 伏見　勇一

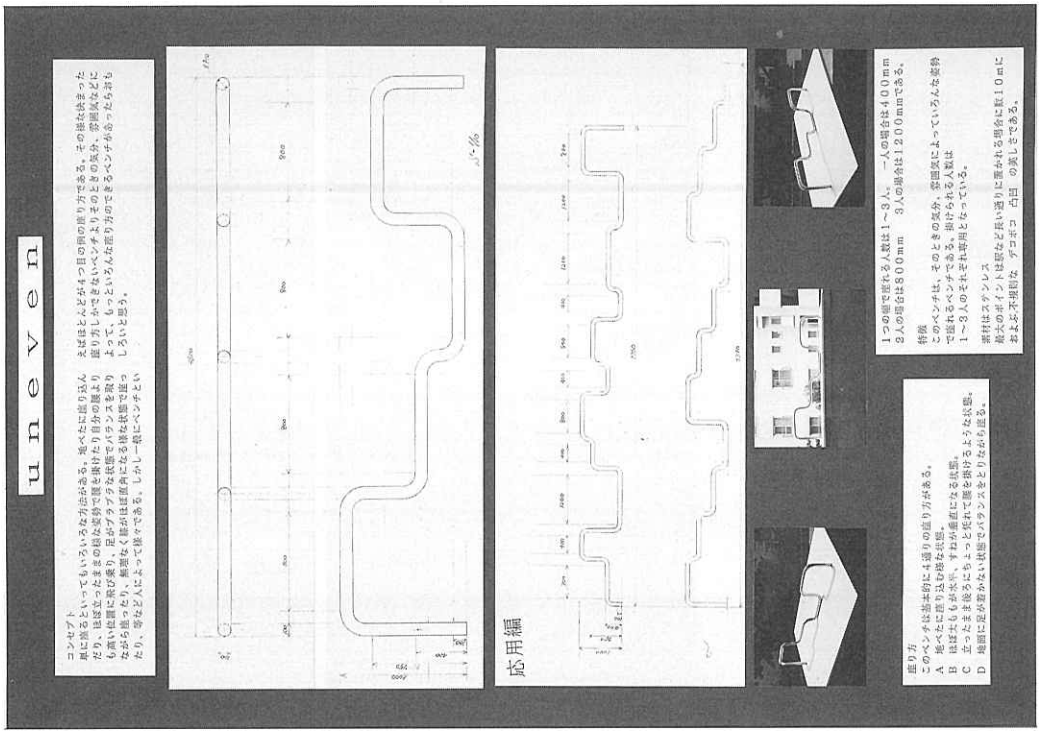


146 高増　佳子



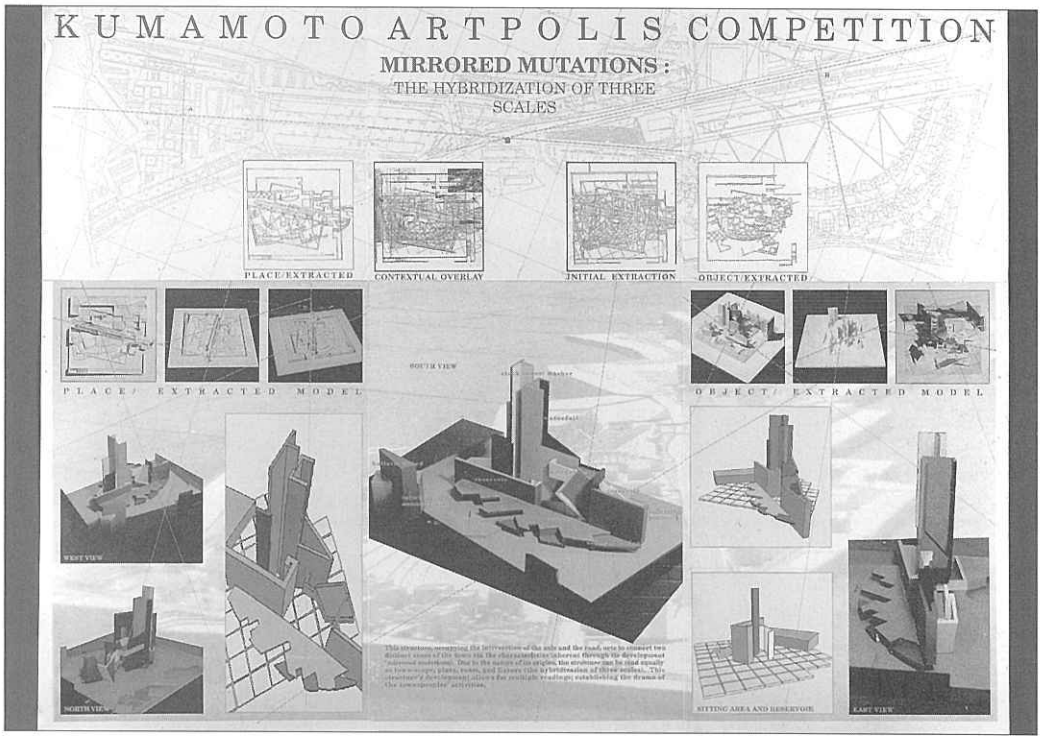
縦

147 三谷　亜星

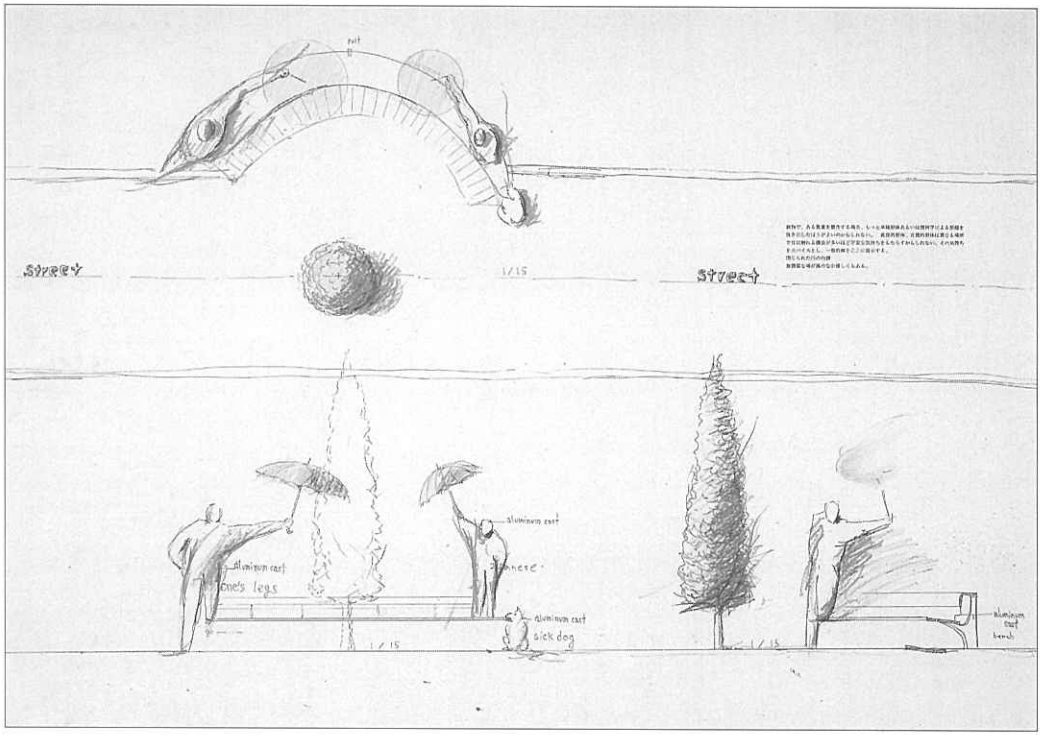


縦

148 Katsuhiko Muramoto
James Anzalone
Michael Drury
Daniel Macek
Sharon Moore
Young Yoon

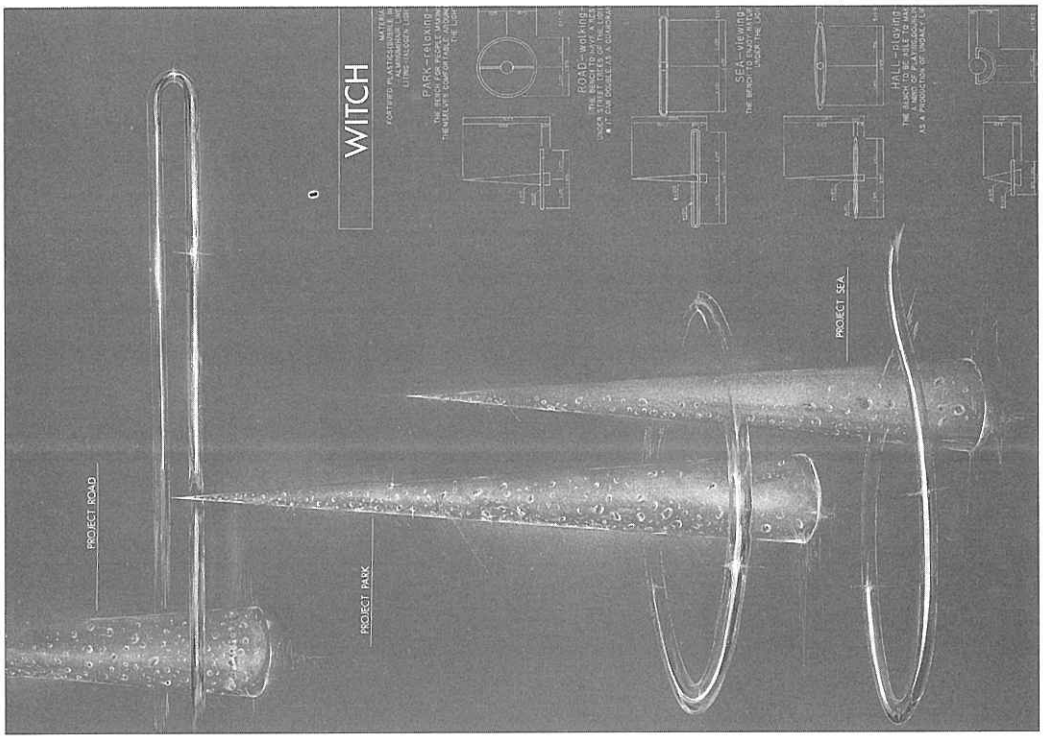
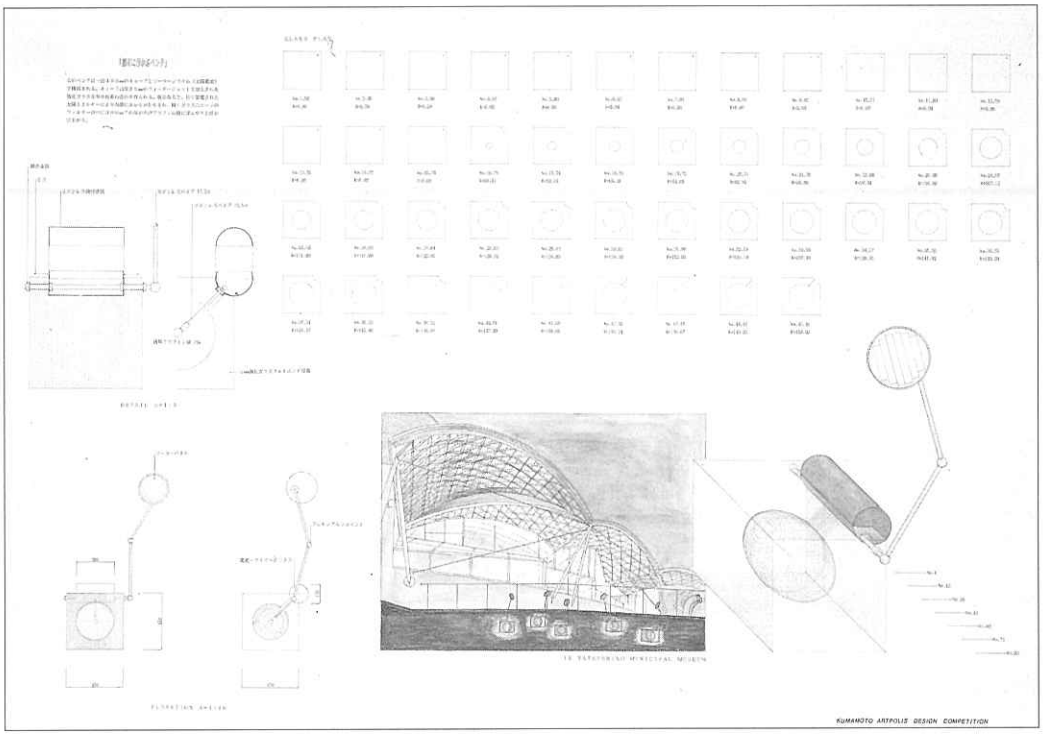


150 森田　洋



151 松野　義久
高山　正樹

縦



152 中平　　勝